

上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告

—VII—

三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)

1983

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

上越新幹線は、東京・新潟間を約1時間半で結ぶ鉄道として計画され、現在、大宮駅始発として開業されております。

この新幹線の建設に先立って埼玉県教育局文化財保護課では、大宮から上里町までの約65.1キロメートルの区間の埋蔵文化財の取扱いについて、日本鉄道建設公団東京新幹線建設局と慎重な協議を重ねましたが、路線決定に際してどうしてもさけられない遺跡があり、やむなく発掘調査を実施し、記録保存をはかりました。

発掘調査は日本鉄道建設公団の委託を受け昭和48年度から54年度までは文化財保護課が実施し、昭和55年度以降は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施いたしました。

本書は上越新幹線熊谷市内所在の三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)遺跡の発掘調査のうち、古墳時代以降の遺構遺物等についての報告書であります。

本書の刊行にあたり多くの方々からの御協力、御指導をいただきました。ここに日本鉄道建設公団熊谷建設所、熊谷市教育委員会及び地元関係者の方々に改めて深く感謝の意を表します。

昭和53年3月

財団法人

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎

例　　言

1. 本書は日本鉄道建設公団上越新幹線建設事業にかかる、埼玉県熊谷市大字三ヶ尻に所在する三ヶ尻天王遺跡・三ヶ尻林（1）遺跡（縄文時代を除く古墳時代以降）の発掘調査報告書である（三ヶ尻天王—委保記第27の273、三ヶ尻林—委保5の1572号）。
2. 発掘調査は埼玉県教育委員会文化財保護課が調整し、日本鉄道建設公団の委託により昭和53・54年度に埼玉県教育委員会が、昭和55年度からは財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。報告書作成作業は同公団より同事業団が昭和57年度に受託し実施した。
3. 発掘調査は埼玉県教育局文化財保護課第三係・財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団があたり、小久保徹・中島宏・佐々木茂（文化財保護課）、星間孝志（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団）が担当した。
4. 出土品の整理及び図表の作成、原稿の執筆については遺構を小久保徹・田中英司・利根川章彦、埴輪を鈴持和夫、土器を利根川章彦、金属器・装身具を田中英司、溝関係を星間孝志が主にあたり文責を文末に記した。
5. 人骨の鑑定については富山医科薬科大学医学部第一解剖学教室森沢佐巖先生にお願いした。
6. 本書の編集は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究第四課があたり、横川好富が監修した。

目 次

序

例 言

I 調査の概要	1
1 発掘調査にいたるまでの経過	1
II 遺跡の立地と環境	6
III 三ヶ尻天王遺跡の概観	11
IV 三ヶ尻天王遺跡の遺構と出土遺物	15
1 古墳と出土遺物	15
2 住居跡と出土遺物	30
3 掘立柱建物跡と出土遺物	52
4 土壙と出土遺物	56
5 その他の遺構と出土遺物	66
V 結 語	70
VI 三ヶ尻林(1)遺跡の概観	75
VII 三ヶ尻林(1)遺跡の遺構と出土遺物	79
1 古墳と出土遺物	79
2 土壙と出土遺物	177
3 溝と出土遺物	199
4 その他の遺構と出土遺物	203
VIII 結 語	204
IX 付 篇	212

挿 図 目 次

第1図 三ヶ尻天王および三ヶ尻林遺跡 の位置と周辺のおもな遺跡	5	第24図 三ヶ尻天王遺跡出土土鏡・磁石	41
第2図 三ヶ尻天王・林遺跡	9	第25図 三ヶ尻天王遺跡出土鉄鏃・刀子 ・鉄鏃・ガラス玉	42
第3図 三ヶ尻天王遺跡グリッド図	12	第26図 三ヶ尻天王遺跡1号掘立柱建物跡	53
第4図 三ヶ尻天王遺跡の造構全体図	13	第27図 三ヶ尻天王遺跡2号掘立柱建物跡	54
第5図 三ヶ尻天王遺跡1号墳全体図お よび断面図	16	第28図 三ヶ尻天王遺跡3号掘立柱建物跡	55
第6図 三ヶ尻天王遺跡2号墳全体図お よび断面図	17	第29図 三ヶ尻天王遺跡長方形土壙の長 軸方位	56
第7図 三ヶ尻天王遺跡3号墳全体図お よび断面図	19	第30図 三ヶ尻天王遺跡土壙全体図およ び断面図(1)	57
第8図 三ヶ尻天王遺跡4号墳全体図お よび断面図	21	第31図 三ヶ尻天王遺跡土壙全体図およ び断面図(2)	58
第9図 三ヶ尻天王遺跡6号墳全体図お よび断面図	22	第32図 三ヶ尻天王遺跡土壙全体図およ び断面図(3)	59
第10図 三ヶ尻天王遺跡5号墳全体図お よび断面図	23	第33図 三ヶ尻天王遺跡土壙全体図およ び断面図(4)	60
第11図 三ヶ尻天王遺跡古墳出土土器	25	第34図 三ヶ尻天王遺跡土壙全体図およ び断面図(5)	61
第12図 三ヶ尻天王遺跡出土須恵器・瓦 拓影図	28	第35図 三ヶ尻天王遺跡土壙全体図およ び断面図(6)	62
第13図 三ヶ尻天王遺跡1号住居跡	32	第36図 三ヶ尻天王遺跡土壙全体図およ び断面図(7)	63
第14図 三ヶ尻天王遺跡2号住居跡	33	第37図 三ヶ尻天王遺跡土壙全体図およ び断面図(8)	64
第15図 三ヶ尻天王遺跡3号住居跡	34	第38図 三ヶ尻天王遺跡土壙全体図およ び断面図(9)	65
第16図 三ヶ尻天王遺跡4号住居跡	34	第39図 三ヶ尻天王遺跡1号溝全体図お よび断面図	66
第17図 三ヶ尻天王遺跡5号住居跡	35	第40図 三ヶ尻天王遺跡1号堅穴跡	67
第18図 三ヶ尻天王遺跡7号住居跡	36	第41図 三ヶ尻林遺跡堀区全体図	76
第19図 三ヶ尻天王遺跡6号住居跡	36	第42図 三ヶ尻林遺跡造構全体図	78
第20図 三ヶ尻天王遺跡住居跡出土土器(1)	57	第43図 三ヶ尻林遺跡1号墳全体図およ	
第21図 三ヶ尻天王遺跡住居跡出土土器(2)	38		
第22図 三ヶ尻天王遺跡住居跡出土土器(3)	39		
第23図 三ヶ尻天王遺跡住居跡・グリッ ド出土土器	40		

び断面図	80	第71図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪	114
第44図 三ヶ尻林遺跡 1号墳石室および 断面図	81	第72図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪	115
第45図 三ヶ尻林遺跡 2号墳全体図およ び断面図	82	第73図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土直刀	116
第46図 三ヶ尻林遺跡 3号墳全体図およ び断面図	83	第74図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土鉄鎌	117
第47図 三ヶ尻林遺跡円筒埴輪凡例(呼称)	84	第75図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土鉄鎌 刀装具・弓金具・刀子	118
第48図 三ヶ尻林遺跡 3号墳出土埴輪	85	第76図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土銅鏡 耳環	119
第49図 三ヶ尻林遺跡 4号墳グリッド図	86	第77図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土切子玉 ガラス小玉	120
第50図 三ヶ尻林遺跡 4号墳全体図およ び断面図	88	第78図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土ガラス 小玉	121
第51図 三ヶ尻林遺跡 4号墳石室および 断面図	92	第79図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土ガラス 小玉	122
第52図 三ヶ尻林遺跡 4号墳石室鏡門正 面図	93	第80図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土土製小 玉	123
第53図 三ヶ尻林遺跡 4号墳礎基底部お よび断面図	96	第81図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土土製小 玉・埋木玉	124
第54図 三ヶ尻林遺跡 4号墳石室内遺物 分布図	97	第82図 三ヶ尻林遺跡 5号墳全体図	145
第55図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪(1)	98	第83図 三ヶ尻林遺跡 5号墳石室および 断面図	146
第56図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪(2)	99	第84図 三ヶ尻林遺跡 5号墳断面図	147
第57図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪(3)	100	第85図 三ヶ尻林遺跡 6号墳全体図およ び断面図	148
第58図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪(4)	101	第86図 三ヶ尻林遺跡 5・6号墳出土埴輪	149
第59図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪(5)	102	第87図 三ヶ尻林遺跡 5号墳出土管玉・ 滑石玉・鉄鎌・刀装具・鉄製品	149
第60図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪(6)	103	第88図 三ヶ尻林遺跡 7号墳全体図およ び断面図	151
第61図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪(7)	104	第89図 三ヶ尻林遺跡 7号墳石室および 断面図	154
第62図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪(8)	105	第90図 三ヶ尻林遺跡 7号墳出土鉄鎌・ 弓金具・耳環	155
第63図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪(9)	106	第91図 三ヶ尻林遺跡 1号箱式石棺およ び断面図	156
第64図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪(10)	107	第92図 三ヶ尻林遺跡 8号墳全体図およ	
第65図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪(11)	108		
第66図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪(12)	109		
第67図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪(13)	110		
第68図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪(14)	111		
第69図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪(15)	112		
第70図 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪(16)	113		

び断面図	157	および断面図(3)	180
第93図 三ヶ尻林遺跡9号墳全体図およ び断面図	158	第112図 三ヶ尻林遺跡A区土壙全体図	
第94図 三ヶ尻林遺跡10号墳全体図およ び断面図	158	および断面図(4)	181
第95図 三ヶ尻林遺跡11号墳全体図およ び断面図	159	第113図 三ヶ尻林遺跡A区土壙全体図	
第96図 三ヶ尻林遺跡12号墳全体図およ び断面図	160	および断面図(5)	182
第97図 三ヶ尻林遺跡14号墳全体図およ び断面図	161	第114図 三ヶ尻林遺跡A区土壙全体図	
第98図 13号墳全体図および断面図	163	および断面図(6)	183
第99図 三ヶ尻林遺跡15号墳全体図およ び断面図	162	第115図 三ヶ尻林遺跡A区土壙全体図	
第100図 三ヶ尻林遺跡13号墳他出土埴 輪	167	および断面図(7)	184
第101図 三ヶ尻林遺跡16号墳全体図お よび断面図	165	第116図 三ヶ尻林遺跡A・E区土壙全 体図および断面図(8)	185
第102図 三ヶ尻林遺跡16号墳出土埴輪 (1)	169	第117図 三ヶ尻林遺跡C区土壙全 体図および断面図(1)	186
第103図 三ヶ尻林遺跡15号墳出土埴輪 (2)	170	第118図 三ヶ尻林遺跡C区土壙全 体図および断面図(2)	187
第104図 三ヶ尻林遺跡16号墳出土埴輪 (3)	171	第119図 三ヶ尻林遺跡C区土壙全 体図および断面図(3)	188
第105図 三ヶ尻林遺跡16号墳出土埴輪 (4)	172	第120図 三ヶ尻林遺跡古墳出土土器(1)	192
第106図 三ヶ尻林遺跡円筒埴輪底部拓 影図(1)	173	第121図 三ヶ尻林遺跡古墳・堅穴通構 出土土器(2)	193
第107図 三ヶ尻林遺跡円筒埴輪底部拓 影図(2)	174	第122図 三ヶ尻林遺跡古墳出土土器(3)	194
第108図 三ヶ尻林遺跡長方形土壙の長 軸方位	177	第123図 三ヶ尻林遺跡出土須恵器拓影 図(1)	195
第109図 三ヶ尻林遺跡A区土壙全体図 および断面図(1)	178	第124図 三ヶ尻林遺跡出土須恵器拓影 図(2)	196
第110図 三ヶ尻林遺跡A区土壙全体図 および断面図(2)	179	第125図 三ヶ尻林遺跡A区6号土壙A ・B出土鉄釘	200
第111図 三ヶ尻林遺跡A区土壙全体図		第126図 三ヶ尻林遺跡C区1・2号溝 全体図および断面図	200
		第126図 三ヶ尻林遺跡D区1・2号溝 全体図および断面図	201
		第127図 三ヶ尻林遺跡D区1・2号溝 出土遺物	202
		第128図 三ヶ尻林遺跡円筒埴輪計測グ ラフ	207
		別図1 三ヶ尻林遺跡4号墳墳丘全体図およ び断面図	

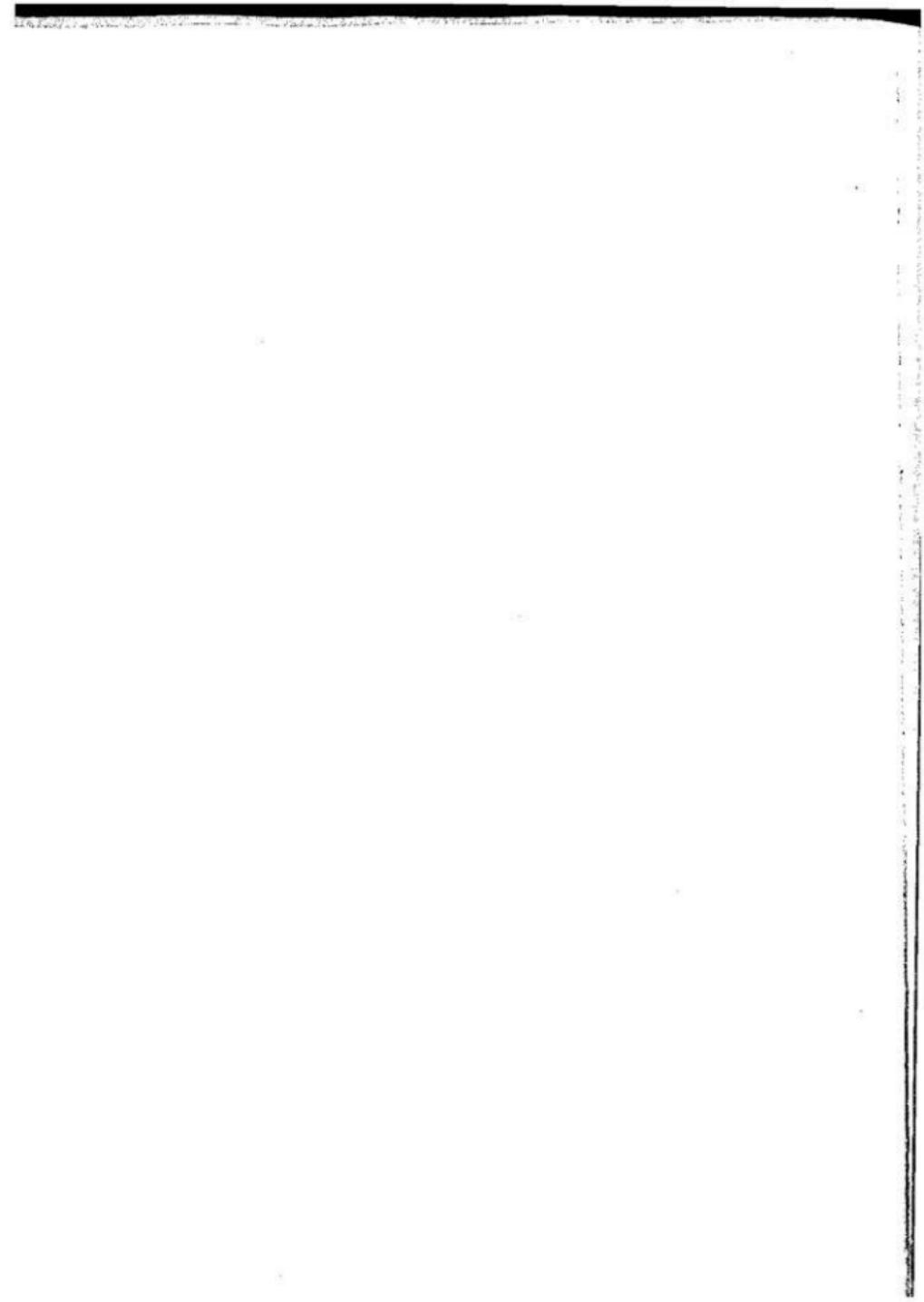
表 目 次

第1表 三ヶ尻天王遺跡 1号墳出土土器 観察表	26	ラス玉計測表	51
第2表 三ヶ尻天王遺跡 2号墳出土土器 観察表	26	第15表 三ヶ尻天王遺跡の土壤計測表	67
第3表 三ヶ尻天王遺跡 3号墳出土土器 観察表	27	第16表 三ヶ尻林遺跡 3号墳出土埴輪観 察表	86
第4表 三ヶ尻天王遺跡 1号住出土土器 観察表	42	第17表 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埴輪観 察表	131
第5表 三ヶ尻天王遺跡 2号住出土土器 観察表	45	第18表 三ヶ尻林遺跡 4号墳・7号墳・ 土壤出土金属部計測表	134
第6表 三ヶ尻天王遺跡 3号住出土土器 観察表	45	第19表 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土玉計測 表	135
第7表 三ヶ尻天王遺跡 4号住出土土器 観察表	45	第20表 三ヶ尻林遺跡 5号墳・6号墳 (グリッド)出土埴輪観察表	150
第8表 三ヶ尻天王遺跡 5号住出土土器 観察表	46	第21表 三ヶ尻林遺跡 13号墳・L-1・ 1号溝他出土埴輪観察表	168
第9表 三ヶ尻天王遺跡 6号住出土土器 観察表	47	第22表 三ヶ尻林遺跡 16号墳出土埴輪観 察表	175
第10表 三ヶ尻天王遺跡 1号竪穴出土土 器観察表	49	第23表 三ヶ尻林遺跡の土壤計測表	189
第11表 三ヶ尻天王遺跡 4号竪穴出土土 器観察表	49	第24表 三ヶ尻林遺跡 1号墳出土土器観 察表	194
第12表 三ヶ尻天王遺跡 グリッド出土土 器観察表	50	第25表 三ヶ尻林遺跡 3号墳出土土器観 察表	197
第13表 三ヶ尻天王遺跡出土土鉢・砾石 計測表	51	第26表 三ヶ尻林遺跡 4号墳出土土器観 察表	197
第14表 三ヶ尻天王遺跡出土鐵製品・ガ ルバニウム観察表		第27表 三ヶ尻林遺跡 7号墳出土土器観 察表	198
		第28表 三ヶ尻林遺跡 1号竪穴造構出土 土器観察表	198

図版目次

- 図版1 三ヶ尻天王遺跡3号墳
三ヶ尻天王遺跡3号墳
- 図版2 三ヶ尻天王遺跡4号墳
三ヶ尻天王遺跡4号墳石室
- 図版3 三ヶ尻天王遺跡5号墳
三ヶ尻天王遺跡6号墳
- 図版4 三ヶ尻天王遺跡1号住居跡
三ヶ尻天王遺跡2号住居跡
- 図版5 三ヶ尻天王遺跡4号住居跡
三ヶ尻天王遺跡5号住居跡
- 図版6 三ヶ尻天王遺跡6号住居跡
三ヶ尻天王遺跡7号住居跡
- 図版7 三ヶ尻天王遺跡1号掘立柱建物跡
三ヶ尻天王遺跡2号溝・74号土塙
- 図版8 三ヶ尻天王遺跡5号土塙
三ヶ尻天王遺跡8号土塙
三ヶ尻天王遺跡76号土塙
三ヶ尻天王遺跡78号土塙
三ヶ尻天王遺跡84号土塙
三ヶ尻天王遺跡85号土塙
- 図版9 三ヶ尻天王遺跡出土土器
- 図版10 三ヶ尻天王遺跡出土鉄製品
- 図版11 三ヶ尻林遺跡A区全景
三ヶ尻林遺跡区全景
- 図版12 三ヶ尻林遺跡1号墳
三ヶ尻林遺跡1号墳石室
- 図版13 三ヶ尻林遺跡3号墳
三ヶ尻林遺跡4号墳調査前
- 図版14 三ヶ尻林遺跡4号墳
三ヶ尻林遺跡4号墳全景
- 図版15 三ヶ尻林遺跡4号墳
三ヶ尻林遺跡4号墳
- 図版16 三ヶ尻林遺跡4号墳
三ヶ尻林遺跡4号墳
- 図版17 三ヶ尻林遺跡4号墳
三ヶ尻林遺跡4号墳埴輪列
- 図版18 三ヶ尻林遺跡4号墳遺物出土状態
三ヶ尻林遺跡4号墳遺物出土状態
- 図版19 三ヶ尻林遺跡4号墳石室内遺物出土状態
三ヶ尻林遺跡4号墳直刀2
- 図版20 三ヶ尻林遺跡4号墳直刀2・4
三ヶ尻林遺跡4号墳人骨・銅釧
- 図版21 三ヶ尻林遺跡4号墳土製小玉
三ヶ尻林遺跡4号墳土層断面
- 図版22 三ヶ尻林遺跡4号墳土層断面
三ヶ尻林遺跡4号墳土層断面
- 図版23 三ヶ尻林遺跡4号墳
三ヶ尻林遺跡4号墳
- 図版24 三ヶ尻林遺跡4号墳
三ヶ尻林遺跡4号墳
- 図版25 三ヶ尻林遺跡4号墳
三ヶ尻林遺跡4号墳砾床部
- 図版26 三ヶ尻林遺跡5号墳
三ヶ尻林遺跡5号墳石室
- 図版27 三ヶ尻林遺跡C区全景
三ヶ尻林遺跡7号墳
- 図版28 三ヶ尻林遺跡7号墳
三ヶ尻林遺跡1号箱式石棺
- 図版29 三ヶ尻林遺跡A区3号土塙
三ヶ尻林遺跡A区27号土塙
三ヶ尻林遺跡A区30~37・39号土塙
三ヶ尻林遺跡A区50号土塙
三ヶ尻林遺跡A区54号土塙

- 三ヶ尻林遺跡C区3～5号土壙
図版30 三ヶ尻林遺跡D区1号壙
三ヶ尻林遺跡14号壙
図版31 三ヶ尻林遺跡出土土器
図版32 三ヶ尻林遺跡4号壙出土円筒埴輪
図版33 三ヶ尻林遺跡4号壙出土人物埴輪
図版34 三ヶ尻林遺跡4号壙出土人物埴輪
図版35 三ヶ尻林遺跡4号壙出土馬形埴輪
図版36 三ヶ尻林遺跡4号壙出土家形埴輪
図版37 三ヶ尻林遺跡4号壙出土形象埴輪
図版38 三ヶ尻林遺跡4号壙出土鉢・太刀
図版39 三ヶ尻林遺跡8号・13号壙・グリッド
出土埴輪
図版40 三ヶ尻林遺跡16号壙出土埴輪
図版41 三ヶ尻林遺跡16号壙出土埴輪
図版42 三ヶ尻林遺跡4号壙出土直刀
三ヶ尻林遺跡4号壙出土刀装具・刀子
図版43 三ヶ尻林遺跡4号壙出土鐵劍
三ヶ尻林遺跡4号壙出土装身具
図版44 三ヶ尻林遺跡4号壙出土埋木玉・ガラ
ス小玉・土製小玉
三ヶ尻林遺跡5号・7号壙出土遺物



I 調査の概要

1. 発掘調査に至るまでの経過

上越新幹線の基本計画は、東京都と新潟県を結ぶものであるが、昭和46年10月、工事実施計画が認可されたのは、埼玉県大宮市、新潟県新潟市間 270 キロメートルである。

この上越新幹線のルートは、昭和46年10月「埼玉県行政推進対策委員会軌道交通部会」(以下「軌道交通部会」という。)において日本鉄道建設公団から、建設概要について説明があった。

昭和46年10月に、埼玉県開発部長から文化財保護課長あて新幹線建設計画図(5万分の1)が送付されこれによると、いくつかの遺跡にかかることが明瞭であった。

昭和46年11月軌道交通部会において、新幹線の建設に対して各課の意見が聴取された。文化財保護の面では、国及び県指定文化財及び周知の遺跡については、路線計画からはずすこと、また、その他の埋蔵文化財包蔵地については、損傷を最小限度にとどめてルートを決定するよう要望した。

日本鉄道建設公団では、埋蔵文化財の所在と、その取扱いについては、特に注意が払われ、昭和41年4月1日付けで、文化財保護委員会(現文化庁)と公団とで締結した「日本鉄道建設公団の事業施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づいて、他の関連公共事業とは切りはなして協議を進めることとし、昭和48年3月1日、日本鉄道建設公団・県開発部軌道交通対策課及び文化財保護課の三者で具体的な打合せ会を開催した。

この打合せ会では、公団側から、上越新幹線建設予定地内の文化財の調査について、次のとおり依頼があった。

- 1 2500分の1の平面図を用意するので路線予定地内の文化財の所在調査を実施して欲しいこと。
- 2 路線内に係る埋蔵文化財包蔵地については、知事部局の踏査とは別に調査事業を県教育委員会に委託したいこと。

昭和47年11月初旬、日本鉄道建設公団東京新幹線建設局から2500分の1の計画路線図(幅員50m)が届けられ、11月20日・21日の両日、文化財保護課第二係の職員で、伊奈町側と上里町側からの2班に分かれて遺跡分布確認調査を実施した。なお、場所によっては、時期的に地上観察の困難なところもあり、それは後日に残し、一応計画路線内における文化財の分布状況を把握することができた。

そして、昭和48年3月19日付け文教第1167号で、埼玉県教育委員会教育長から、日本鉄道建設公団東京新幹線建設局長あて、「上越新幹線建設用地(伊奈～上里)内における文化財の所在及び取扱いについて」以下の文書を上越新幹線文化財分布図一式(幅員50mによる)を添付して送付した。

- 1 県指定旧跡については、現状変更届を提出すること。
- 2 埋蔵文化財については、記録保存の措置を講ずること。
- 3 埋蔵文化財の保存にあたっては、遺漏のないよう当局(文化財保護課)と十分協議すること。

昭和48年5月上越新幹線工事工程と文化財の調査について、日本鉄道建設公団東京新幹線建設局

遺跡番号	遺跡名称	所在地	種別	時代
伊奈 1 号	(西浦遺跡)	北足立郡伊奈町大字小室字西浦4962-1	包含地	绳文
伊奈 2 号	(上新田遺跡)	北足立郡伊奈町大字小室字上新田5062	集落跡	绳文
伊奈 3 号	(北邊跡)	北足立郡伊奈町大字大針字原679	集落跡	先土器・绳文
伊奈 4 号	(原遺跡)	北足立郡伊奈町大字大針字原	集落跡	绳文
吹上 1 号	(石田堤・台遺跡)	北足立郡吹上町袋字堤根・台字353	堤・集落跡	戰国・平安
熊谷 1 号	(三ヶ尻林遺跡)	熊谷市大字三ヶ尻字林3389	円墳	古墳
深谷 1 号	(鶴島遺跡)	深谷市大字柏合字鶴島468	集落跡	奈良・平安
深谷 2 号	(島之上遺跡)	深谷市大字柏合字島之上1165	集落跡	绳文
深谷 3 号	(出口遺跡)	深谷市大字柏合字拾三塚1089-1	集落跡	绳文
岡部 1 分	(芝山遺跡)	大里郡岡部町大字芝山292-4	集落跡	绳文
岡部 2 号	(伊勢塚遺跡)	大里郡岡部町大字後藤沢字伊勢塚252-1	集落跡	绳文・古墳
岡部 3 号	(東光寺裏遺跡)	大里郡岡部町大字後藤沢字新井566	集落跡	绳文・古墳
岡部 4 分		大里郡岡部町大字後森沢	集落跡	古墳
本庄 1 号	(古川端遺跡)	本庄市大字栗崎字古川端1108	集落跡	绳文・古墳
本庄 2 号	(東谷遺跡)	本庄市大字栗崎字東谷149-3	集落跡	古墳
本庄 3 号	(前山 2 号墳)	本庄市大字北隅字前山2139	円墳	古墳
本庄 4 分	(下田遺跡)	本庄市大字東富字下田181	集落跡	古墳・奈良
本庄 5 号	(源跡遺跡)	本庄市大字今井字源跡647-2	集落跡	古墳
上里 1 号		児玉郡上里町大字東五明	円墳	古墳
本庄 A 号	莊小太郎頬家墓	本庄市大字栗崎	県指定旧跡	

との打合せ会が開催された。その席上公園側から、伊奈町地内については、昭和48年度中には用地交渉等が不可能であること。深谷 1 ~ 2 号~岡部 1 号、本庄 1 ~ 5 号遺跡については、昭和48年度中に発掘調査を実施して欲しい旨の要望があった。また、文化財保護側では、石田堤及び熊谷 1 号遺跡については、別途協議すること、との 2 点について公園に申し入れを行うと同時に、現体制で、48年度中に、公園の要望する発掘調査の全てについて実施することは不可能であることも合せて報告した。

昭和48年9月14日付け、東建用三第985号で、東京新幹線建設局長から、県教育委員会を経由して文化庁長官あて「上越新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財保有地の取扱いについて」の協議が行なわれると同時に、東京新幹線建設局長から埼玉県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財の発掘調査を埼玉県教育委員会に委託したい」との協議がなされた。

そして、昭和48年11月1日付け教文第647号で、埼玉県教育委員会教育長から日本鉄道建設公団東京新幹線建設局長あて、昭和48年度の発掘調査遺跡について計畫書等を添えて通知し、同年11月5日から発掘作業が開始された。

なお、吹上 1 号遺跡の石田堤は保存し、集落跡の調査をすることとし本庄 A 号遺跡（莊小太郎頬家墓）、上里 1 号遺跡の古墳・岡部 4 号遺跡は、いずれも、建設路線外であることが確認されたため、発掘調査の対象からはずした。上里 1 号遺跡については昭和50年に 2 ケ所に集落跡があることがわかり、上里 1 A 号・上里 1 B 号と仮称した。また昭和53年に上越新幹線熊谷駅舎改築に伴う貨物ターミナルの変更で、熊谷市三ヶ尻地区の貨物授受施設が拡張されることになり、ここに遺跡がかかることが判明し、熊谷 2 号遺跡として調査対象に追加することになった。

その後昭和55年度に財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発足し、今まで埼玉県教育委員会

が実施してきた事業をそのまま引き継ぐことになった。そして伊奈町地区の用地買収が進んだ段階で、今まで立入りができないかった地域の分布調査が実施され、また新たに遺跡が発見され、伊奈5-1号、伊奈5-2号、伊奈6号、伊奈7号が追加された。

遺跡番号	遺跡名稱	所 在 地	種 別	時 代
上里1号A	(天神林遺跡)	児玉郡上里町大字五明字天神林972	集落跡	古墳
上里1号B	(高野ヶ谷戸遺跡)	児玉郡上里町大字五明字高野谷戸1023-1	集落跡	古墳
熊谷2号	(三ヶ尻天王遺跡)	熊谷市三ヶ尻3407	集落跡	古墳
伊奈5-1号	(八幡谷遺跡)	北足立郡伊奈町大字羽貫字八幡谷204-1	集落跡	開文・平安
伊奈5-2号	(相野谷遺跡)	北足立郡伊奈町大字小針内宿字向小針1687	集落跡	平安
伊奈6号	(丸山遺跡)	北足立郡伊奈町大字小室字丸山908	包含地	绳文
伊奈7号	(向原遺跡)	北足立郡伊奈町大字小針内宿字向原1252	集落跡	先上器・古墳

発掘調査は以下の年次毎に実施され、深谷、本庄、岡部地区のものについては既に報告書が刊行されている。

年 度	遺 跡 番 号
48	深谷1号、深谷2号、深谷3号、岡部1号、本庄2号、本庄3号
49	本庄1号、本庄2号、本庄4号、本庄5号
50	岡部2号、岡部3号、上里1A・1B号
53	熊谷2号(三ヶ尻天王遺跡)
54	熊谷1号(三ヶ尻林遺跡)吹上1号
55	熊谷1号(三ヶ尻林遺跡)伊奈1号、伊奈2号、伊奈3号、伊奈5-2号、伊奈7号
56	伊奈2号、伊奈3号、伊奈4号、伊奈5-1号、伊奈6号、伊奈7号

発掘調査の組織

1. 発掘(昭和53年度)

主 体 者 埼玉県教育委員会

教 育 長 石 田 正 利

事 務 局 埼玉県教育局文化財保護課

課 長 移 山 泰 之 信 恵

課 員 補 佐 奥 泉 一

課 員 佐 木 戸 一

課 員 佐 早 川 智 明

課 員 佐 沼 駿 幸 夫

課 員 佐 駒 宮 史 朗

課 員 佐 本 間 畑 史

庶 務 総 理 庶 務 係

太 田 和 夫

千 村 修 平

沼 野 効 平

発 掘 文 化 財 第 三 係

横 川 好 富

小 久 保 微

中 島 宏

市 川 修

利根川 章

(類記) 山 形 洋

一

発掘調査協力 熊谷市教育委員会三ヶ尻地区自治会長及び地元住民
発掘（昭和54年度）

主 体 者 埼玉県教育委員会

教 育 長 石 田 正 利

事 務 局 埼玉県教育局文化財保護課

課 長 横 棚 一 純 之 男 明 夫 朗 史 清 夫 平 富 徹 茂

課 長 楠 佐 秋 葉 一 純 之 男 明 夫 朗 史 清 夫 平 富 徹 茂

企画調整 文化財第二係長 早 川 智 幸 本 間 岳 太 田 和 修 好

横 棚 沼 千 本 間 岳 太 田 和 修 好

駒 宮 史 朗 本 間 岳 太 田 和 修 好

庶務係長 長 谷 川 和 修 好

太 田 和 修 好

千 村 修 好

文化財第三係長 橋 川 好 小 久 保 徹 茂

佐 メ 木 小 久 保 徹 茂

(嘱託)

発掘調査協力 熊谷市教育委員会・三ヶ尻地区自治会長及び地元住民

(嘱託) 曾根原 裕 明

発掘（昭和55年度）

主 体 者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 関 根 秋 治 夫 光 一 浩 人 富 徹 茂

副 事 長 本 姬 春 澄 夫 光 一 浩 人 富 徹 茂

常 務 理 事 渡 邁 悅 荘 朗 人 富 徹 茂

庶務係長 管 理 部 長 伊 藤 茂 伊 藤 茂 伊 藤 茂

関 野 朝 一 浩 人 富 徹 茂

福 田 朝 一 浩 人 富 徹 茂

本 庄 朝 一 浩 人 富 徹 茂

文化 調査研究部長 横 川 好 小 久 保 徹 茂

調査研究第二課長 小 久 保 徹 茂

星 間 孝 志

発掘調査協力 熊谷市教育委員会三ヶ尻地区自治会長及び地元住民

2. 整理（昭和57年度）

主 体 者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 長 井 五 郎 進 夫

副 事 長 岩 上 泰 夫 二 一 美 浩 人 子 富 行 司

常 務 理 事 渡 邁 澄 夫

庶務係長 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 管 理 部 長 佐 野 長 茂 和 美 浩 人 子 富 行 司

關 野 長 茂 和 美 浩 人 子 富 行 司

江 田 朝 一 浩 人 子 富 行 司

福 田 朝 一 浩 人 子 富 行 司

本 庄 啓 好 良 孝 英

整 理 調査研究部長 横 川 好 小 久 保 徹 茂

調査研究副部長 小 川 村 孝 英

兼 第 五 課 長 水 中 司

調査研究第四課長 田 中 司



○古墳群、○縄文時代、◆弥生時代、□古墳・奈良・平安時代
▲埴輪窯跡、△寺院跡、■城館跡

第1図 三ヶ尻天王および三ヶ尻林遺跡の位置と周辺のおもな遺跡

II 遺跡の立地と環境

三ヶ尻天王および三ヶ尻林遺跡はそれぞれ熊谷市三ヶ尻 3407 他、および三ヶ尻 3389 他に所在する。両遺跡はとも隣接し、特に三ヶ尻古墳群内に属する。

三ヶ尻古墳群について既に埼玉県遺跡地名表①では前方後円墳（二子山古墳）1基を含む22基があるとされているが今回の調査で古墳跡が多く検出されているので実数は更に増える。また遺跡地名表記載古墳で現在消滅したものもある、調査された古墳は三ヶ尻天王遺跡で6基（6号墳=59-72……県遺跡地名表のコード、以下同じ）、三ヶ尻林遺跡で16基（4号墳=59-67、6号墳=59-77、7号墳59-78、8号墳=59-68）、その他熊谷市で発掘した№80（59-80）古墳1基②、及び小沢国平氏が発掘した三ヶ尻所在古墳1基③がある。その他墳丘が確実にあるか、あるいは認められるものは調査古墳関係は除いて13基、かつてあったと伝えられているもの41基である。伝承についてはかなりあいまいなところもあるが、実数は更に増えるものと思われる。伝承も含めて78基である。セメント工場建設（昭和36年）、更に以前の熊谷陸軍飛行学校（現航空自衛隊熊谷基地）建設（昭和10年）、その他区画整理、個人宅造等でかなり破壊されている。地元住民の聞き込みである程度の場所はわかるものがあり、分布傾向はつかめる。分布の中心は前方後円墳（前方部削平）の二子山古墳及び調査された三ヶ尻林4号墳の周辺と思われる。ただし分布範囲は広く、川本町寄りに5基が推定される。明治19年に作られた參謀本部陸軍部測量局の迅速測図（2万分の1）にマウンドが描かれ、これは現在熊谷市発行の№21（2500分の1）図にその痕跡を一部残している。この付近の畑のコンターライン観察でも2基（以上）の古墳が推定され、大塚があったという伝承がある。また迅速図で觀音山の北方の6基のマウンド表現はセメント工場の引込線以西である。更に三ヶ尻小学校付近に2基の古墳があるので、三ヶ尻古墳群の範囲は東西2kmにまで広がる。分布の粗密はあるが、かなり大規模な古墳群であることがわかる。

当地域は荒川扇状地の扇端部に相当する地形面である。標高52~54m、沖積地との比高は10mで北東部に傾斜する。台地裾はかつて湧水点がたくさんあり豊富な湧水があったそうである。沖積地は荒川による自然堤防が発達し、かなり乱流した痕跡を残す。河道は南へ移動しており、自然堤防の後背湿地は河川流の直接流入を避ける形になるので、豊富な湧水は、自然灌漑の水稻耕作に良い条件をもたらしたものと思われる。

三ヶ尻古墳群は荒川左岸の河岸段丘上に分布する古墳群（花園村小前田古墳群④、花園村黒田古墳群⑤⑥、川本町見目古墳群⑦）の最東端に位置する。この地域は右岸では川本町箱崎古墳群⑧、坂原古墳群⑨、鹿島古墳群⑩が分布し、一大古墳分布圏である。荒川は水上・陸上も含めて交通路として重要な位置を占めているが、それが利根川系統の広大な沖積地帯に臨む出口に三ヶ尻古墳群がある。

觀音山と三ヶ尻古墳群との関係も無視できないであろう。觀音山は標高81mの第三紀層からなる丘で比高25mあるが、沖積地からは35mの高さである。笠を伏せた様な整った山容で、特に荒川からの眺望性（逆も同じである）にすぐれている。觀音山付近に前方後円墳や多くの円墳群が密

集するのは、偶然では無いと思われる。これは対岸に位置する鹿島古墳群でも、その背後に舟山と呼ばれる残丘地形があり、標高71m、北高15mで、独立丘のように立っていた。今は削平されているが、三ヶ尻古墳群の状況と類似している。なお両者ともに古墳群と関係するような遺物、造構は無いが古墳占地と無関係ではあるまい。

三ヶ尻古墳群について、渡辺華山が藩主の祖先の事蹟を調べることを命ぜられ、天保2年(1831)に三ヶ尻を訪れて、種々の調査をしている。それを「訪観録」として天保3年に著しているが、その中で火薬塚(王塚)について絵図を付して記録したものがある。それによると石室の蓋柱(天井と玄門か?)に秋葉の青石(緑泥片岩)を使用していること、壁が漆喰であること、鉄函(龜か?)、大刀、鉄鎌数百本が出土したことを記している。横穴式石室であることは間違いないが、「白龍ヲ以テ壁トナシ……」の記載は注意される。河原石積みが一般的であったと思われるが、絵図を観察すると嵌石積みのようにも見える。その場合、石材が問題となるが、現在の荒川河床で川木町地内であるか泥岩ないし砂岩、緑色凝灰岩が露出しているので⑩、これらの嵌石かも知れない。

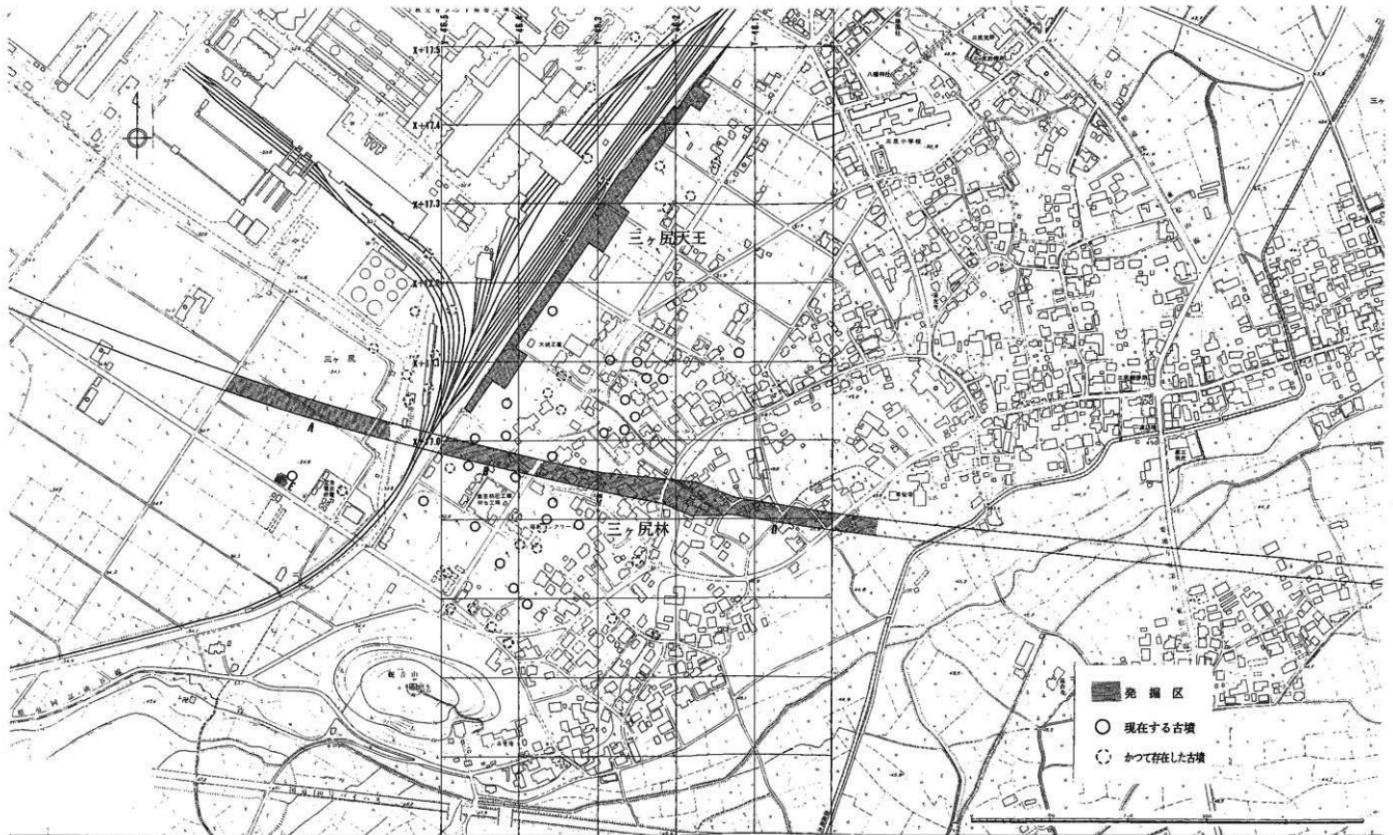
三ヶ尻古墳群と鹿島古墳群は共通点が多い。まず両者ともに荒川が利根川系統の低地(妻沼低地)に臨む両岸に位置すること、どちらも大規模な古墳群であること、背後に眺望のきく独立丘をもつこと、水上、陸上(河岸段丘上)交通の要所にあること等である。時期的には鹿島古墳群の方が新しいものが多く、各古墳群の盛行時期に三ヶ尻古墳群が先行すると思われる。

引用・参考文献

- ①埼玉県教育委員会1975「埼玉県遺跡地名表」(No.は第1図の遺跡番号と同じ)
- ②寺社下博「三ヶ尻No.80古墳」昭和54年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書熊谷市教育委員会1980
- ③小沢国平「熊谷市三ヶ尻所在古墳発掘調査概要」埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧(昭和26年~昭和40年)埼玉県教育委員会1973
- ④市川修「北坂屋遺跡の調査」第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会1980
- ⑤塙博「埼玉県花園村黒田古墳群」黒田古墳群調査会1975
- ⑥鈴木敏昭「台耕地遺跡の調査」第12回遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会1979
- ⑦塙野博「埼玉の古墳」埼玉の文化財第20号 埼玉県文化財保護協会1980
- ⑧増田逸朗「川本村箱崎古墳群の発掘」第1回遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会1968
- ⑨柳田敏司他「鹿島古墳群」埼玉県埋蔵文化財調査報告第1集 埼玉県教育委員会1972
- ⑩塙口万吉「日曜の地学」築地書院1968

No.	名称	所在地	種別	時代	遺構出土品	県コードNo.
1	三ヶ尻古墳群	熊谷市三ヶ尻	古墳群	古 墓		59-65~87
2	千代古墳群	江南村千代字前大林	×	×		65-3~36
3	静岡院古墳群	江南村成沢字静岡院	×	×		65-45~46
4	鹿島古墳群	川本町	×	×		67-21~108
5	平方前古墳群	川本町本田字平方前林	×	×		67-113
6	上大塚古墳群	川本町本田字上大塚	×	×		67-14
7	塙原古墳群	川本町島山字塙原	×	×		67-11
8	見目古墳群	川本町田中字新田	×	×	土師器・銅鏡・金環 ・刀子・鉄鏡・玉類	67-1
9	箱崎古墳群	川本町島山字箱崎	×	×		67-8
10	権現山埴輪蒸窯	江南村千代	蒸 窯	×		65-2

No.	名 称	所 在 地	種 别	時 代	遺 棚 出 品	県 コ - F N o.
11	割山埴輪塚跡	深谷市上野台	塚 跡	古 墳		60-80
12		熊谷市三ヶ尻	集落跡	縄文・弥生・古墳		59-63・64
13		川本町菅沼字下菅沼	焦落跡	繩文・古墳		67-3
14	舟山遺跡	川本町本田字高岡	集落跡・墓	縄文・奈良・平安 室町	繩文土器・土師器 繩文土器・土師器	67-109
15		川本町本田字姥ヶ谷	集落跡	縄文・古墳	須恵器	67-112
16	荒神脇遺跡	川本町下野原字荒神		縄文・奈良	繩文土器・土師器	65-115
17		川本町本田字春日丘		縄文・古墳	須恵器	65-117
18		川本町菅沼字東合		縄 文	繩文土器・石器	65-2
19		川本町墨山字五所		縄文・古墳	繩文土器・土師器	65-10
20		川本町墨山字西川如覚		古 墳	石器	65-4
21		川本町墨山字金井			土師器	65-5
22		花園村黒田				66-41
23	宮台遺跡	"		古墳・奈良・平安 縄文・弥生・古墳 奈良・平安 古墳・奈良・平安	繩文土器・土師器 繩文土器・土師器 石器	66-39・40
24		深谷市秋元町				60-88
25		深谷市桜ヶ丘		縄 文	繩文土器	60-85
26		深谷市上野台		縄文・古墳・奈良 " 平安	繩文土器・土師器	60-93
27		深谷市折之口		縄 文	繩文土器	60-94
28		深谷市折之口		縄文・古墳・奈良 " 平安	繩文土器・土師器 須恵器	60-95-98
29		深谷市人見		縄 文	繩文土器	60-76
30		深谷市上野台		弥生(?)	弥生土器	60-81
31		深谷市上野台		古墳・奈良・平安	土師器・須恵器	60-82-84
32		深谷市 "				60-79
33		深谷市 "		縄 文	繩文土器	60-77
34		深谷市 "				60-64
35		深谷市 "		古墳・奈良・平安	土師器・須恵器	60-66-68
36		深谷市 "				60-65
37	前島・島之上遺跡	深谷市柏合		縄 文	繩文土器・石器	70-72
38		深谷市見晴町		古墳・奈良・平安	土師器・須恵器	60-40-44
39		深谷市南根				60-33
40		深谷市人見				60-35-38
41		深谷市 "		縄 文	繩文土器	60-73
42	堀の内	川本町明戸字西	館 跡	古墳・奈良・平安	土師器・繩文土器	60-74
43	上杉館	江南村千代字南方	鎌 収			67-123
44		江南村柴字久保	寺院跡	平安・鎌倉		65-124
45	堀の内	川本町本田字杉原	館 跡	平安・鎌倉		65-47
46	本田館	川本町木田字西上木田				67-122
47	鳥山館跡	川本町墨山字八幡		平 安		67-120
48	人見館	深谷市人見			土壙・空器	67-119
49	東福寺跡	川本町木田字八幡	寺院跡		礎 石	67-12
50		江南村千代字宮下	集落跡	古墳・奈良・平安	土師器・須恵器	65-37



第2図 三ヶ尻天王・林遺跡

III 三ヶ尻天王遺跡の概観

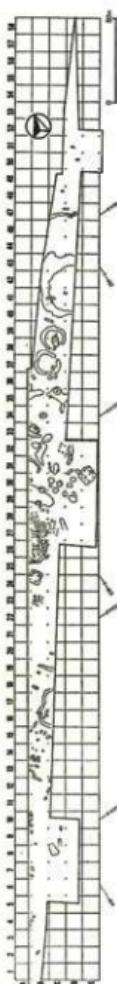
三ヶ尻天王遺跡の発掘対象地域は長さ約575m、幅は20~40mの不規則な区域である。実際の調査面積は約13,400m²である。発掘区割は調査区の方向に沿って任意に10m方格のグリッドを設定した。南西一北東、北西一南東方向に各1~50、A~Eの名称付けをし、1Aグリッドの如く呼称した。南西一北東の方向はN(磁北)−17°−Eである。国家座標については、熊谷市発行の№21地図(2500分の1)と工事設計図に基づき、図上で復元したものである(第2図)。発掘区の標高は53.4m~51.8mで南西一北東方向へやや傾斜している。近隣の沖積地とは150~200m離れた台地内になる。土層は発掘区のはば中央の28-Bグリッド北隅の観察ピットによると、地表レベルは標高52.7mで以下40~50cmの灰褐色の表土層があり、次に20cm程の黒色土がある。これは表土層と同じ土質である。以下30cm程の黒褐色土になり、その下に20cmの黄褐色土(黒色土とロームブロック土が混入したやや固い土層がある。上面はかなりおうとつがあるので、このレベルまで(地表下90cm)攪乱(山林の開拓による?)が達していることがわかる。その下部は黄褐色の粘土質土があり60cmの厚さで、造構の明瞭なものはこれを切り込んだものである。以下は全くの砂利層になっていた。そのレベルは地表下2.6m、標高は50.7mである。なお黄褐色土(粘土質)の安定層と砂利層は地表の傾斜と概ね一致するが、細かくみるとかなりおうとつがある層になっている。

検出された遺構は古墳6基、住居跡7軒、掘立柱建物跡3棟、竪穴状造構4、土壙90基、溝2本、ピット群等である。(第3図)

古墳は6基のうちわずかに墳丘が確認されたもの1基の他はすべて周堀跡のみである。石室については河原石使用の胴張りプランをもつ横穴式石室の下部が検出された。他に石室と思われる砾群が検出されている。周堀形態は円形3基、やや不整形な堀が断続的に巡るもの2基、前方後円形の前方部堀と思われるもの1基が検出された。周堀形態は規模とともに差があり、また他古墳を避けたプランになるものがあるので時期差があることは確実である。墳丘、周堀内から土師器(甕・長甕・瓶・杯)、須恵器(甕・提瓶類)、埴輪片、繩文土器片(前・中期)、[打製石斧、近世土器類等が出土しているが、竪穴住居跡出土と同類のものが多い。混入遺物がほとんどである。なお石室内から発見された遺物はなかった。いずれも後期後半に属するものである。埴輪について量的には数片であり、本来的にはこれを含まないものと考えられる。なお27-Bグリッドで高さ40cm程度のマウンドがあったが、これは砂利を多く含んだ土盛であることがわかった。

住居跡は7軒発見された。いずれも鬼高窓後半の時期である。一辺8mにも達する大形のものが2軒、やや小規模な一辺7mのもの1軒、他の4軒は一辺4m以下、特に3mにも満たない小形住居が3軒あった。カマドを全く欠くものが1軒あり、また隅カマドをもつものもある。古墳周堀と複合している住居跡もある。出土遺物は土師器(長甕・甕・瓶)、須恵器(甕・提瓶)、土鍤、砥石等がある。その中ではば同形、同大のやや扁平気味の自然砾(研磨したものもある)がまとまって出土した例がある。住居跡の壁際で発見されており他遺跡でもかなり類例のあるもので注目された。

竪穴造構は4基ある。しかし定型化したものは1基のみで、他は不整形な落ち込みである。1号



第3図 三ヶ尻天王遺跡グリッド図

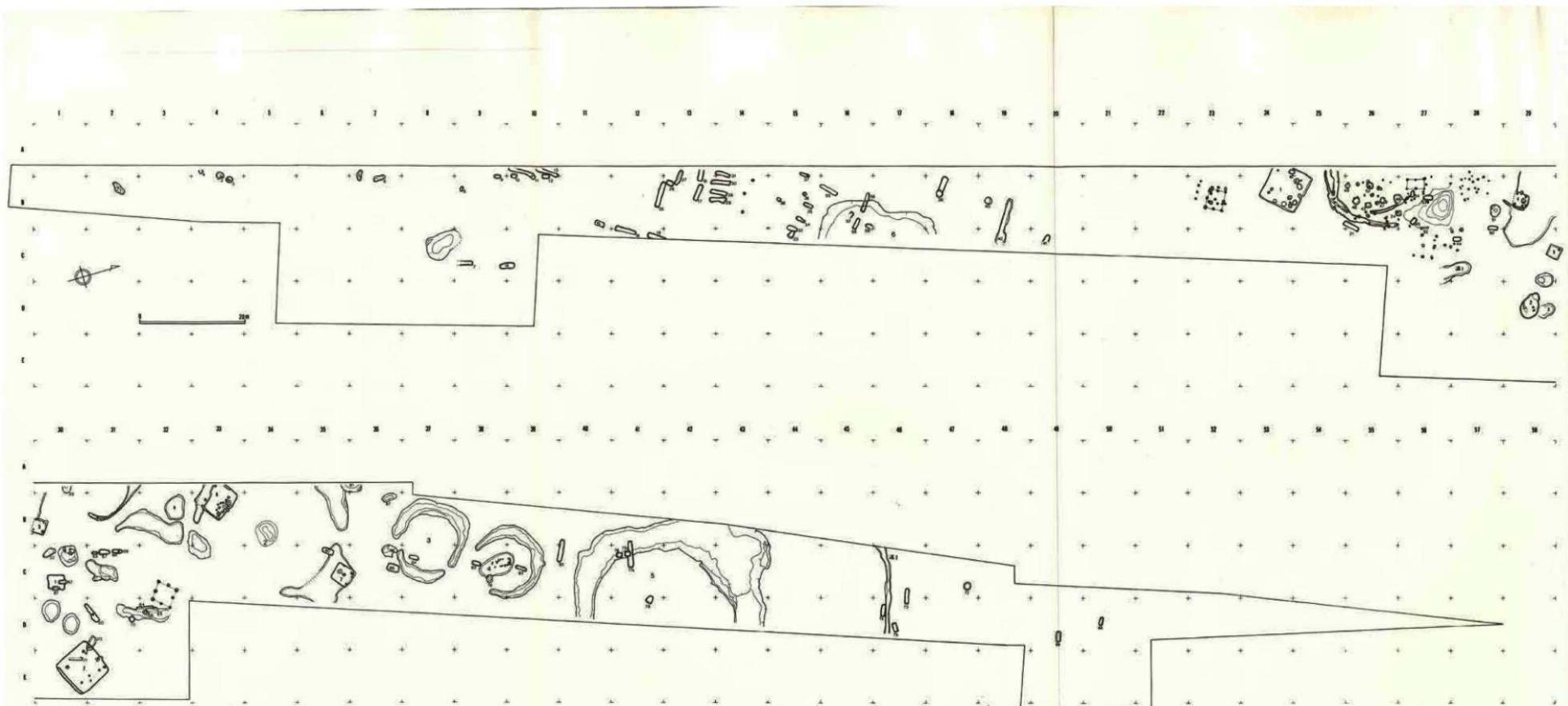
堅穴造構としたものは当初住居跡とも考えられたが、覆土にロームブロック土がかなり入っており、その状況の差で住居跡としなかったものである。ただし柱穴、カマド等の施設が全く無いことを除けば、住居跡と同じ形状である。他の住居跡と同じ遺物が検出されているので、これらとその関連する堅穴の可能性がある。2・3号堅穴造構については定型化しておらず性格不明である。隣接する倒木痕と同類になるかも知れない。4号堅穴については古墳周堀の一部と考えられたが、1号墳のものとするには位置がやや異なる。平面プラン確認では覆土状況は1号墳のものと同じであった。2~4号堅穴造構については遺物の出土はなかった。

掘立柱建物跡は確実なものは3棟である。掘立柱跡の配置を想定した。柱間は2×2間、2×1間である。1号と4号は方向軸が類似しており、また周囲にピット群をもたず、単独で建てられていたようであり、性格が似たものとして考えられる。1号の西側のピット群もこれに伴うものとしてよいであろう。3号については周辺にピット群がありこれらとの関係が十分考えられる。1・2号とは方向も異なり時期的差があるかも知れない。1~3号ともに時期を決定づける遺物、状況は認められなかった。なお3号の北側にあるピット群中に3号と同じ方向で、全く同じ配列になるピット群は建物跡としてよいであろう。ただしここでは方向を異にした例もあるので、3号と同類の可能性のある建物跡とされる。

土壙は90基検出された。平面が長方形プランで側面が内傾し、底面が平坦なものが定型化したものである。その他円形のものもあった。規模にやや差があり、かなり長大なものも存在する。内部の土層は区分が明瞭でないものがあり、人為的に埋めたと考えられるものがある。定型化したものについてはその長軸方向が一定化する傾向があった。遺物については、住居跡出土と同類の土師器や須恵器片、土錠、埴輪片、近世土器類、繩文土器片などが入っていたが、いずれも混入としてよい状況であった。基本的には遺物を含まないものと思われる。なお住居跡、古墳周堀を複合するものはすべてこれを切り込んでいた。

溝については造構がしっかりしたものは2本検出された。1号溝については一部分の調査であったが、覆土がやや固くしまっており、又周囲から土師器、須恵器が発見されているので、古墳の堀跡とも考えられる。2号溝については中世土器がこの付近で発見されている。土壙内覆土中にであるので、これらの遺物と関係する時期と思われる。なお25-B、26-B、31-B、33-Bグリッドで溝が検出されたが、これらは覆土やプラン状況、底面状況などの判断で、1・2号溝よりもかなり新しいものと思われる。

ピット群については26-B、27-C、28-Bグリッドで集中して検出された。28-Bについては遺物跡として柱穴列が認められる可能性が強い。その集中状況から何らかの建物がこの一帯に存在したことが考えられるが、時期を確定できる状況はなかった。



第4図 三ヶ尻天王遺跡遺構全体図

IV 三ヶ尻天王遺跡の遺構と出土遺物

1. 古墳と出土遺物

三ヶ尻天王遺跡 1号墳（第5図）

発掘区の中央部やや西寄りに検出された。2号墳はすぐ北側に隣接し、63・67・68・69号土墳と2号掘立柱建物跡と重複している。掘立柱建物跡との前後関係は明瞭でないが、古墳の方が新しそうである。主体部は遺存せず、墳丘も不明瞭で、周堀も全周しないため、主軸方向も墳丘径さえも明確にできないが、南側にあって、南にのびる土壙状の掘り込みを前庭部の溝状遺構と考えると、南北正方位よりやや東に振れる主軸を考えることができる。墳径・大きさについても、周溝から判断すれば、径13~14mの円墳であったと考えられる。周堀は不整形で、東溝が20~50cm、西溝が30~40cmの深さである。遺物は、墳丘部分から土師器壺・甕・須恵器片、土鍤、周溝から土師器壺・壺・甕・高杯・須恵器片などが出土している。

三ヶ尻天王遺跡 2号墳（第6図）

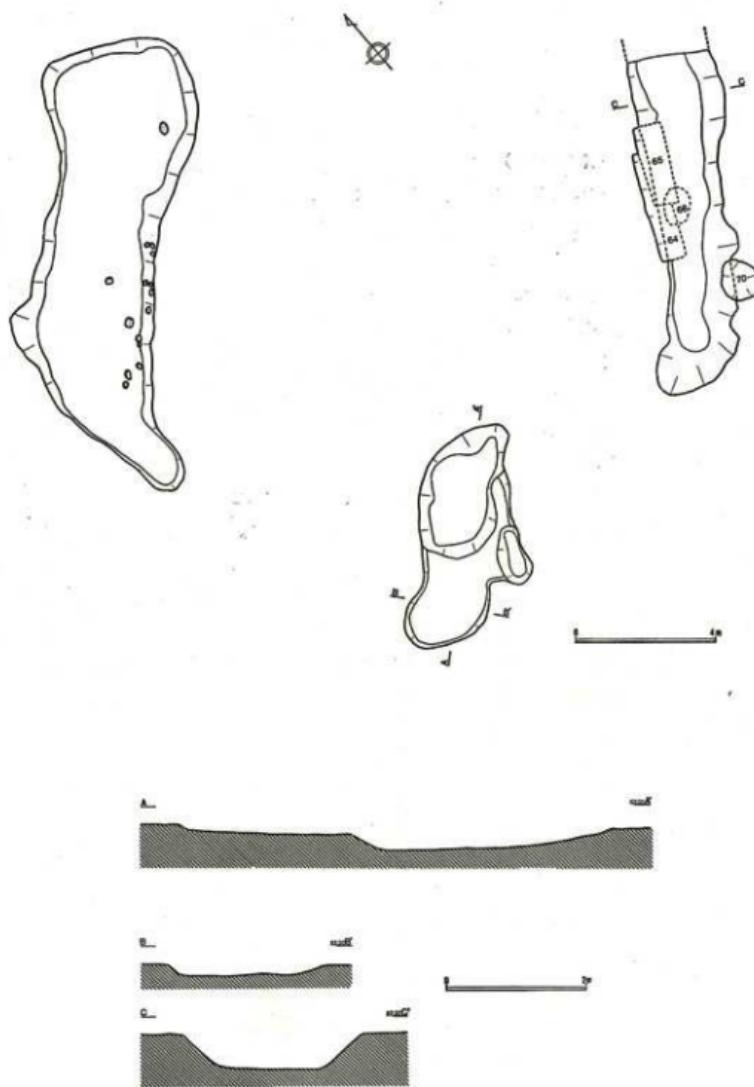
発掘区中央部やや北寄りにあり、北方に10m離れて、3号墳がある。西側の周堀が6号住居跡と北東の周堀が7号住居跡と重複する。古墳の方が新しいようである。径4m、高さ60cm程の墳丘が残存していたが、1m程の長さで根石状の石材が検出されただけであった。周堀は全周せず、北側にブリッジをもち、北東堀は南にまわらず途切れる。南側には1号墳と同様に土壙状の掘り込みがある。深さは北西堀30cm、南西堀10~30cm、北東堀10~20cm、土壙状掘り込み60cmを測る。墳径は周堀の内法で25mを測る。2号墳からはやや多量の遺物が出土しているが、住居跡2軒を破壊しているので、すべてが2号墳に帰属するわけではない。墳丘から須恵器甕・細頸瓶・提瓶の破片、土師器壺・甕・壺、土鍤、周堀から須恵器甕・土師器壺・甕・壺などの遺物が出土している。

三ヶ尻天王遺跡 3号墳（第7図）

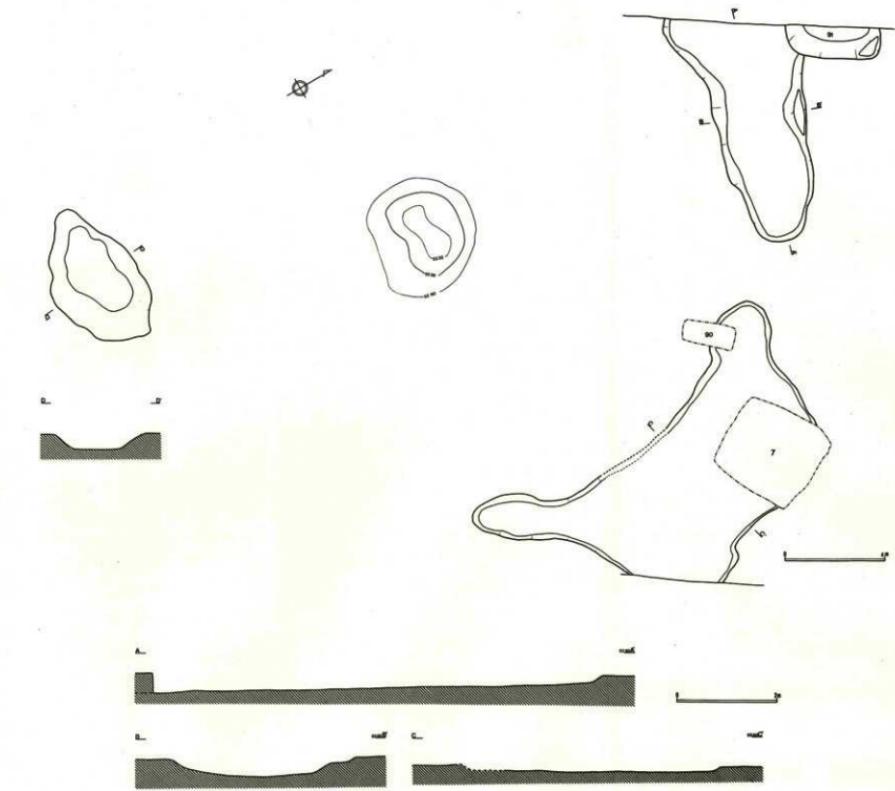
2号墳の北側に位置するが、北の4号墳の方がより近接していて、墳径も2・5号墳に比べて小さい。やはり、墳丘・主体部ともに遺存しない。周堀は南と北東で2ヶ所ブリッジをもつが、全周している。東堀に隣接して、南北方向に主軸をとる不整形円形の86号土壙があるが、前庭部掘り込みであろうか。東堀は幅1.2~2.4m、深さ28cm、西堀は幅1.2~2.5m、深さ30cm、86号土壙は長径3m、深さ18cmで、周堀の内法をとると、径11mの円墳となる。隣接する古墳跡はいずれも長方形の土壙に切られているが、これが近世前後のものだとすれば、それ以前に墳丘が削平されていることは確実であろう。遺物は少ないが、周堀から須恵器細頸瓶小片、土師器壺・甕等が出土している。

三ヶ尻天王遺跡 4号墳（第8図）

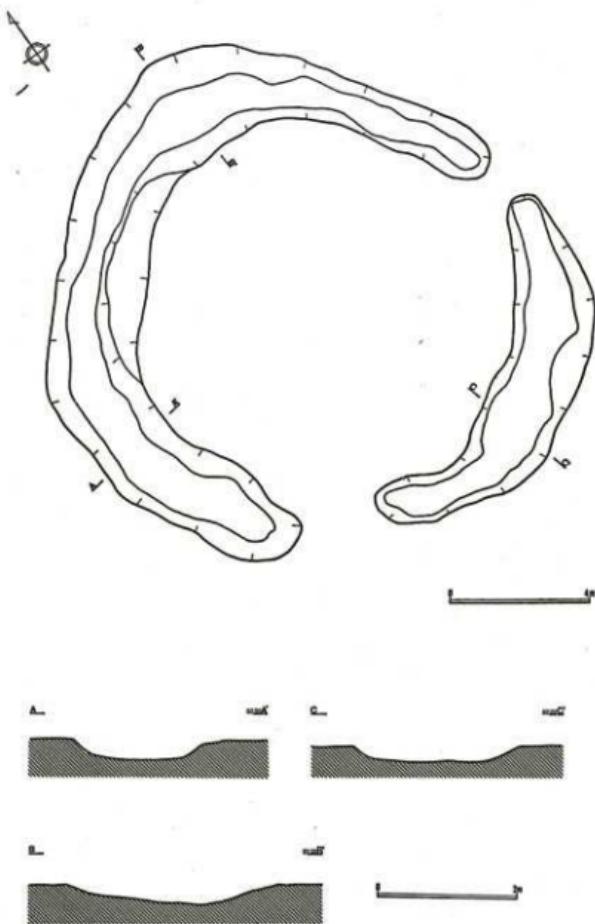
3号墳の北に隣接し、さらに東北には5号墳がある。墳丘はなく、主体部の根石と棺床面にあたる礎床の一部が遺存していて、石室形態を推定することができる。根石から推定される石室は主軸方向N-21.5°-E、石室全長3.20m、玄室長2.40m、奥壁幅60cm、玄室最大幅110cm、玄門幅80cm、羨門幅60cmを測り、玄室最大幅の位置は奥壁中央部から120cmの位置にある。やや奥壁寄りの



第5図 三ヶ尻天王遺跡1号墳全体図および断面図



第6図 三ヶ尻天王遺跡2号墳全体図および断面図



第7図 三ヶ尻天王遺跡3号墳全体図および断面図

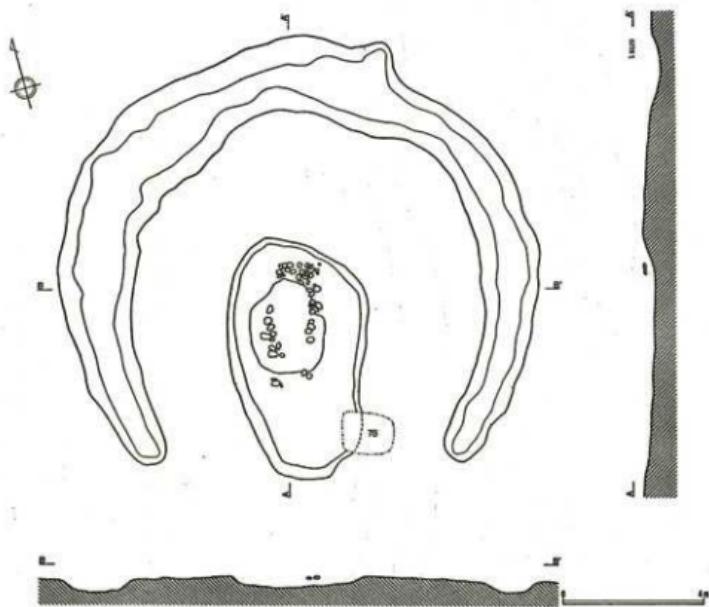
カーブが急な胸張り形の平面プランになるようである。根石と砾床の下には、大きな掘り方があり、石室主軸方向の長さ6.70m、幅4mを測る。掘り方の南東隅の部分は78号土壙が重複していて、墳丘の削平時期を推定する一つの材料になると思われる。掘り方は倒卵形の平面プランをもち、玄室の中央部と思われるあたりにさらに皿状の掘り込みを加えられていた。深さは砾床下15~25cm程あり、皿状掘り込み部は55cm程まで掘り下げられていた。中に詰められた土は、白色輕石を多く含むしまりのよい暗褐色土であり、特別に版築状につき固める構造になっていた。溝道部の下にあたる部分はローム中に砾を多く含む硬質の土があり、その下にロームブロックを含む、しまりの悪い暗褐色土層がまわり込むという倒木痕跡に類似した様相をとり、これが砾床下56cmより下に続いている。石室形成そのものに倒木痕跡が再利用されたか、石室をこわすような形で大木が生えたかどちらかであろう。周堀は全周しないが、古墳の入口部にあたる南側で約8mの幅をもって切れるだけで、側面と背後の部分はきれいにまわっている。周堀の幅・深さは、北側が1.3~2.5m、22~30cm、東側1.2~1.5m、12~20cm、西側1.1~2.2m、20~35cmを測る。北側に周堀の幅やや広く、まわりより6cm程低い部分があり、あるいは埋葬施設かもしれない。遺物は周堀から土師器坏が出土している。

三ヶ尻天王遺跡5号墳（第10図）

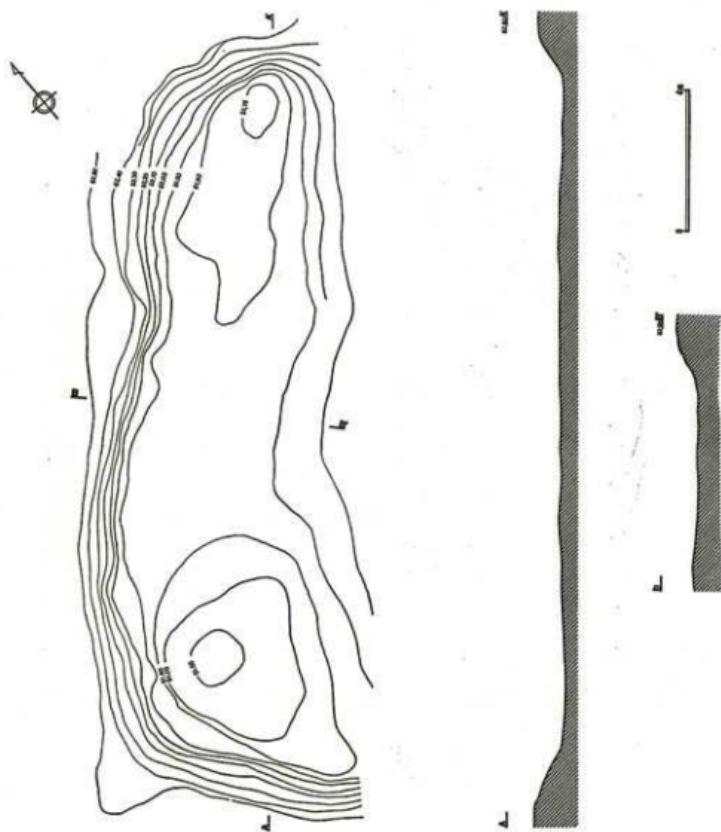
4号墳の北側にあり、調査区内の古墳の最北端に位置する。墳丘・主体部ともに遺存せず、主軸方向は不明である。古墳の西半分だけが発掘区内にはいっている。周堀は不整形で大変幅が広く、発掘区内は全周している。あるいは帆立貝式古墳及至前方後円墳の後円部にあたるのではなかろうか。周堀各部の法量は、東北部幅6.1m、深さ23cm、北部幅11.6m、深さ50cm、西部幅4.8m、深さ30cm、南部の幅2.3m、深さ30cmとなる。周堀の内側のプランは比較的整った円弧を描き、内法をとると墳径28mとなる。天王遺跡の北支群の中では最大規模になる。遺物は細片ばかりだが、周堀から須恵器壺・土師器坏・壺・壺・高坏等の土器と鉄鎌が出土し、近世陶磁器・灯明皿・土鍋・鉄矛もある。尚、1~3号墳周辺で縄文前~中期、4・5号墳周辺では縄文後期の遺物も出土した。

三ヶ尻天王遺跡6号墳（第9図）

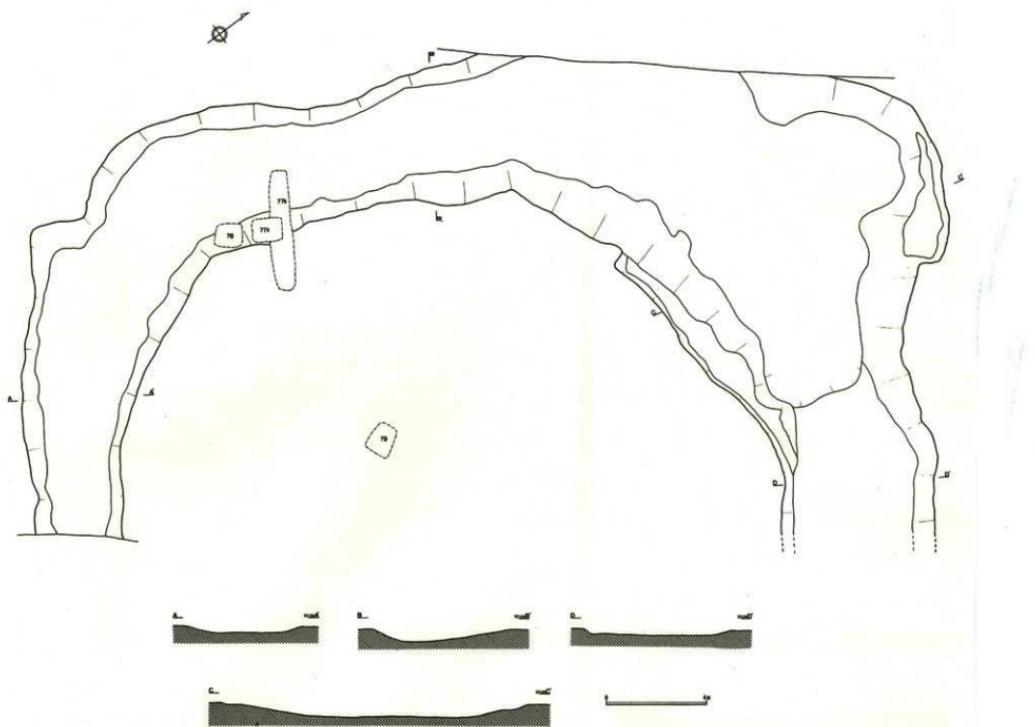
発掘区の南寄りに位置し、1号掘立柱建物から約50m、1号墳からは約90m南方にあたる。墳丘は発掘区の東方に現存し、周堀のみ確認された。周堀は大変幅広く深く、あるいは、これも前方後円墳の周堀の一部にあたる可能性がある。内側の立ち上がりが確認されず、周堀の幅7mを大きく上まわることは疑いない。周堀の覆土上面に、56・57・58・59号土壙が検出されていて、それが形成される以前に6号墳周堀は埋まりきっていたことがわかる。周堀は発掘区に沿って測ると22.5mの長さをもって検出され、南側が発掘区内側に対してやや張り出して、ヒョウタンを半分に切ったような形状で確認されている。北東部は深さ60~70cm、南西部は深さ95~70cm程である。遺物は周堀内からは出土していない。



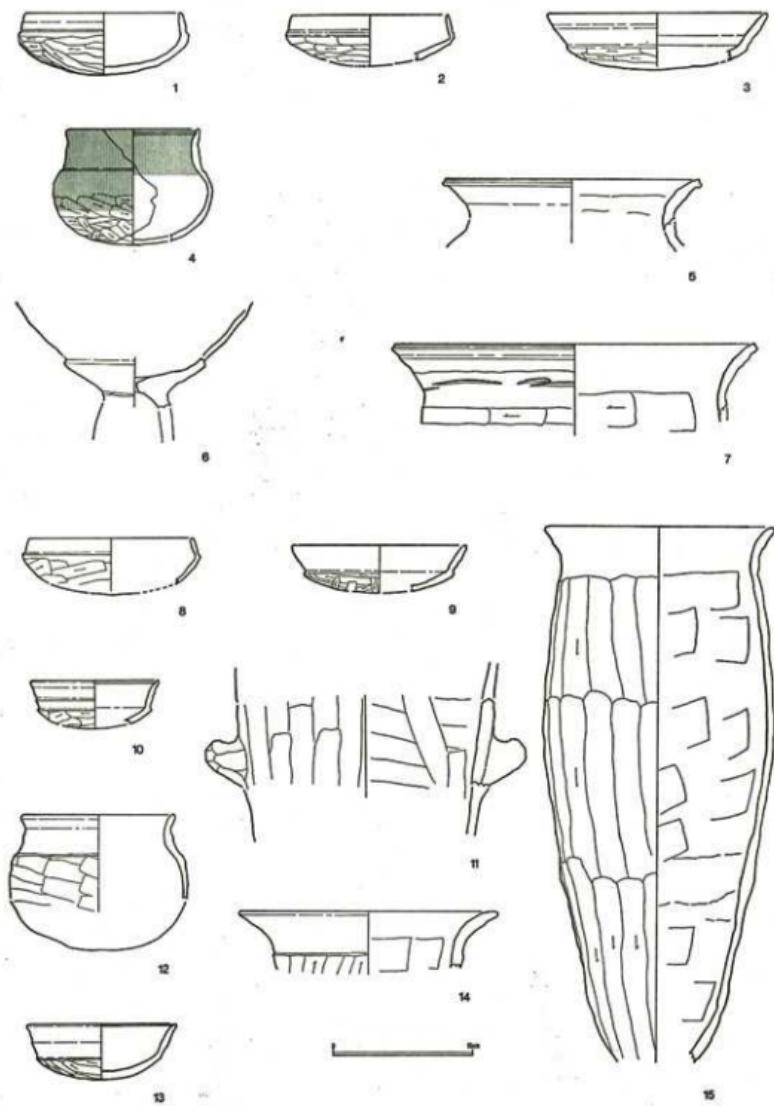
第8図 三ヶ尻天王造跡4号墳全体図および断面図



第9図 三ヶ尻天王遺跡6号墳全体図および断面図



第10図 三ヶ尻天王遺跡5号墳全体図および断面図



第11図 三ヶ尻天王遺跡古墳出土土器

第1表 三ヶ尻天王遺跡1号墳出土土器観察表（第11図）

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏	口径11.0cm 器高 4.4cm	口縁部は内傾して立ち、口唇部は内側につまみ出され丸い。口縁部中位にゆるい段、体部との境に浅い沈線と稜がある。体・底部は丸く、やや深い。	口縁部内外面・体部内面ヨコナデ（左回転）。底部内面ヘラナデ丁寧。体・底部外へラケズリ。	胎土細、ザラザラ。角閃石・石英・石灰質粒・赤褐色粒の細粒砂多量に含む。橙褐色。焼成良。完存率25%。
2	坏	口径11.1cm	口縁部は内傾して立ち、口唇部はとがる。体部との境に稜とゆるい段をもつ。体部は丸いがやや浅い。	口縁部内外面ヨコナデ（左回転）。体部内面へラナデ。同外面へラケズリ。内外面黒色研磨。	胎土細、角閃石・石英・石灰質粒等の細粒砂多量に含む。暗橙褐色。焼成良・硬。口縁部1/4残存。埴丘出土。
3	坏	口径15.6cm	口縁部大きく外傾して立ち、口唇部は丸い。口縁部中位に浅い沈線一周し、体部との境も浅い沈線と稜あり。体部は丸いがやや扁平。	口縁部内外面ヨコナデ（左回転）。体部内面へラナデ。外面へラケズリ。内外面黒色研磨。	胎土細、石英・角閃石・石灰質粒の細粒砂多量に含む。暗橙褐色。焼成良・硬。口縁部1/4残存。埴丘出土。
4	碗	口径 9.5cm 器高 (8.2cm)	口縁部外反気味に直し、口唇部はややとがり、内面に沈線一周。体部との境に稜があり、体部は丸く張り出す。そのまま丸く底部に移行。底部を欠く。丸底か。	口縁部内外面ヨコナデ（左回転）。体・底部内面へラナデ丁寧。体部外面上半へラケズリ後ナデ。同下半横位へラケズリ。	胎土細。チャート質粒・石灰質粒の1mm大の小石を若干含む。橙褐色。口縁部内外面・体部外面上半に丹塗。焼成良・硬。完存率17%。周堀出土。
5	甕	口径18.4cm	口縁部外反して立ち、口唇部は外側に肥厚し、外に面をもって、そこに明顯な沈線をもつ。頸部は渦曲して胴部に移行するが、胴部以下を欠き、形態不明。	口縁部～頸部内外面ヨコナデ（左回転）。	胎土細、角閃石・石英細粒砂やや多、チャート質粒・長石等の小石やや多く含む。淡橙褐色。焼成良・硬。口縁部1/4残存。周堀出土。
6	高坏		坏体部と接合部のみの破片。坏体部は稜をもち、直線的につなまる。接合部はゆるく屈曲し、脚部に移行。接合部にはヘラ痕顯著。	坏部内面へラナデか？表面剥落して不明。同外面へラケズリ。	胎土細。角閃石・石英細粒砂多量。石灰質粒の中～粗粒砂やや多く含む。橙褐色。焼成良。坏体部のみ1/4。周堀出土。
7	甕	口径25.9cm	厚手の作り。口縁部はやや外反して立つ。口唇部は外側に面をもち、浅い沈線一周。頸部は直立し、上位にヘラ痕多数。胴部にスムーズに移行。長胴か。	口縁部～頸部内外面ヨコナデ（左回転）。胴部内面横位へラナデ。同外面横位へラケズリ。	胎土細、ややザラつく。石英・角閃石細粒砂やや多く、長石・チャート質粒等の細粒砂も若干含む。淡橙褐色。焼成良・硬。口縁部1/4残存。埴丘出土。

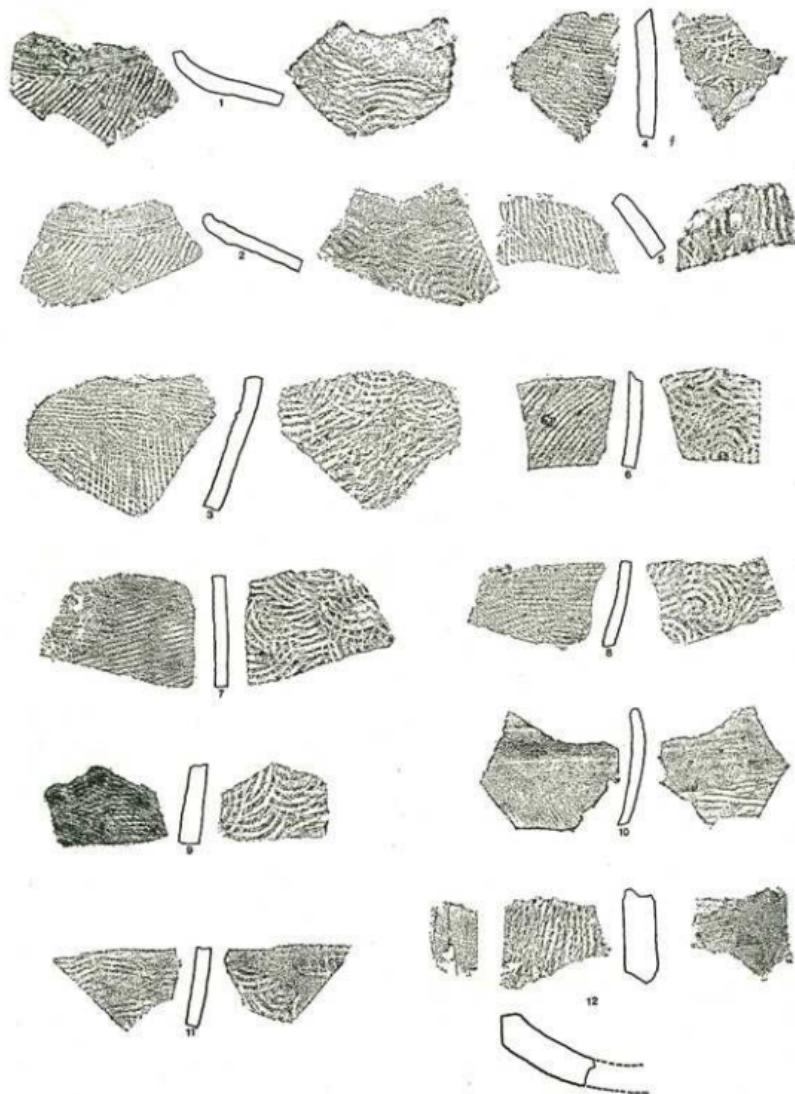
第2表 三ヶ尻天王遺跡2号墳出土土器観察表（第11図）

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
8	坏	口径11.6cm	口縁部短く、内傾して立ち、口唇部は丸い。体部との境に稜と浅い沈線あり。体・底部丸い。	口縁部内外面・体部内面ヨコナデ（左回転）。底部内面へラナデ丁寧。体部外へラケズリ。	胎土細。角閃石・石英・長石等の微細粒砂多量。淡橙褐色。焼成良・硬。口縁部1/4残存。埴丘出土。
9	坏	口径12.4cm	厚手の作り。口縁部やや大	口縁部内外面ヨコナデ（左	胎土細、ザラつく。角閃石

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
10	杯	口径 9.1cm	きく外傾して立ち、口唇部は細るが、丸い仕上げ。体部との境に浅い沈線と稜があり。体部はやや丸く、扁平。口縁部外反して立つ。口唇部はとがり、内面に沈線がある。口縁部中位に沈線、体部との境に沈線と稜がある。体部は丸いが、浅い。把手部近辺の破片しかない。脚部は底部に向かってややつぼまり、砲弾形を呈するか? 肥手はやや上向きで、山状の形になっている。上面はやや抉られた形。	回転。体部内面へラナデ。同外面へラケズリ。	・石英・石灰質粒等細粒砂多量に含む。橙褐色。焼成良・硬。口縁部1/4残存。墳丘出土。
11	大型瓶	胴径 18.35cm	口径10.8cm 胴径 12.65cm	脚部内面は横位・斜位へラナデ。外部縱位へラケズリ。把手部はユビナデ。	胎土細。長石・石英等の小石やや多量に含む。淡橙褐色。焼成良。口縁部1/4残存。周縁出土。
12	碗	口径18.4cm	口縁部は内傾して立つ。口唇部は外反し、丸い。口縁部中位にゆるい稜あり、脚部との境にも稜がある。脚部下半を欠くが、脚部はやや丸く、そのまま丸底の底部に移行する形態であろう。口縁部は大きく外反し、口唇部はつまみ出され、とがる。頭部は直立気味で、脚部との境に稜がある。脚部はまっすぐ伸び、若干細り気味になる模様。あるいは瓶か?	口縁部内外面と脚部上位内面(左回転)、強め。脚部内面横位へラナデ。同外面横位へラケズリ。	胎土細。角閃石・石英・石灰質粒等の細粒砂多量に含む。暗橙褐色。焼成良・硬。口縁部1/4残存。墳丘表土出土。
14	甕	口径16.35cm 胴径16.5cm	口縁部ゆるく外反して立ち、口唇部はややつまみ出され、外に肥厚気味。頭部は短く直立し、ゆるく屈曲して脚部に移行。脚部は中位よりやや上に最大径あり、口縁部よりわずかに出る。脚下半はゆるやかにつぼまり、小さな平底の底部になる模様。底部欠失。	口縁部頭部内外面ヨコナデ(左回転)。外面の一部にヘラケズリ痕あり。脚部内面横位へラナデ、同外面縱位へラケズリ。	胎土細。角閃石・石英細粒砂を多量、チャート質粒・長石等の小石を若干含む。淡橙褐色。焼成良・硬。口縁部1/4残存。「主体部」出土。
15	甕	口径 16.35cm 胴径16.5cm	口縁部ゆるく外反して立ち、口唇部はややつまみ出され、外に肥厚気味。頭部は短く直立し、ゆるく屈曲して脚部に移行。脚部は中位よりやや上に最大径あり、口縁部よりわずかに出る。脚下半はゆるやかにつぼまり、小さな平底の底部になる模様。底部欠失。	口縁部~頭部内外面ヨコナデ(左回転)。脚部内面横位・斜位へラナデ丁寧。同外面縱位へラケズリ後ナデ。稜不明瞭。	胎土細。角閃石・石英・チャート質粒等1mmの大の小石多量に含む。淡橙褐色。焼成良。完存率50%。墳丘出土。

第3表 三ヶ尻天王遺跡3号墳出土土器観察表(第11図)

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
13	杯	口径10.7cm 器高 3.9cm	小振りでやや厚手の作り。口縁部外傾して立ち、口唇部は、外につまみ出され、丸い仕上げ。内面に沈線一周。口縁部中位にゆるい段。	口縁部内外面ヨコナデ(左回転)。体・底部内面へラナデ丁寧。同外面へラケズリ。	胎土細、ややザラつく。角閃石・石英等の細粒砂多量に含む。淡褐色・焼成良・硬。完存率60%。



第12図 三ヶ尻天王遺跡出土須恵器・瓦拓影図

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			体部との境に稜あり、体・底部はやや丸いが、浅い。		

三ヶ尻天王造跡出土須恵器（第12図）

三ヶ尻天王造跡出土の須恵器は破片数にして30数点ほどであり、その大半は2号墳の墳丘・周堀から出土している。第12図にはそのうちの主なものを選び、瓦の破片も含めて12点の拓影を示した。1・2は甕の頭部下端から胴部上位にかけての破片であり、3～9・11は甕胴部各部位、10は広口壺の胴部中位、12は平瓦の側面を含んだ破片である。1・2は頸部に沈線上の擦痕を有し、胴部は右上がりの平行叩き目で、叩き板原体の柵目の効果が利用されている。1は一見縄文のように見えるが、磨滅の具合によるものであろう。内面は同心円状當て道具痕が重複激しく残るが、径10cm前後の単位をもつようである。3・4・9は平行叩き目の錯綜する部分で、色調・胎土の特徴・焼成・整形の特徴が類似し、同一個体の可能性もある。叩き目の単位は、1・2より狭く、3cm程度のようである。当て道具痕は径6cm前後で、やや深めに施されている。5も3・4・9に似た深めの平行叩き目だが、当て道具痕はやや特徴的で、原体に細い溝あるいは傷があるようである。6・7・8・11はやや浅い平行叩き目で1・2に類似する。8は叩き目より原体の柵目が顕著でカキ目のように見える。11には部分的にカキ目がある。4と11の内面にはヘラナデ乃至ユビナデ痕があり、当て道具痕が一部消されている。10は浅い沈線2本の間に7本単位の櫛描波状文を有し、下部には浅い平行叩き目が施される。内面は下部に当て道具痕があり、それ以外はロクロ水挽き痕である。当て道具痕は単位が不明だが、あるいは同心円状でなく、平行に溝を切るものようである。12瓦のは、直接古墳の時期にかかわるものではない。一枚作りで、四面の側端部は鈍角に面取りされ、側面はヘラケズリで調整される。凹面は布目痕・凸面は深い縄叩き目痕である。

焼成は1・2・6・7・8・11がややあまく、1は内外面とも淡褐色、それ以外は内面灰褐色それに近い灰色である。3・4・5・9は青灰白色を呈し、いかにも堅い感じがある。10は乃至灰白色でやや焼きしまりよい。12は黒灰色で、瓦質の焼きである。

本遺跡の須恵器の叩き目は、原体の柵目が叩き目の方向に対して45°程の傾斜をもつた特徴とし、3・4・9のように叩き目の深いものの場合は、このような板目の目立たない原体を使用しているようである。当て道具も径5cmぐらいのものと3cmぐらいのものの二通りは考えることができ。11を除いて2号墳に帰属するので、2号墳には、最底2個体の甕を墳丘外表部に供獻したと考ええる。

最後に胎土の特徴であるが、石英の細粒砂と長石風かチャート質粒の小石（径3～5mm大ぐらいを前後するもの）を多く含む。これは図示したものすべてに共通し、これらの須恵器の生産跡・窯跡が、荒川北岸以北あるいは群馬県内の窯跡群を包含して考えられる傍証となろう。一部青灰白色など焼成の良好なものについてはあるいは東海産の製品と考える余地もあると思うが、胎土分析を行なっていないので、結論は控えたい。

2. 住居跡と出土遺物

三ヶ尻天王遺跡1号住居跡（第13図）

発掘区の中央西寄りに検出された。本遺跡の竪穴住居跡の中では最も南に位置する。西側のコーナーが発掘区の外に出てしまっている。7.80m×7.26mのやや台形状の隅丸方形を呈する。主軸方向はN—67°—Eである。確認面からわずか5~12cm程で床面に達している。柱穴は4本整った位置にあり、南側にはさらに3本柱穴状のピットがある。土壌状のピットが南壁寄りに2個、北壁寄りに1個、北東の柱穴のまわりに2個ある。カマドは東壁中央にあるが、掘り方のみ遺存しいた。煙道部分に掘り込みはなく、100cm×50cm程の浅い皿状の掘り方である。カマドの右脇には103cm×100cm、深さ35cmの隅丸方形の貯蔵穴がある。周溝はほぼ全周するが、カマドの下にはまわら、幅10~20cm、深さ3cmを測る。遺物は、土師器壺・甕・鉢・高壺・土鍤・砾石・鉄製刀子があり、直方体タイプの自然礫が床面から20個出土している。

三ヶ尻天王遺跡2号住居跡（第14図）

発掘区中央東寄りに検出された。7.68m×7.72mの規模で、整美な隅丸方形を呈する。主軸方向はN—1°—Wである。確認面からの掘り込みはやはり浅く、10~15cm程である。24号・71号土壌に切られ、大きな擾乱孔も3ヶ所あり、かなり床面が痛んでいた。柱穴は4本整った位置にあり、深さ20~30cm程である。東の2本の柱穴の中間に柱穴状のピットが2本ある。カマドは北壁の中央やや東寄りにあり、煙道が出ベソ状に張り出す。93cm×70cmの浅いやや乱れた皿形の掘り方を呈する。周溝は南壁のみにあり、幅20~30cm、深さ5~8cm程である。遺物は少なく、土師器壺・甕、砾石のほかに、縄文前期の土器、中世陶磁器も混入していた。

三ヶ尻天王遺跡3号住居跡（第15図）

2号住居跡から西に20m程の位置にあたり、4・5号住居跡の近傍にある。2.40m×2.33mのやや歪んだ隅丸方形の平面プランで、確認面から17~26cmの深さまで掘り込まれている。主軸方向はN—26.5°—Wである。北のコーナーの部分に浅い皿状のピットがある。床面からの深さ4cm程しかなく、壁の方向はやや高く段を形成して、この段とピットの底部との比高差13cm程になる。一見カマドの掘り方のようにも見えるが、焼土・炭化物は顕著でない。この住居跡を含めた3軒の住居跡の一群はいずれも小振りの住居だが、3号住居跡が最小である。北コーナーのピットをカマドでないとすると、柱穴・厨房施設・周溝のいずれもないことになる。遺物は覆土に少量あつただけで、須恵器甕・土師器壺・甕が検出された。

三ヶ尻天王遺跡4号住居跡（第16図）

発掘区中央部やや西寄りに検出された。5号住居跡の西南7m、3号住居跡の西10mの位置にある。4・5号住居跡は浅い谷地形の奥部に、谷に面して占地している。2.85m×2.93mの隅丸方形プランで、東壁はややふくらみをもつ。南壁は谷の落ち際のラインと一致して、不明瞭である。カマドは西壁の中央やや南寄りにあって、煙道の掘り方が出ベソ状に張り出す。西壁のラインと一致するあたりに、ローム土の高さ12cm程の盛り上がりがある。造り出しの支脚であろうか。住居跡内部には掘り方はない。柱穴状のピットは5本で、各コーナー付近に1本ずつと、東壁際中央北寄り

に 1 本ある。北東コーナーのものを除いて、やや浅い。また、 $100\text{cm} \times 90\text{cm} \times 20\text{cm}$ の土壌状掘り込みが、床面中央北寄りにあるが、性格不明である。遺物は土師器坏・甕・瓶等で、近世陶磁器もある。

三ヶ尻天王遺跡 5号住居跡（第17図）

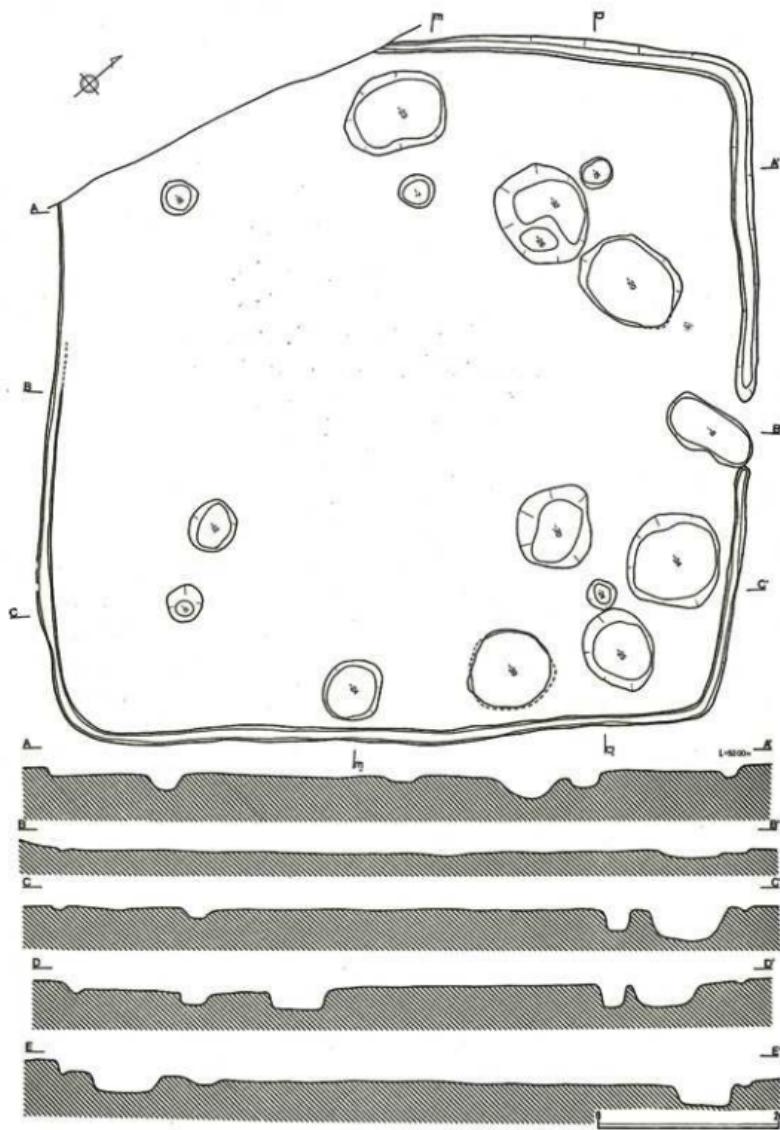
4号住居跡と 7 m の距離をおいて、谷の反対側に位置する。 $2.80\text{m} \times 2.60\text{m}$ の隅丸方形を呈し、南壁が谷の落ち際のラインと一致して、明瞭でない。主軸方向は、N-36.5°-Wで、4号住居跡より 2.5° ほど西に振れているが、3号住居跡を含めて、 10° 以内に 3 軒ともおさまる。北のコーナーにカマドをもつが、その主軸は住居の対角線方向になる。両ソデともよく遺存し、小石を含んだ黄褐色粘土を芯として構築されていた。煙道はほとんど張り出さず、斜めに掘り込まれる。床面の掘り方は軽い段をもって、皿状に掘られる。東壁には一部に幅 8 cm、深さ 2 cm の周溝があり、柱穴状のピットが、東・西・南の各コーナーにあるが、東コーナーのものを除けばごく浅い。尚、確認面から床面までは 30 cm 前後掘り込まれている。遺物は土師器坏・高坏・甕および鉄製鋤先が出土している。

三ヶ尻天王遺跡 6号住居跡（第19図）

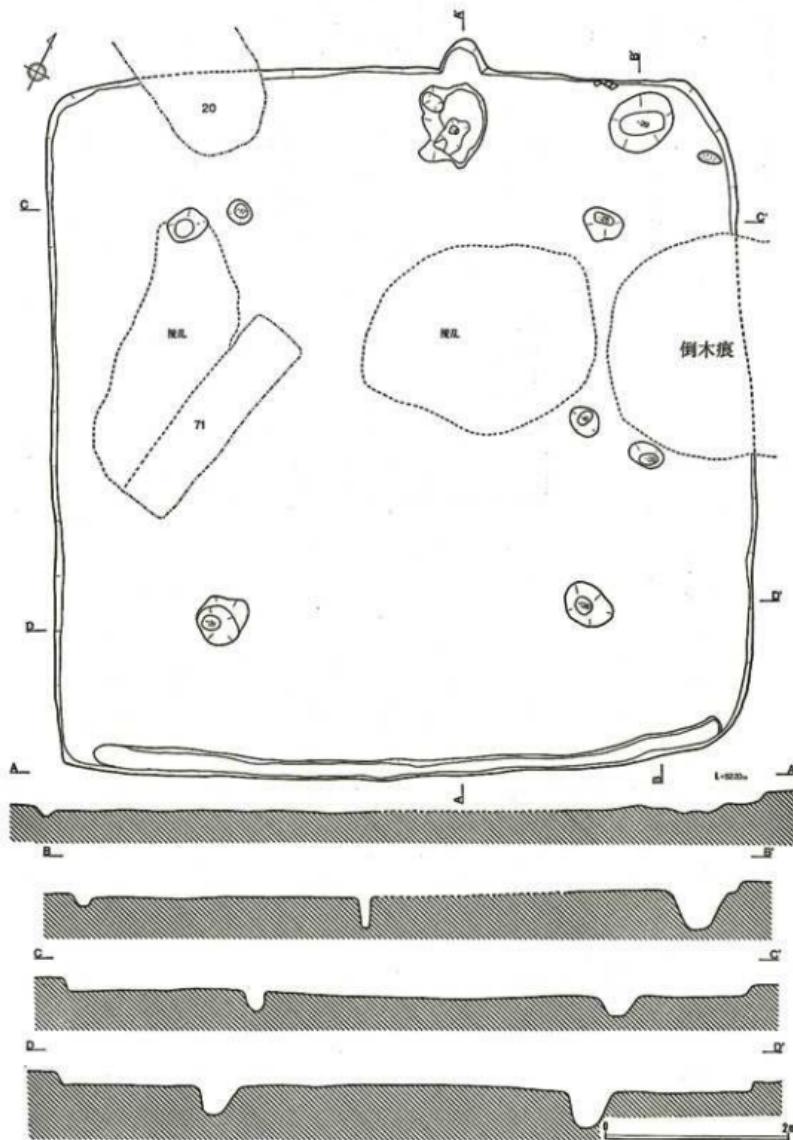
発掘区中央部や北寄りにあり、西側を 2号墳の西周溝によって切られている。北西のコーナーは発掘区の外に出る。 $6.25\text{m} \times 6.24\text{m}$ の隅丸方形のプランを有する。カマドは東壁のほぼ中央に取りつき、両ソデとも残る。カマドのソデには長甕が 1 個体ずつ逆位にして置かれ、芯になっていて、疊混じりの灰褐色粘土・黒褐色粘土が構築に使用されていた。カマドの掘り方は 2 段の段をもち、やや細長く、住居の内側まで伸びる。柱穴は 4 本で、対角線上の整った位置にあり、床面から 20~35 cm 程の深さをもつ。カマドの左側には 10 cm ぐらいの深い掘り込みと、 $93\text{cm} \times 75\text{cm}$ 、深さ 50 cm 程の貯蔵穴をもつ。柱穴状ピット 7 本と深いピット 2 ケ所が東壁寄りにあり、幅 20~30 cm、深さ 2~5 cm の周溝が、南・北壁の一部にある。遺物は須恵器提瓶・土師器坏・高坏・甕・瓶・砥石がある。

三ヶ尻天王遺跡 7号住居跡（第18図）

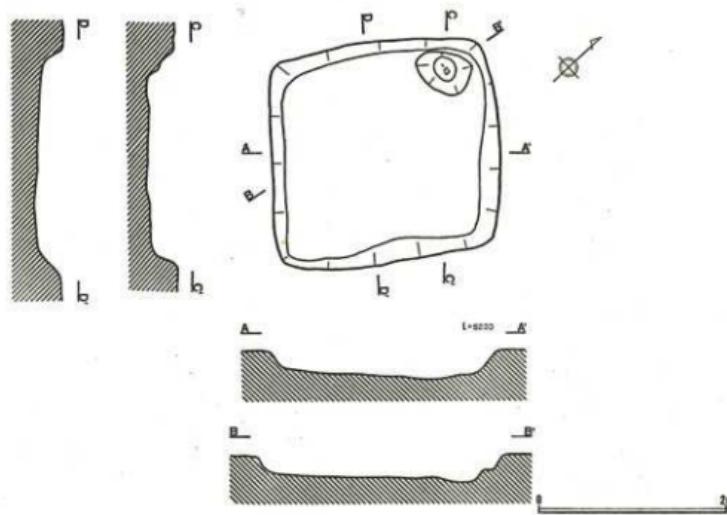
6号住居跡の東 22 cm 程の位置にあり、住居跡・建物跡分布域の最北端にある。2号墳の東北周溝に切られ、壁はわずかに 3~10 cm 程確認されたにとどまった。 $3.85\text{m} \times 3.54\text{m}$ の隅丸方形を呈する。主軸方向は N-77°-E で、6号住より 4.5° 西に振れている。カマドは東壁の北寄りコーナーにあるが、土壌状の方形の掘方をもつが、粘土の堆積がうすく、カマドの確認はもてない。深さ 10 cm 程の深い柱穴状ピットが東壁際に 2 本、北壁際に 1 本あり、深さ 15 cm 前後の土壌状ピットが床面中央部と西寄りに 2 ケ所ある。一つは $73\text{cm} \times 84\text{cm}$ の方形、一つは、 $55\text{cm} \times 70\text{cm}$ の梢円形のプランである。遺物はほとんど出ていないが、2号墳周溝精査の段階で確認できたので、古墳より古いことは確実であろう。覆土から縄文後期の土器が一括で出土している。



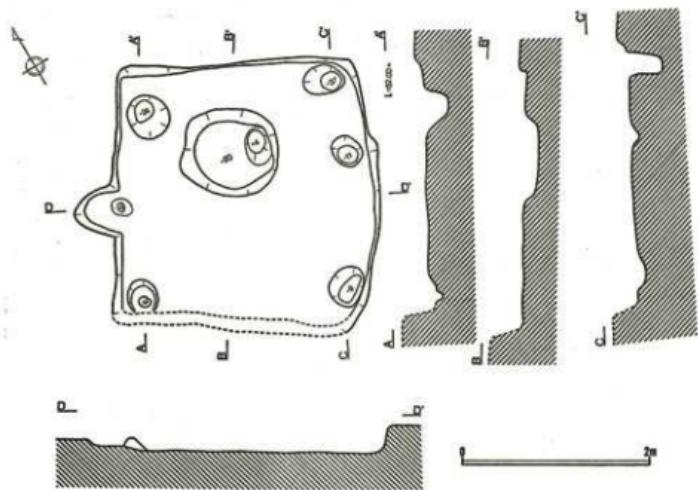
第13図 三ヶ尻天王遺跡 1号住居跡



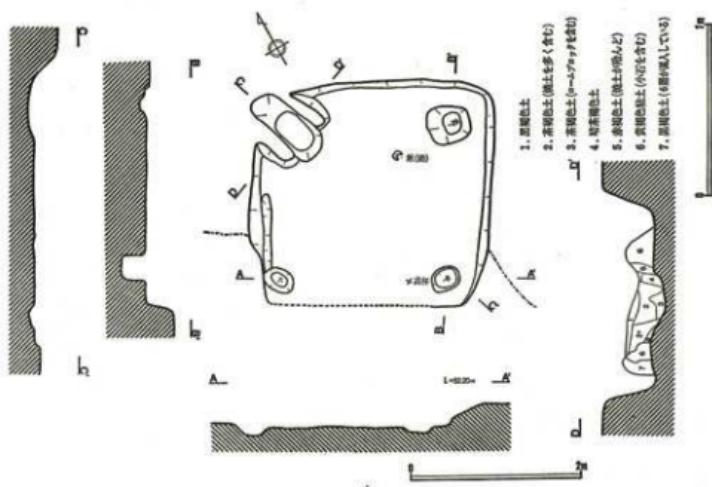
第14図 三ヶ夙天王造跡 2号住居跡



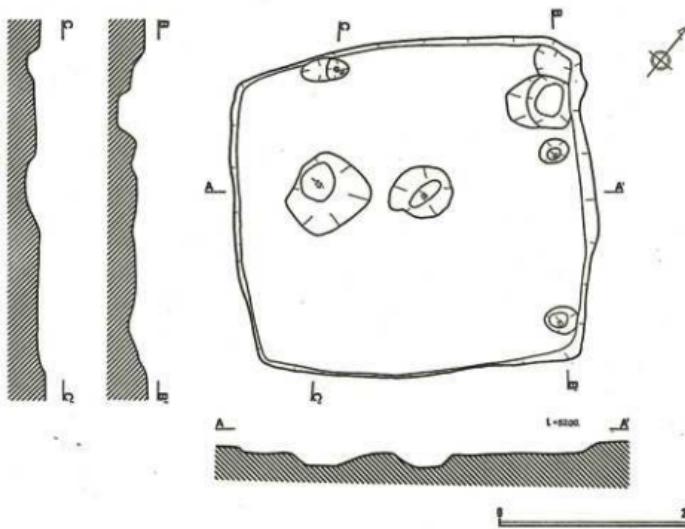
第15図 三ヶ尻天王遺跡 3号住居跡



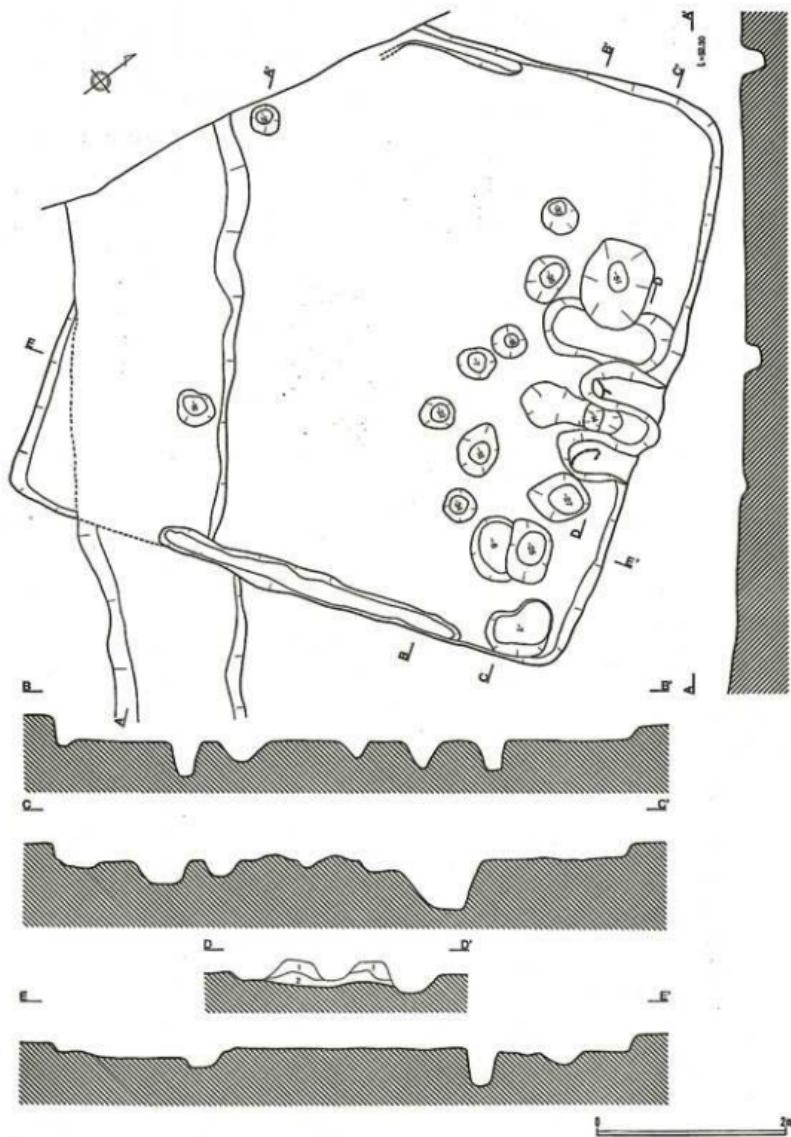
第16図 三ヶ尻天王遺跡 4号住居跡



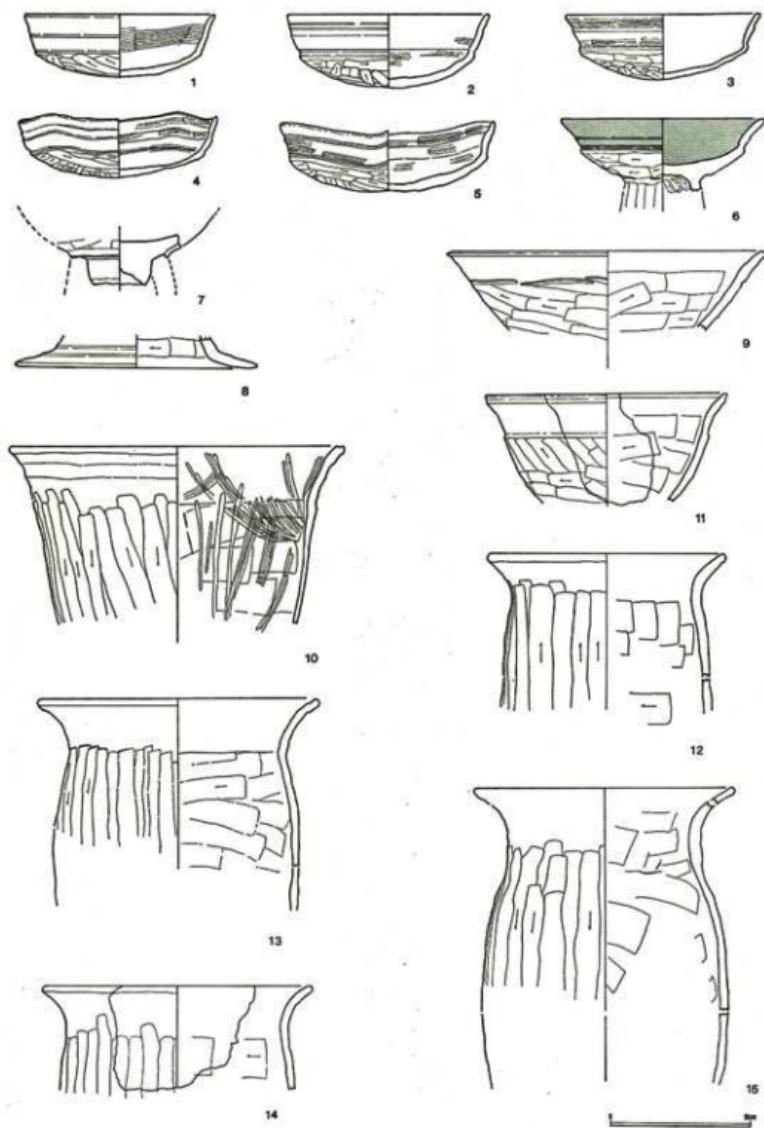
第17図 三ヶ尻天王遺跡 5号住居跡



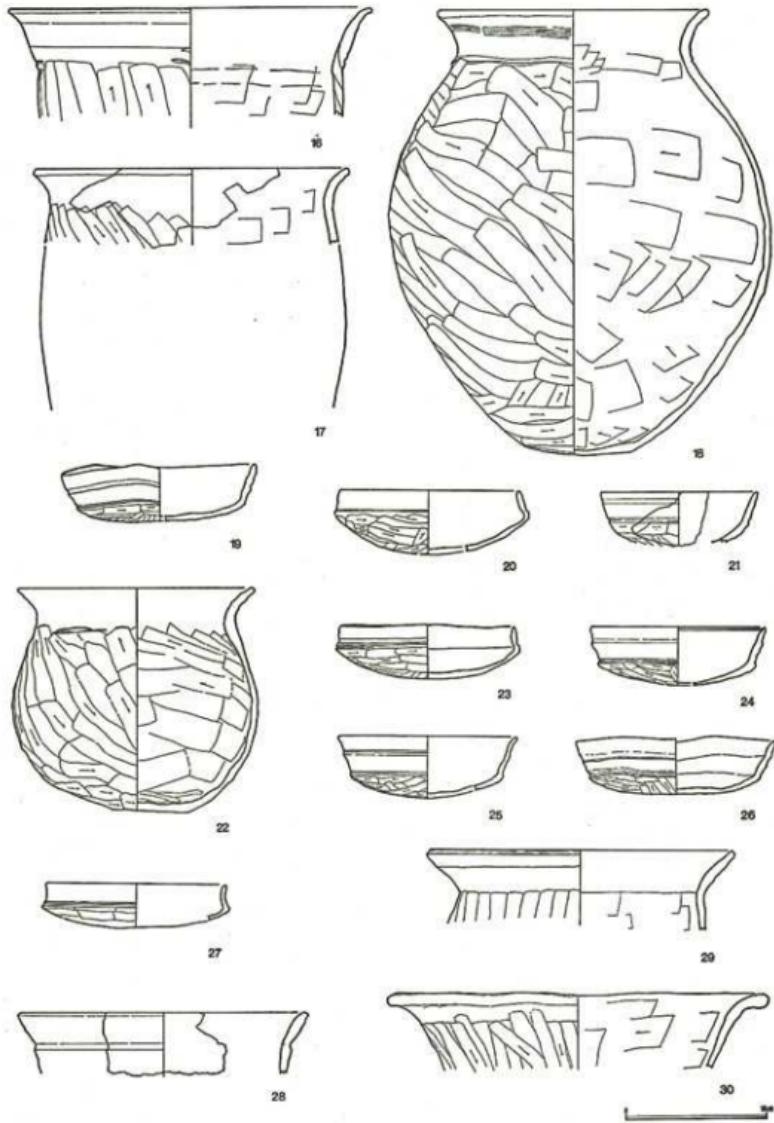
第18図 三ヶ尻天王遺跡 7号住居跡



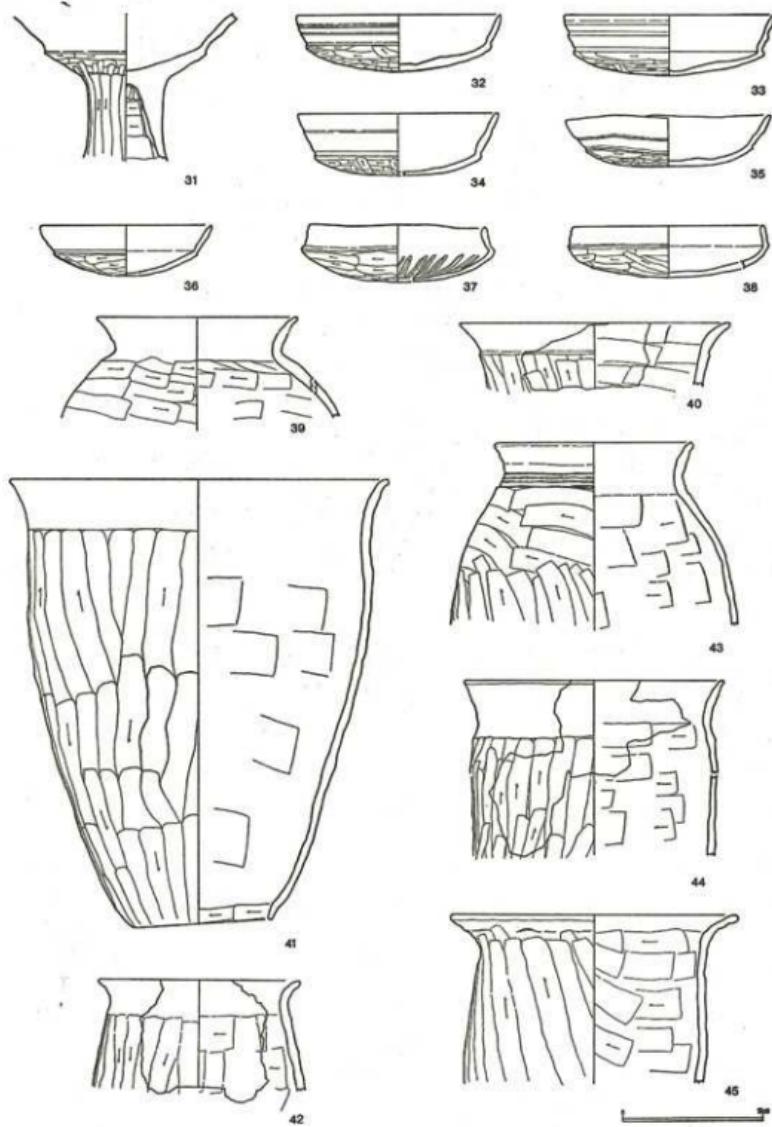
第19圖 三ヶ尻天王遺跡 6号住居跡



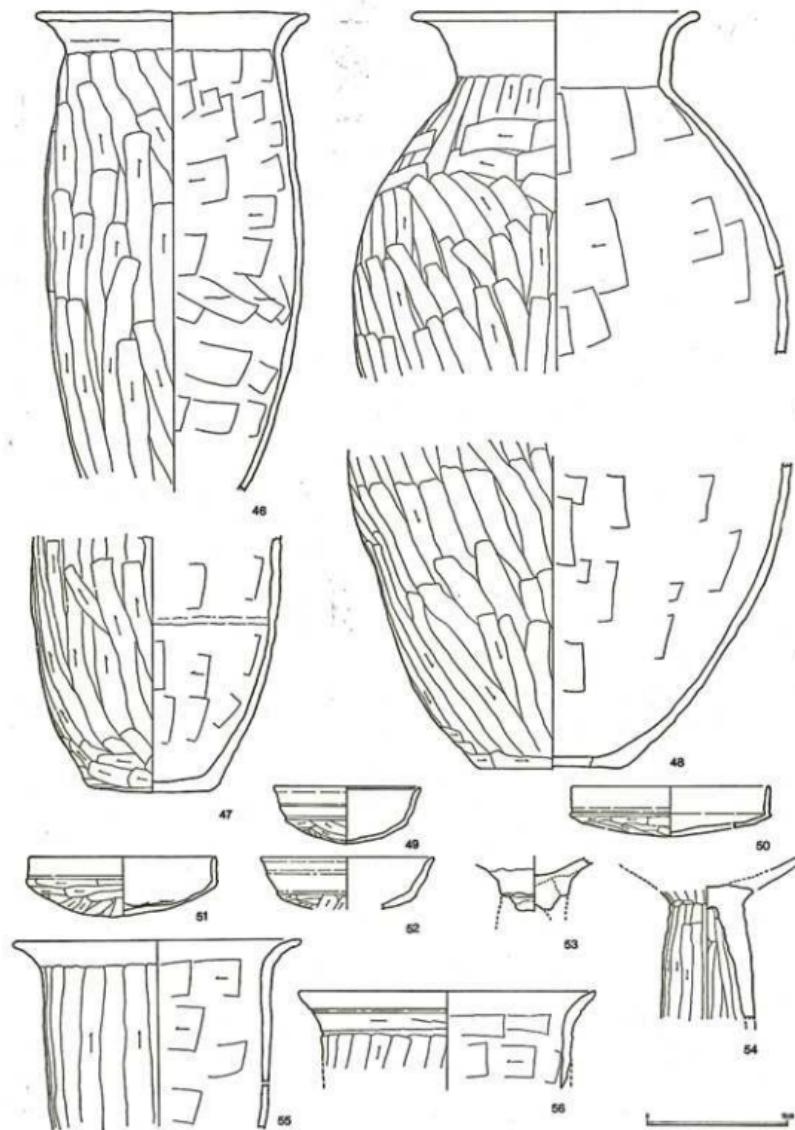
第20図 三ヶ尻天王造跡住居跡出土土器 (1)



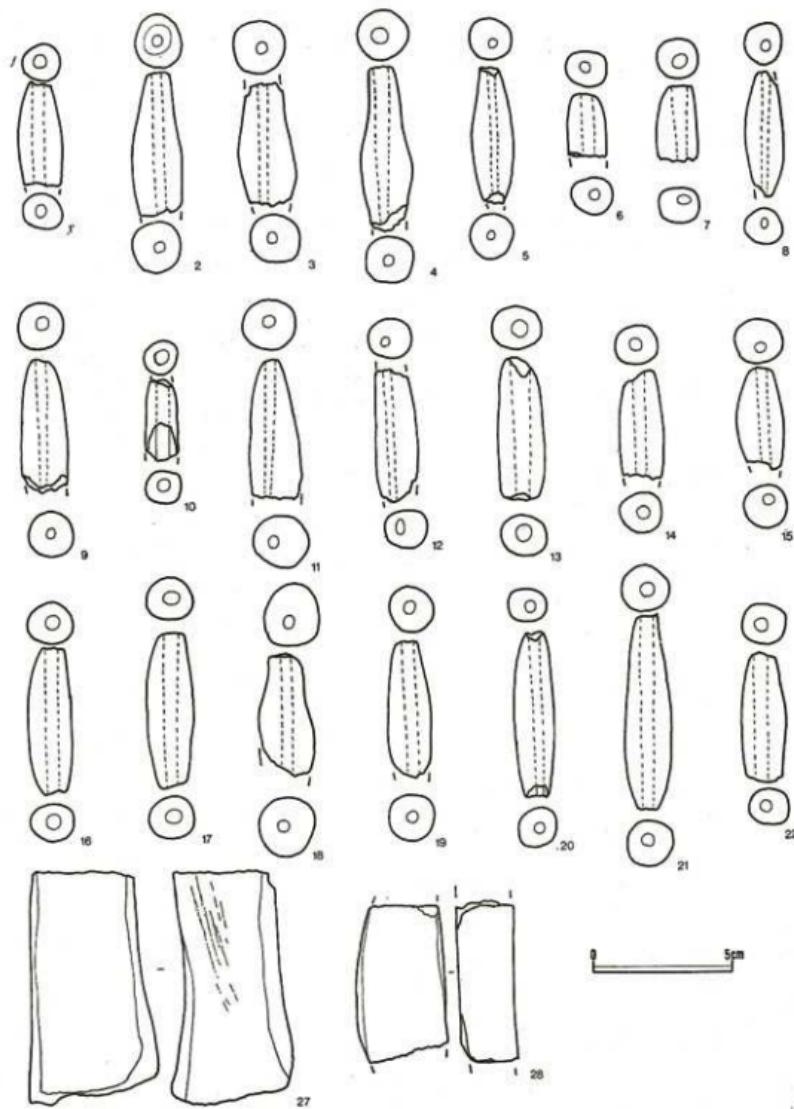
第21図 三ヶ尻天王遺跡住居跡出土土器 (2)



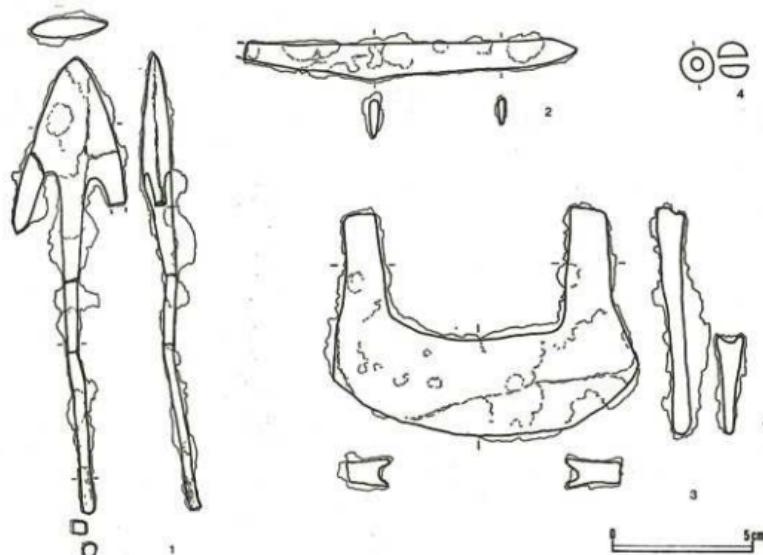
第22図 三ヶ尻天王遺跡住居跡出土土器 (3)



第23図 三ヶ尻天王遺跡住居跡・グリッド出土土器



第24図 三ヶ尻天王遺跡土鍤・砥石



第25図 三ヶ尻天王遺跡出土鉄鏃・刀子・鐵鏃・ガラス玉

第4表 三ヶ尻天王遺跡1号住出土土器観察表（第20・21図）

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	口径13.5cm 器高 4.5cm	口縁部、外傾して立ち、口唇部わずかに外反し、丸い。口縁部中位に段、体部との境に稜を有する。体底部やや扁平で丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ（左回転）、やや強め。刷毛目状擦痕残存。体・底部内面へラナデ丁寧。同外面へラケズリ。内外面黑色研磨。	胎土細。石英・角閃石等の細粒砂をやや多く含む。淡褐色。焼成良。完存率70%貯蔵穴出土。
2	壺	口径14.3cm 器高 5.3cm	口縁部やや内湾気味に外傾して立つ。上位に二条の浅い沈線有し、中位にゆるい段、体部との境に稜と沈線を有する。口縁部はゆるく屈曲していて、内面にも稜をもつ。体部は丸く、やや深い丸底。	口縁部内外面ヨコナデ（左回転）。体・底部内面へラナデ丁寧。同外面へラケズリ後軽いナデ。	胎土やや細。角閃石・石英の細粒砂多く、赤褐色粒も含む。P-9。朱褐色。焼成良。完存率50%。
3	壺	口径13.8cm 器高 4.6cm	口縁部は外反して立ち、口唇部は外につまみ出され、肥厚する。口縁中位に段、体部との境に稜を有する。体部はやや直線的に底部へ移行し、底部はわずかに突出する。	口縁部内外面ヨコナデ（左回転）。外面に刷毛目状擦痕残存。体・底部内面へラナデ後、軽いユビナデか。同外面へラケズリ。	胎土細、ややザラつく。白色粘土を渦状に含む。赤褐色砂粒。角閃石粒多量に含む。淡橙褐色。焼成良。ほぼ完形。貯蔵穴出土。

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	杯	口径14.0cm	口縁部外傾して立ち、口唇部は丸い。口縁部中位に沈線2条および段を有し、体部との境に沈線と稜を有する。体・底部は丸く、やや扁平。ゆがみ激しい。	口縁部外面ヨコナデ(左回転)。内面に刷毛目状擦痕残存。体・底部内面ヘラナデ丁寧。同外面ヘラケズリ後軽いナデ。	胎土細。角閃石・石英細粒砂多量に含む。橙褐色。焼成良。残存率90%。P-1。
5	杯	口径15.2cm	口縁部外傾して立ち、口唇部は内湾し、ややとがり気味に仕上げられる。口縁部中位に段と1条の沈線、体部との境にも稜と1条の沈線を有する。体・底部は扁平でやや丸い。ゆがみ激しい。	口縁部外面ヨコナデ(左回転)。内面に刷毛目状擦痕残存。体・底部内面ヘラナデ丁寧。同外面ヘラケズリ。	胎土細。角閃石・石英細粒砂多量、赤褐色粒や多量に含む。淡橙褐色。焼成良。残存率50%。P-5。覆土出土。
6	高杯	高杯 4.2cm	口縁部大きく外反し、口唇部はわずかにとがる。口縁部中位に段有し、杯体部との境に稜と沈線有する。杯体部は直線的につぼまり、やや太い脚部に移行する。脚部を欠く。	口縁部外面ヨコナデ(左回転)。内面は杯体部の縁辺に達する。杯体部内面ヘラナデ丁寧。同外面横位ヘラケズリ、脚部外面縦位ヘラケズリ。接合部にヘラ痕あり。脚部内面天井部はユビナデ。	胎土細。角閃石・石英・長石等の細粒砂多く、白色の小石・赤褐色粒1mm前後のものやや多く含む。淡朱褐色。杯部内面全体と、口縁部外面丹塗。焼成良、硬。残存率30%。P-5。覆土出土。
7	高杯		接合部のみの破片。口縁部、脚部とも不明。あるいは、太い長脚で口縁部杯部の大きな形態か。杯部から突出する粘土塊の中央部をへこませて、リング状に作る。	接合部のみの破片。口縁部、脚部とも不明。あるいは、太い長脚で口縁部杯部の大きな形態か。杯部から突出する粘土塊の中央部をへこませて、リング状に作る。	胎土細。角閃石・石灰細粒砂多量に含む。橙褐色。焼成良、硬。P-9。
8	高杯	底径17.2cm	脚据部のみ。やや太い長脚を呈するか? 大きく広がった脚の下端に稜あり、屈曲して据部へ移行。据部は外反気味に開き、中位に段をもつ。据端部はとがる。	脚部下端内面横位ヘラケズリ。据部内外面ヨコナデ(左回転か?)	胎土細、ザラザラ。角閃石・石英細粒砂多量に含む。淡橙褐色。焼成良、硬。据部のみ1/3。覆土出土。P-5。
9	鉢	口径11.7cm	口縁部は外反気味で、口唇部は外に厚厚気味で、面をもつ。胴部との境にヘラ痕あるが、口縁部から直線的につぼまる。下半部を欠く。あるいは、楕?	口縁部外面ヨコナデ(左回転)。胴部内面横位ヘラナデ。同外面横位・斜位ヘラケズリ。	胎土細。角閃石・石英細粒砂多量、長石・チャート質粒・石灰質粒の小石や多く含む。淡褐色。焼成良、硬。口縁部1/3。床面出土。
10	瓶	口径23.8cm	口縁部は外反して立ち、2段のゆるい段を有する。口唇部は外側につまみ出され、肥厚し、内側に1条の沈線をもつ。頸部から胴部へはわずかにへこむがスムーズに移行し、直線的につぼまっていく。胴下半部と	口縁部~頸部内面ヨコナデ(左回転)。部分的に刷毛目状擦痕あり。胴部内面横位ヘラナデ後ユビナデおよびヘラミガキ。同外面横位ヘラケズリ。	胎土やや細。石英・雲母・角閃石等の細粒砂、長石等の砂粒を含む。淡褐色。焼成良。残存率口縁部30%。P-1。床面出土。

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
11	鉢	口径17.2cm	底部を欠く。 口縁部外反して立ち、口唇部は稜をもち、つまみ上げられとがり気味。胴部との境に稜あり。胴部はやや丸味をもってつまる。底部は欠失。あるいは底か?	口縁部内外面ヨコナデ(右回転)。胴部内面横位ヘラナデ。同外面上位斜位ヘラケズリ、下位横位ヘラケズリ。	胎土細、ザラザラ。石英・角閃石多量、チャート質粒・石灰質粒の小石をやや多く含む。淡橙褐色。焼成良。口縁部1/6。覆土出土。P-6。
12	甕	口径17.0cm	口縁部はゆるく外反し、口唇部はわずかに外側に肥厚し、外に面をもつ。頸部はゆるく湾曲し、胴部に移行。胴部は小さく張るが、まっすぐ伸びる。	口縁部～頸部内面ヨコナデ(左回転)。胴部内面横位ヘラナデ。同外面縱位ヘラケズリ。	胎土細。角閃石・石英・長石等粗粒砂多く、小石も多量に含む。暗橙褐色。内面の色は明るい。焼成良・硬。残存率10%。P-1。壁際出土。
13	甕	口径20.0cm	口縁部外反して立ち、口唇部は内湾気味に外につままれ内側にゆるくくぼみ、外側に面あり。頸部はゆるく屈曲して胴部に移行。胴部は小さく張り、まっすぐ伸びる。	口縁部～頸部内外面ヨコナデ(左回転)、強め。胴部内面横位ヘラナデ。同外面縱位ヘラケズリ。	胎土細。長石・石英等の小石1~3mmのもの多量に含む。淡褐色。焼成良。完存率30%。床面出土。
14	甕	口径19.2cm	口縁部外反して立ち、口唇部は丸い。頸部は外湾してスムーズに胴部に移行。胴部は小さく張るが、まっすぐ伸びる。	口縁部～頸部内外面ヨコナデ(左回転)。胴部内面ヘラナデ。同外面縱位ヘラケズリ。風化激しく整形痕不明瞭。	胎土やや細。石英・長石等小石を多量に含む。淡橙褐色。焼成良。口縁部のみ1/6残存。P-1。
15	甕	口径 (18.6cm?) 胴径17.6cm	口縁部やや大きく外反する。頸部は直立し、やや厚手の作り。胴部へはゆるく湾曲しながら移行。胴部は小さく張り、まっすぐ伸びる。	口縁部内外面ヨコナデ(左回転)、強め。ハケ目状擦痕多数。頸部～胴部内面横位ヘラナデ。同外面縱位ヘラケズリ。	胎土やや細。長石・石英・赤褐色粒等粗・細粒砂多量に含む。角閃石はごく少量。淡褐色。焼成良。完存率13%。P-1。壁際出土。
16	甕	口径25.8cm	口縁部外傾して立ち、口唇部は外反し、外につまみ出される。頸部はゆるく「J」の字に屈曲して胴部に移行。ヘラ痕あり。胴部はあまり張らず、筒状の長胴か?	口縁部～頸部内外面ヨコナデ(左回転)。胴部内面横位ヘラナデ。同外面縱位ヘラケズリ。	胎土細。石英・角閃石細粒砂多量、長石・チャート質粒・石灰質粒の小石をやや多く含む。淡橙褐色。焼成良・硬。口縁部1/6残存。P-9。
17	甕	口径 (22.4cm)	口縁部ゆるく外反して立ち、口唇部はつまみ出され、丸い。頸部は直立気味で、口縁部から胴部までスムーズに湾曲して移行。胴部は小さく張る。	口縁部内外面ヨコナデ(右回転)。頸部～胴部内面横位ヘラナデ。同外面斜位ヘラケズリ。器面磨滅して、整形痕不明瞭。	胎土やや細、ザラザラ。貝をすりつぶしたような砂が多量、石英・角閃石などや多。淡橙褐色。焼成良。口縁部1/6残存。カマド底部出土。
18	甕	口径19.3cm 胴径27.2cm 器高31.6cm	口縁部ゆるく外反して立ち、口唇部は外につまみ出され、とがり気味。頸部はゆるく屈曲し、胴部へ移行。胴部は大きく張り出し、丸	口縁部～頸部内外面ヨコナデ(左回転)。一部にハケ目状擦痕残存。胴部内面上半横位、下半斜位ヘラナデ丁寧。同外面上位横位、中位	胎土やや細。角閃石・長石等の砂粒多量に含む。暗橙褐色。焼成良。完存率80%。

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
			い。最大径は中位にある。底部はやや突出し、平底気味に削り出される。	斜位、下位横位へラケズリ。底面へラケズリ無方向。頸部と胸部の境にヘラ痕の段。	

第5表 三ヶ尻天王遺跡2号住出土土器觀察表（第21図）

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
19	坏	口径13.8cm 器高 4.1cm	口縁部外傾して立ち、口唇部はややとがる。口縁部中位と沈線1条、体部との境に沈線1条と稜を有する。体部は浅く扁平。やや歪みあり。	口縁部内外面ヨコナデ（左回転）。木口状工具使用か？体・底部内面ヘラナデ丁寧。外面へラケズリ。内外面とも黒色研磨。	胎土細。角閃石・石英等細粒砂多量。橙褐色。焼成良。完存率60%。覆土出土。
20	坏	口径12.7cm 器高 4.5cm	口縁部外傾して立ち、口唇部はとがり氣味だが丸い。口縁部と体部との境に細い沈線と稜あり。体・底部は丸く、深い。	口縁部内外面ヨコナデ（左回転）。木口状工具使用か？体部内面木口状工具のナデか？擦痕多数。底部内面ヘラナデ丁寧。ヘラ痕数ヶ所。体・底部外表面へラケズリ。	胎土細。角閃石・石英等細粒砂多量に含む。朱褐色。焼成良。完存率50%強。貯穴・覆土出土。
21	坏	口径11.1cm	口縁部外傾して立ち、口唇部はとがり氣味。口縁部上位に浅い沈線、体部との境に沈線と稜あり。体・底部丸い。	口縁部内外面ヨコナデ（左回転）。体・底部内面ヘラナデ丁寧。同外面へラケズリ。内外面黒色研磨か？	胎土細。石英・角閃石の細粒砂多量に含む。橙褐色。焼成良。口縁部1/6残存。

第6表 三ヶ尻天王遺跡3号住出土土器觀察表（第21図）

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
23	坏	口径12.4cm 器高 3.9cm	口縁部は短く、内傾して立ち、やや外湾気味に作られる。口唇部はとがる。体部との境に棱とゆるい沈線有する。体・底部丸く、若干扁平な感じ。ややゆがみ。	口縁部内外面ヨコナデ、やや強め（左回転）。体・底部内面へラナデ丁寧。同外面へラケズリ。	胎土細。石英・角閃石微細粒砂多量、赤褐色粒・石灰質粒の径1mm大小の小石含む。淡橙褐色。焼成良。完存率80%。

第7表 三ヶ尻天王遺跡4号住出土土器觀察表（第21図）

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
24	坏	口径12.4cm 器高 4.1cm	口縁部外傾して立ち、口唇部はとがる。口縁部中位と浅い沈線と段、口唇部内側に沈線、体部との境に浅い沈線と稜を有する。体・底部はやや丸く、扁平。	口縁部内外面ヨコナデ強め（左回転）。体・底部内面へラナデ丁寧。同外面へラケズリ。内外面黒色研磨。	胎土細。石英・角閃石・石灰質粒等多量に含む。橙褐色。焼成良。ほぼ完形。覆土出土。

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
25	杯	口径12.7cm	口縁部外傾して立ち、口唇部は外反し、丸い。口縁部中位に細い沈線と段、体部との境に沈線と稜を有する。体・底部はやや丸く、扁平。	口縁部内外面と体部外面ヨコナデ(左回転)。木口状工具によるか。体部外面ヘラケズリ。内外面黒色研磨。	胎土細。角閃石・石英等細粒砂多。暗橙褐色。焼成良。完存率30%。覆土出土。
26	杯	口径14.1cm 器高 4.1cm	口縁部外傾して立ち、口唇部はとがる。口縁部中位やや上にゆるい段、中央に沈線あり。体部との境に幅広の沈線と稜あり。体・底部はやや丸く、扁平。	口縁部内外面ヨコナデ(左回転)。体・底部内面ヘラナデ丁寧。同外面ヘラケズリ。内外面黒色研磨。	胎土細。角閃石・石英・石灰質粒など細粒砂多。暗橙褐色。焼成良。完存率60%。覆土出土。
27	杯	口径12.6cm	口縁部は外窓気味に、内傾して立ち、口唇部には、浅い沈線一周。口縁部と体部の境に段2段あり。体底部丸いが、扁平。	口縁部内外面ヨコナデ(左回転)。体部内面ヘラナデ丁寧。外面ヘラケズリ。内外面黒色研磨。	胎土細。角閃石・石英細粒砂多量に含む。暗橙褐色。焼成良・硬。口縁部1/6残存。覆土出土。
28	甕	口径20.6cm	口縁部厚手の作り。口縁部は外傾して立ち、口唇部は外側に面をもつ。頸部との境に稜を有し、頸部は直立する。胴部を欠く。	口縁部～頸部内外面ヨコナデ(左回転)、やや強め。頸部内面はヘラケズリか?	胎土細。石英・角閃石等細粒砂多く、長石等もやや多い。淡橙褐色。焼成良・硬。口縁部のみ1/6残存。覆土出土。
29	甕	口径21.9cm	口縁部外傾して立ち、口唇部は外側に面をもち、面の中央はゆるい凹縞状にくぼむ。頸部でゆるく「く」の字状に屈曲し、胴部に移行。胴部は小さく張る長脚か?	口縁部内外面ヨコナデ(左回転)。頸部内面ヘラナデ。同外面縦位ヘラケズリか?	胎土やや細、ザラザラ。長石様の1mm大の小石多量。淡橙褐色。焼成良。口縁部のみ1/6残存。覆土出土。
30	甕?	口径27.0cm	口縁部厚手の作り。口縁部は大きく外反し、口唇部は外につまみ出され、寝る。やや肥厚して丸い。頸部～胴部は直線的につけまる。	口縁部内外面ヨコナデ(左回転)、やや強め。頸部・胴部内面ヘラナデ丁寧。胴部外面縦位ヘラケズリ。ヘラ痕が口縁部外面に一部あり。	胎土細。角閃石・石英・長石等細粒砂多く、赤褐色粒わずかに含む。淡褐色。焼成良。口縁部のみ1/6残存。覆土出土。

第8表 三ヶ尻天王遺跡5号住出土土器観察表(第22図)

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
31	高杯		口縁部は大きく外傾して開き、杯部との境に稜をもつ。杯体部はまっすぐつまり、接合部でゆるく屈曲して、太い長脚の脚部に移行。	口縁部内外面ヨコナデ(左回転)。杯部内面ヘラナデ丁寧。杯体部外面横位ヘラケズリ。脚部外面縦位ヘラケズリ。同内面ユビナデ後、天井部残して横位ヘラケズリ。	胎土細、ややザラつく。角閃石・石英・長石等の細粒砂含み、1mm大以上の赤褐色粒も多い。淡橙褐色。焼成良・硬。完存率50%。覆土出土。

第9表 三ヶ尻天王遺跡6号住出土土器観察表（第22・23図）

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
32	壺	口径14.5cm 器高 4.0cm	口縁部内湾気味に外傾して立ち、口唇部はとがる。口縁部中位に沈線2条あり、体部との境にも浅い沈線と稜がある。体部は丸いが、浅く扁平。	口縁部内外面ヨコナデ（左回転）。体・底部内面ヘラナデ丁寧。同外面ヘラケズリ。	胎土細。角閃石・石英・長石・石灰質粒の微細粒砂多量に含む。橙褐色。焼成良。完存率25%。
33	壺	口径14.8cm 器高 4.3cm	口縁部外傾して立ち、口唇部はとがる。口縁部には明瞭な段が2段あり、体部との境にも浅い沈線と稜を有する。体・底部はやや丸いが扁平。	口縁部内外面ヨコナデ（左回転）、強め。体・底部内面ヘラナデ丁寧。同外面ヘラケズリ。	胎土細、ややザラつく。角閃石・石英等微細粒砂多く、赤褐色粒は小量含む。橙褐色。焼成良。完存率50%。
34	壺	口径14.2cm 器高 4.4cm	口縁部外傾して立ち、口唇部はややとがり気味。口縁部中位に弱い段をもち、体部との境に浅い浅線と稜をもつ。体・底部はやや丸いが扁平。	口縁部内外面と体部内面ヨコナデ（左回転）、やや強め。底部内面ヘラナデ丁寧。体・底部外表面ヘラケズリ。内外面黒色研磨。	胎土やや細。角閃石・石英・石灰質粒の微細粒砂やや多。暗橙褐色。焼成良。完存率25%。
35	壺	口径14.6cm 器高 3.7cm	口縁部内湾気味に大きく外傾して立ち、口唇部はとがり気味だが、丸い。口縁部中位にゆるい段と浅い沈線、体部との境に浅い沈線と稜をもつ。体・底部はやや丸いが、扁平。	口縁部内外面と体部内面ヨコナデ（左回転）、やや強め。底部内面ヘラナデ丁寧。体・底部外表面ヘラケズリ。	胎土細。角閃石・石英・石灰質粒等細粒砂多量に含む。橙褐色。焼成良。完存率50%。
36	壺	口径12.2cm 器高 3.6cm	やや小振りの器形。口縁部やや大きく外傾して立ち、口唇部はとがる。口縁部と体部の境に沈線と稜がある。体・底部やや丸く、突出気味。	口縁部内・外面ヨコナデ（左回転）。体・底部内面ヘラナデ、平滑。同外面ヘラケズリ。	胎土細、ザラザラ。長石等不透明粒の細粒砂多く、角閃石・石英はわずか。橙褐色。焼成良。完存率25%。
37	壺	口径12.6cm 器高 4.0cm	口縁部内傾して立ち、口唇部はとがり気味。口縁部と体部の境に稜があり、体・底部は丸い。ややゆがみあり。	口縁部内外面ヨコナデ（左回転）、やや強め。体底部内面ヘラナデ後暗文状のヘラミガキ。体底部外表面ヘラケズリ。内外面黒色研磨か？	胎土細、角閃石・石英・石灰質粒砂多量に含む。橙褐色。焼成良。完存率50%。
38	壺	口径13.6cm 器高 (3.6cm?)	口縁部やや内傾して立ち、口縁部は丸い。体部との境にゆるい稜がある。体部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ（左回転）。体・底部内面ヘラナデ丁寧。同外面ヘラケズリ。内外面黒色研磨か？	胎土細。長石・角閃石・石英等細粒砂をやや多く含む。暗橙褐色。焼成良。完存率口縁部のみ1/4。
39	小型壺	口径14.3cm	口縁部外傾して立ち、口唇部は外反してつまり出され、ややとがり気味。頸部で「く」の字に屈曲し、胴部へ移行。胴部は丸く、大きく張る。	口縁部～頸部内・外面ヨコナデ（左回転）、強め。胴部内面横位・斜位ヘラナデ。同外面横位ヘラケズリ。	胎土細。角閃石・石英・石灰質粒等微細粒砂多量に含む。淡橙褐色。焼成良・硬。完存率10%。

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
40	瓶	口径19.2cm	口縁部外反して立ち、口唇部はやや細り、丸い。胴部と口縁部の境に段をもち、胴部へ移行。胴部はまっすぐゆるやかにつぼまる。	口縁部外面ヨコナデ(左回転)、強めで、刷毛目状擦痕目立つ。頸部・胴部内面横位ヘラケズリ。同外面斜位ヘラケズリ。	胎土細。石英細粒砂多量、長石・チャート質粒・石灰質粒の粗粒砂や多く含む。暗橙褐色。焼成良・硬。口縁部1/4残存。
41	大型瓶	口径26.9cm 底径 9.8cm 高さ31.8cm	口縁部ゆるく外反して立つ。口唇部は外につまみ出され、寝る。丸い仕上げ。頸部は直立し、スムーズに胴部へ移行。胴部は砲弾形で、筒抜けの底部は端部が細る。	口縁部～頸部内外面ヨコナデ(左回転)、胴部内面横位ヘラナデ丁寧。底面付近の内面横位ヘラケズリで面取り。胴部外面縦位ヘラケズリ。	胎土やや細。長石・石灰質粒の小石を多量、石英・角閃石の細粒砂小量含む。淡橙褐色。焼成良。完存率70%。カマド内出土。
42	甕	口径 14.35cm	口縁部短く、外反して立ち、口唇部はやや寝る。頸部はゆるく湾曲して、胴部へ移行。胴部は砲弾形で、筒抜けの底部は端部が細る。	口縁部～頸部内外面ヨコナデ(左回転)。胴部内面横位ヘラナデ。同外面縦位ヘラケズリ。	胎土細。角閃石・石灰質粒の細粒砂多量に含む。淡褐色。焼成良・硬。口縁部～頸部1/4残存。覆土出土。
43	甕	口径14.1cm	口縁部外傾して立つ。口唇部は外に弱くつまみ出され、丸い。頸部は短く、内傾し、「く」の字に屈曲する。細かい稜をなして整形され、胴部との境に段を有する。胴部はやや大きく張り出しが、長胴である。	口縁部～頸部内外面ヨコナデ(左回転)、やや強め。胴部内面横位ヘラナデ。同外面上位横位・斜位ヘラケズリ。中位以下縦位ヘラケズリ。	胎土やや細、砂っぽい。長石・角閃石等の細粒砂多量に含む。淡橙褐色。焼成良。完存率25%。カマド内および覆土出土。
44	甕	口径 18.45cm	口縁部やや外反して立ち、長い。口唇部は外につまみ出され、肥厚気味になるが、丸い。頸部は外湾気味に直立し、胴部との境に棱あり。胴部はまっすぐ伸びる長胴。	口縁部～頸部内外面ヨコナデ(左回転)。胴部内面横位ヘラナデ丁寧。同外面縦位ヘラケズリ。	胎土細。石灰質粒等の小石3～1mm大のものやや多量に含む。橙褐色。焼成良。完存率5%。覆土出土。
45	甕	口径20.4cm	口縁部大きく外反し、口唇部は弱くつまみ出され、寝る。丸い仕上げ。粘土紐接合痕あり。頸部はゆるく湾曲して胴部へ移行。胴部は小さく張り出しが、長胴。	口縁部外面ヨコナデ(左回転)。頸・胴部内面横位ヘラナデ。同外面縦位・斜位ヘラケズリ。	胎土細、砂っぽい。石灰質粒・チャート質粒の小石をやや多く含み、赤褐色・角閃石・雲母等の細粒砂を少量含む。橙褐色。焼成やや良。完存率20%。カマドソデ部に使用か?
46	甕	口径 19.35cm	口縁部に最大径もつ。口縁部は厚手の作りで外反して立ち、粘土紐接合痕あり。口唇部は弱く外につまみ出され、丸い。頸部は「く」の字に屈曲し、胴部へ移行。胴部は小さく張る長胴。	口縁部外面ヨコナデ(左回転)。胴部内面横位ヘラナデ。同外面縦位ヘラケズリ。	胎土細。長石・黒色粒の小石多量、石英細粒砂少量含む。淡橙褐色。焼成良。完存率75%。覆土出土。
47	甕	底径 8.2cm	胴下半部のみ。長胴。わずか	胴部内面横位ヘラナデ。同	胎土やや細。長石・石英等

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
48	甕	口径20.5cm 胴径31.6cm 器高 (46cm?)	かに張り出し、若干つぼまって底部へ移行。底部はわずかに丸く突き出し、平底風。胴部と底部の境は緩味。 口縁部外傾気味に直立し、口唇部は大きく外反し、丸い。頸部はややゆるく「く」の字に屈曲し、大きく張る丸い胴部へ移行する。胴部はゆるくつぼまり、平底の底部へ移行。	外面中位縱位・斜位ヘラケズリ、下端横位ヘラケズリ。底面ヘラケズリ無方向。	の小石や多量、角閃石細粒砂少量化。橙褐色。焼成良。完存率15%。覆土出土。

第10表 三ヶ尻天王遺跡1号竪穴出土土器観察表(第21図)

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
22	鉢	口径16.8cm 胴径17.4cm 底径 5.2cm 器高17.9cm	口縁部外反して立ち、口唇部は弱くつまみ出され、丸い。頸部はゆるく屈曲し、胴部にスムーズに移行。胴部はやや張り出し、下半部は丸い。底部は平底で、木葉度が残る。	口縁部～頸部内外面ヨコナデ(左回転)。胴部内面斜位または横位のヘラナデ。同外面斜位ヘラケズリ。下部は横位ヘラケズリ。	胎土細。角閃石・石英・長石の細粒砂多量に含む。淡褐色。焼成良。完存率70%。床面出土。

第11表 三ヶ尻天王遺跡4号竪穴出土土器観察表(第23図)

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
49	杯	口径10.4cm 器高 4.0cm	口縁部内湾気味に外傾して立ち、口唇部は外につまみ出され、とがり氣味。内面に沈線一周。口縁部中位に浅い沈線、体部との境に浅い沈線と棱を有する。体・底部や丸く、突出する感じ。小振りの杯。	口縁部内外面ヨコナデ(左回転)、強め。体・底部内面ヘラナデ丁寧。同外面ヘラケズリ。	胎土細。角閃石・石英微細粒砂多量に含む。淡橙褐色。焼成良・硬。完存率40%。
50	杯	口径14.0cm	口縁部直立し、口唇部はとがり氣味。体部との境に幅広のゆるい沈線と棱あり。体・底部はやや丸いが、扁平。	口縁部内外面と体部内面ヨコナデ(左回転)。底部内面ヘラナデ。体・底部外側ヘラケズリ。	胎土細。角閃石・石英・石灰質粒の細粒砂多量に含む。橙褐色。焼成良。口縁部のみ1/4残存。

第12表 三ヶ尻天王遺跡グリッド出土土器観察表（第23図）

番号	器種	大きさ	形態の特徴	手法の特徴	備考
51	杯	口径13.2cm	口縁部直立し、口唇部はややとがり気味だが、丸い。口縁部との体部の境に浅い沈線と稜をもつ。体・底部やや丸く、若干突出した感じ。	口縁部外面および体部口縁部内面ヨコナデ（左回転）、強め。体・底部内面ヘラナデ丁寧。ヘラ痕ややあり。同外面ヘラケズリ。	胎土細、ややザラつく。角閃石・石英等の細粒砂多く含む。淡褐色。焼成良。完存率50%。
52	杯	口径 13.35cm	口縁部やや内湾気味に外傾して立ち、口唇部は小さく外反して、ややとがる。口縁部中位にゆるい段、体部との境に稜あり。体・底部はやや丸いが、扁平。	口縁部内外面ヨコナデ（左回転）。体部内面ヘラナデ。同外面ヘラケズリ。	胎土細。石英・角閃石細粒砂多量、石灰質細粒砂やや多く含む。橙褐色。焼成良・硬。口縁部1/4残存。26Aグリッド出土。
53	高杯		接合部のみ。杯部は直線的に開く。稜をもって直線的に外傾する器形か？脚部はやや太めの長脚か。接合部中央は下からヘラで抉り込まれる。	体部外面ヘラナデか？左回転の刷毛目状擦痕あり。杯部内面ヘラナデ丁寧。接合部内面は指ナデ後ヘラケズリ。	胎土細。角閃石・石英等の細粒砂多く、石灰質の小石やや多く含む。淡橙褐色。焼成良・硬。
54	高杯	脚径 6.6cm	口縁部・杯体部・脚裾部を欠く。やや太めの長脚で脚部に向かってやや開く。接合部はゆるく屈曲し、口縁部は外傾して稜をもつか？	杯部内面ヘラナデか？脚部内面ユビナデ。同外面縦位ヘラケズリ。	胎土細。石英・角閃石の細粒砂多量に含む。淡橙褐色。焼成良・硬。脚部のみ1/3残存。
55	甕	口径20.4cm	口縁部最大径。口縁部大きく外反し、口唇部は瘦る。外につまみ出され、丸い。頸部はゆるく渦曲して胸部に移行。胸部はまっすぐ伸びる長脚。	口縁部～頸部内外面ヨコナデ（左回転）。胸部内面横位ヘラナデ平滑。同外面縦位ヘラケズリ。	胎土やや細。長石・チャート質の小石多量。石英の粗粒砂少量含む。橙褐色。焼成良。完存率10%。
56	甕	口径16.1cm	口縁部最大径。口縁部ゆるく外反して立ち、口唇部はやや丸く、とがり気味。口縁部の作り厚手で、中位に浅い沈線あり。頸部はゆるく屈曲して胸部に移行する。胸部との境に段あり。胸部まっすぐ伸びる長脚。	口縁部～頸部内外面ヨコナデ（左回転）、強め。頸部～胸部内面横位ヘラナデ。胸部外面縦位ヘラケズリ。	胎土細、砂っぽい。角閃石・石英細粒砂やや多量、赤褐色粒粗粒砂少量含む。橙褐色。焼成良。口縁部のみ1/4残存。21B、28Cグリッド出土。

第13表 三ヶ尻天王遺跡出土土錘・砥石計測表

番号	名称	遺構名	材質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第24図1	土錘	1号住	土	3.7	1.4	1.4	8.2	下半欠
2	〃	〃	〃	5.2	1.8	1.8	13.5	〃
3	〃	〃	〃	4.5	1.9	1.9	11.2	両端欠
4	〃	〃	1	5.8	1.8	1.7	12.5	下半欠
5	〃	〃	5	4.8	1.5	1.5	9.5	
6	〃	床面	〃	2.3	1.5	1.2	3.2	下半欠
7	〃	1号住	〃	2.7	1.5	1.4	2.8	〃
8	〃	1号住床面	〃	4.4	1.5	1.5	7.8	両端欠
9	〃	2号墳	〃	4.7	1.6	1.6	10.5	下半欠
10	〃	〃	〃	2.7	1.3	1.2	3.5	〃
11	〃	1号土壙	〃	5.0	1.9	1.8	11.0	〃
12	〃	〃	〃	4.8	1.6	1.4	9.8	両端欠
13	〃	9号土壙	〃	5.0	1.7	1.5	10.2	下半欠
14	〃	〃	〃	3.7	1.6	1.4	3.5	〃
15	〃	24号土壙	〃	3.6	1.6	1.5	3.5	両端欠
16	〃	48号土壙	〃	5.1	1.5	1.3	9.0	
17	〃	A1グリット	〃	5.5	1.6	1.6	10.2	
18	〃	〃	〃	4.2	2.1	2.0	10.2	下半欠
19	〃	〃	〃	4.9	1.5	1.5	10.5	〃
20	〃	〃	〃	5.9	1.5	1.4	10.5	
21	〃	〃	〃	6.9	1.6	1.6	18.0	
23	〃	〃	〃	4.4	1.5	1.2	9.5	下半欠
22	〃	C26グリット	〃	5.7	1.6	1.6	10.0	
24	〃	〃	〃	2.5	1.4	1.3	3.5	下半欠
25	〃	〃	〃	4.9	1.6	1.4	9.0	〃
26	〃	C28グリット	〃	5.1	1.5	1.5	9.0	
27	砥石	6号住	砂岩	8.1	5.3	4.3	242.5	半欠
28	〃	2号住	〃	5.5	3.2	1.9	60.5	両端欠

第14表 三ヶ尻天王遺跡出土鉄製品・ガラス玉計測表

番号	名称	遺構名	材質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第25図1	鉄鎌	5号墳	鉄	16.1	4.0	0.7	48.23	
2	刀子	1号住床面	〃	11.6	1.3	0.3	21.35	
3	鉄鋤	5号住床面	〃	7.9	10.9	0.8	100.01	
4	ガラス玉	39Cグリット	ガラス	1.2	1.2	1.0	3.24	

3. 掘立柱建物跡と出土遺物

三ヶ尻天王 1号掘立柱建物跡（第26図）

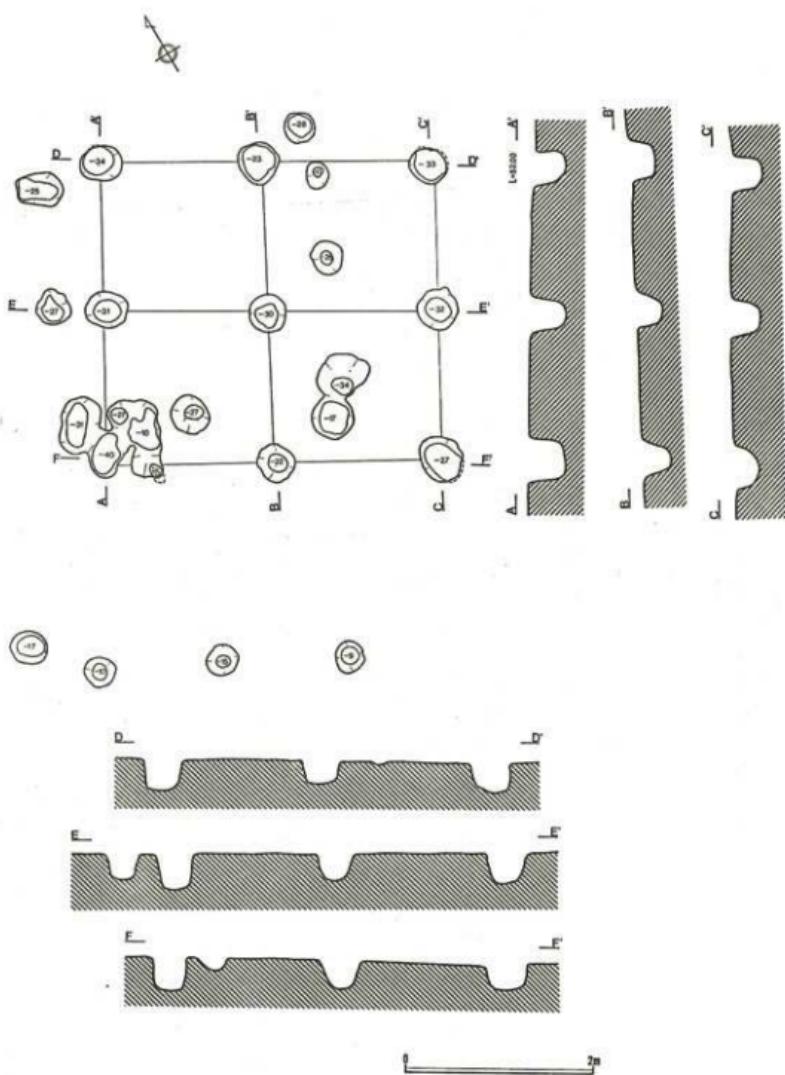
発掘区の中央部南寄りにあり、1号住居跡の8m程南に位置する。住居跡・建物跡分布域の最南端にあたる。2間×2間の総柱建物跡で、東西356cm、南北320cmを測る。唐尺をとれば、東西は6尺等間の2間の近似値であるが、南北が合わず、別の尺度が採用されているかもしれない。まわりに11本の柱穴状ビットがあり、並び方から考えると2間×2間で、桁行が梁行どちらかの柱筋の中央の柱を欠く2間×2間の掘立柱建物跡を2棟復原できそうである。柱穴の掘方の径は38~45cm程であるが、柱底のあるものはない。柱筋はよく通るが、中央の柱筋はわずかに西に振れている。建物の方向はN-41°-Eである。柱穴の深さは30cm前後で、よく掘っている。遺物が出土していないので、時期は明確に出来ないが、奈良・平安期の遺物もないので、古墳時代後期と見ておきたい。

三ヶ尻天王 2号掘立柱建物跡（第27図）

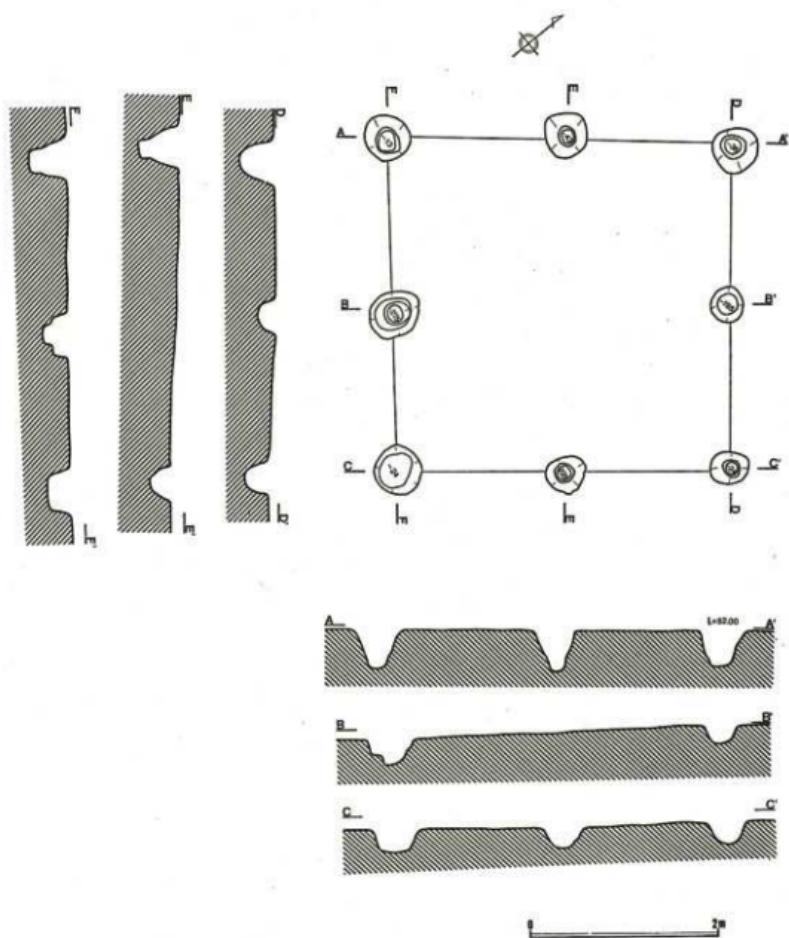
発掘区中央部のやや北寄りの部分にあり、2号住居跡と6号住居跡の間の空閑地のちょうど中間に位置する。東西が北辺348cm、南辺355cm、南北が、東辺355cm、西辺365cmとやや歪みのある柱筋になっている。長さから考えると南北の柱筋が桁行にあたり、南北棟であるが、本来総柱建物になるべきものであったと考えたい。柱痕は8本の柱穴のうち6本に認められる。柱穴の掘方の大きさは35~40cm程の小さいものと、50cm前後の大きなものに大別され、深さも40cm前後の深いものと20~30cm程のやや浅いものがある。尺度はいずれの柱筋も唐尺の6尺等間の2間の近似値である。方向はN-50°-Wである。1号墳と重複関係にあるが、前述のごとく、この建物跡の方が古墳より古い可能性がある。やはり、この造構の周辺にも遺物は見出せない。

三ヶ尻天王 3号掘立柱建物跡（第28図）

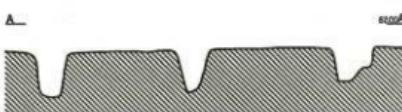
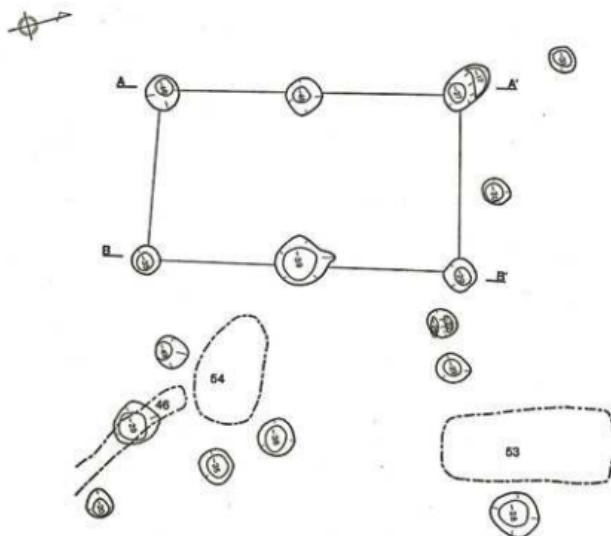
発掘区のほぼ中央西寄りにある。この造構を中心に15m四方は多数の柱穴状ビットがあり、6~8棟の建物が存在したのかもしれないが、柱筋のよく通るものは、3号掘立柱建物跡のみである。1間×2間の南北棟で、桁行西側は319cm、東側333cm、梁行北側は188cm、南側180cmで、やや歪みのある柱筋となる。柱穴の掘方は桁行東側中央の柱穴が径55cmと大きいが、それ以外は35~40cmの大きさで統一される。桁行西側の北柱穴は北西の方向にテラスを持つが、柱の抜き取りのためであろうか。柱穴の深さは30~45cm程で比較的安定している。方向はN-63°-Wである。柱間の長さは、梁行が唐尺の6尺の近似になるが、桁行の320~330cmという値は1号掘立柱建物跡と共通し、当時のある種の尺度と考えたい。周辺から土師器杯・甕・土錠・鉄片等が出土している。



第26図 三ヶ尻天王遺跡 1号掘立柱建物跡



第27図 三ヶ尻天王遺跡 2号据立柱建物跡



第28図 三ヶ尻天王造跡 3号掘立柱建物跡

4. 土壙と出土遺物

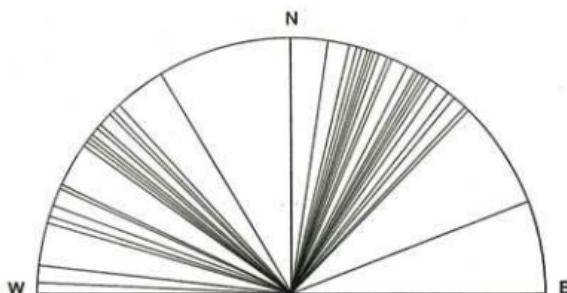
三ヶ尻天王遺跡の土壙（第30～38図）

土壙は90基発見された。その形態により分類が可能である。長方形（A型）と円形（B型）に分かれ、長方形は更に4つに分けた。A 1-1は典型的なもので、整った長方形プランで側面は内傾する壁をもち、底面は平坦である。整った掘り方をする。32例ある。A 1-2はA 1-1と同類であるが内傾壁をもたずややプランが乱れるか、軸方向はしっかりしている。A 1-1が崩れて、当初の形態をとどめないものも含まれる。実際はA 1-1型に含まれるものが多いと思われる。14例ある。A 1型は幅については0.7mと0.9mに集中するので広狭2種になっている。長さについては差が大きい。1.4～2.2m、3～4m、5mを超えるものの3群に分かれるか、個々の差はかなり大きい。A 2型は長さに対して幅が広いもので7例ある。プランはしっかりして定型化したものである。A 3型は長さ1.5m以下、幅80cm以下の小形土壙である。10例ある。A 4型は不定形で、A 1～A 3型とは異なる。

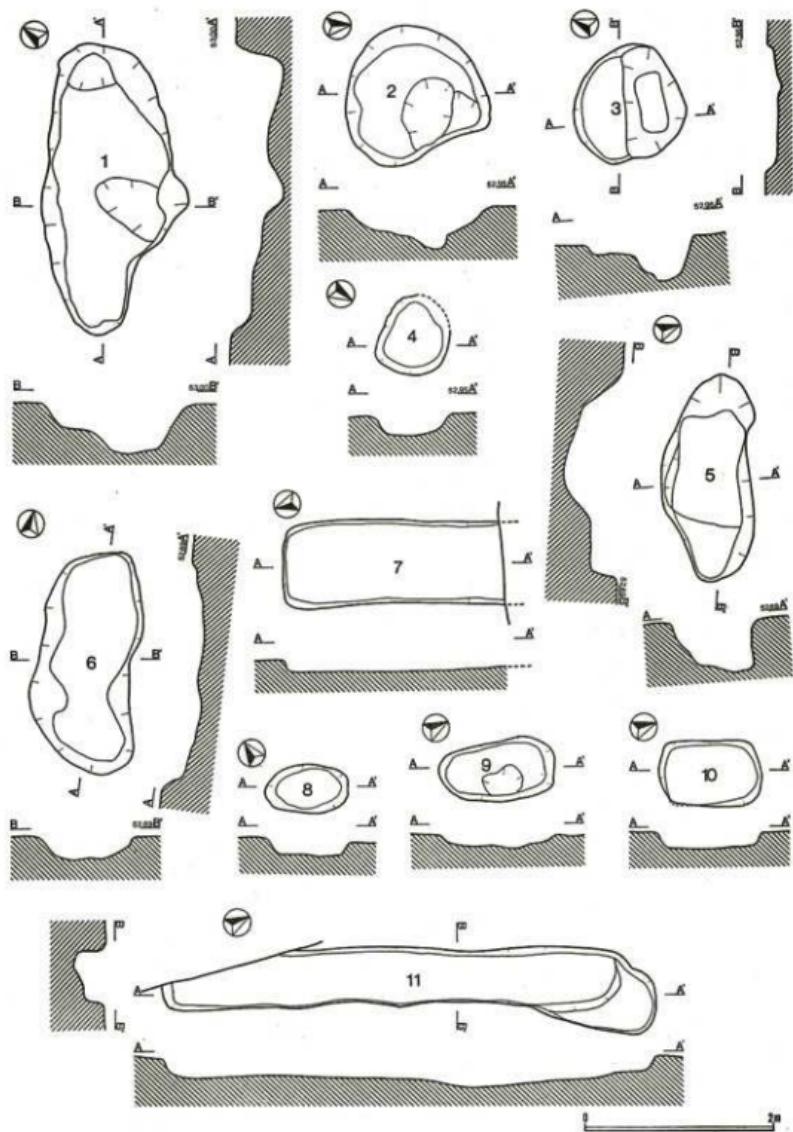
円形土壙は数が少ない。B 1-1型は典型的なもので整ったきれいな掘り方をしている。壁は直で、内傾するものは検出できなかった。6例ある。規模に差があり、1.2m、1.3m、1.4m、の3群に分かれる。B 1-2型はやや乱れたものを示すが、実際はB 1-1型に含まれるものが多いと思われる。1.2mの規模が多い、3例ある。B 2型は0.7～0.8mの径をもつ小形土壙で、規模差を除けばB 1型と同じである。3例ある。B 3型は不定形なものである。

長方形土壙の長軸方位は4群に分かれる。東に偏するものはN-17°-EとN-32°-Eあたりに集中する。西に偏するものはN-50°-WとN-70°-Wに集中している。そして各群相互の偏角は直角に近いことがわかる。したがって一定の方格の区画に沿って作られたことが知られる。

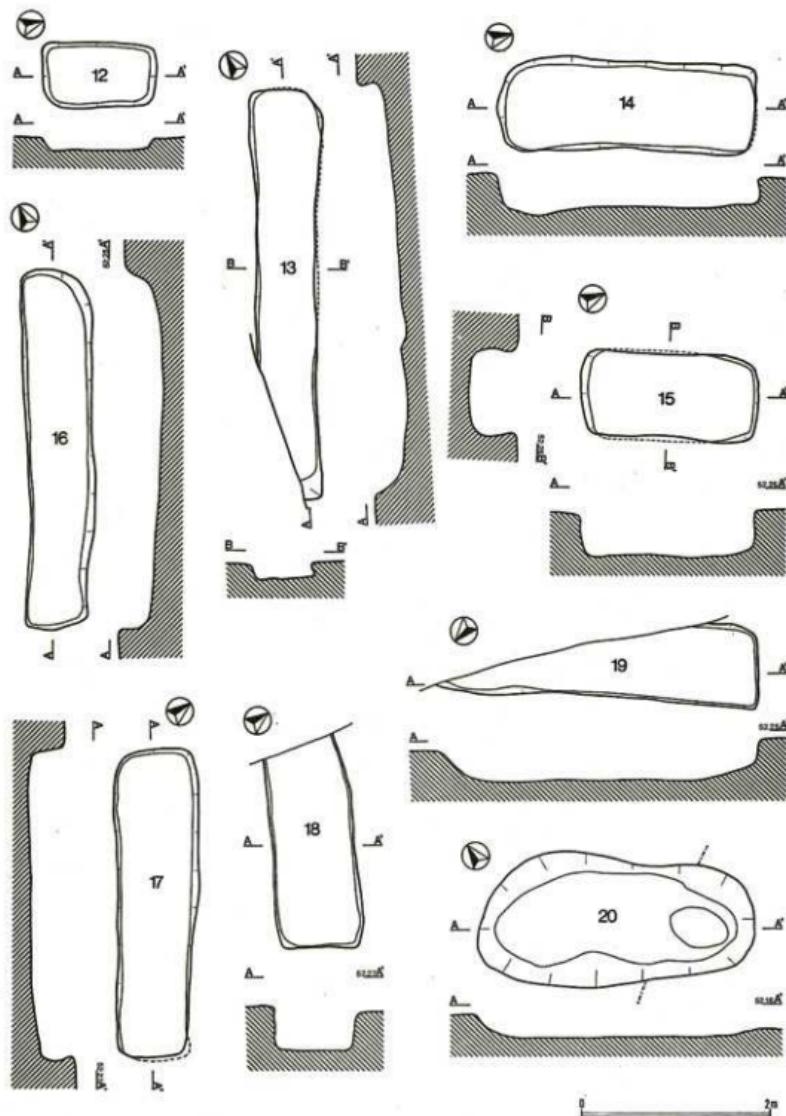
出土遺物は各種あるが、新しいものでは近世のものが混入する。直接土壙と関係する出土状況を示すものは無い。土層は水平堆積が基本であり、ロームブロック土を混入するものが多いので、一時に埋まった可能性が強い。覆土の上層に火山灰を混入するものがある。



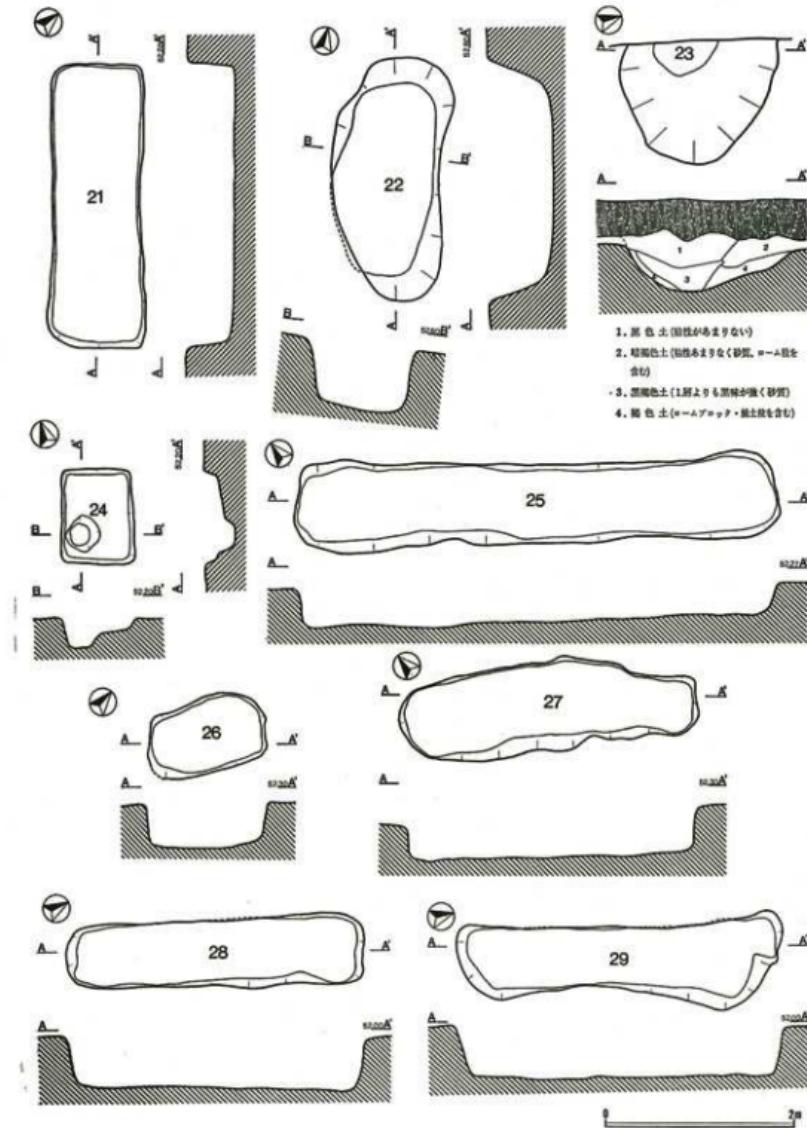
第29図 三ヶ尻天王遺跡長方形土壙の長軸方位



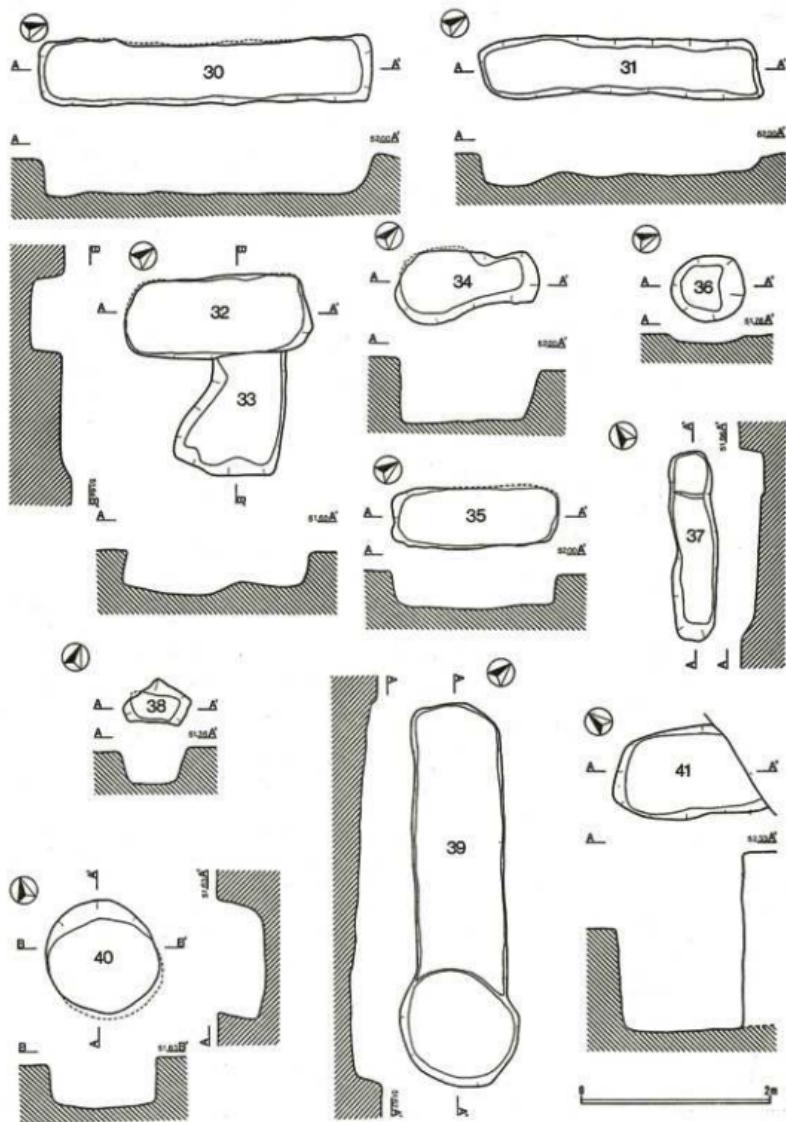
第30図 三ヶ尻天王遺跡土塁全体図および断面図 (1)



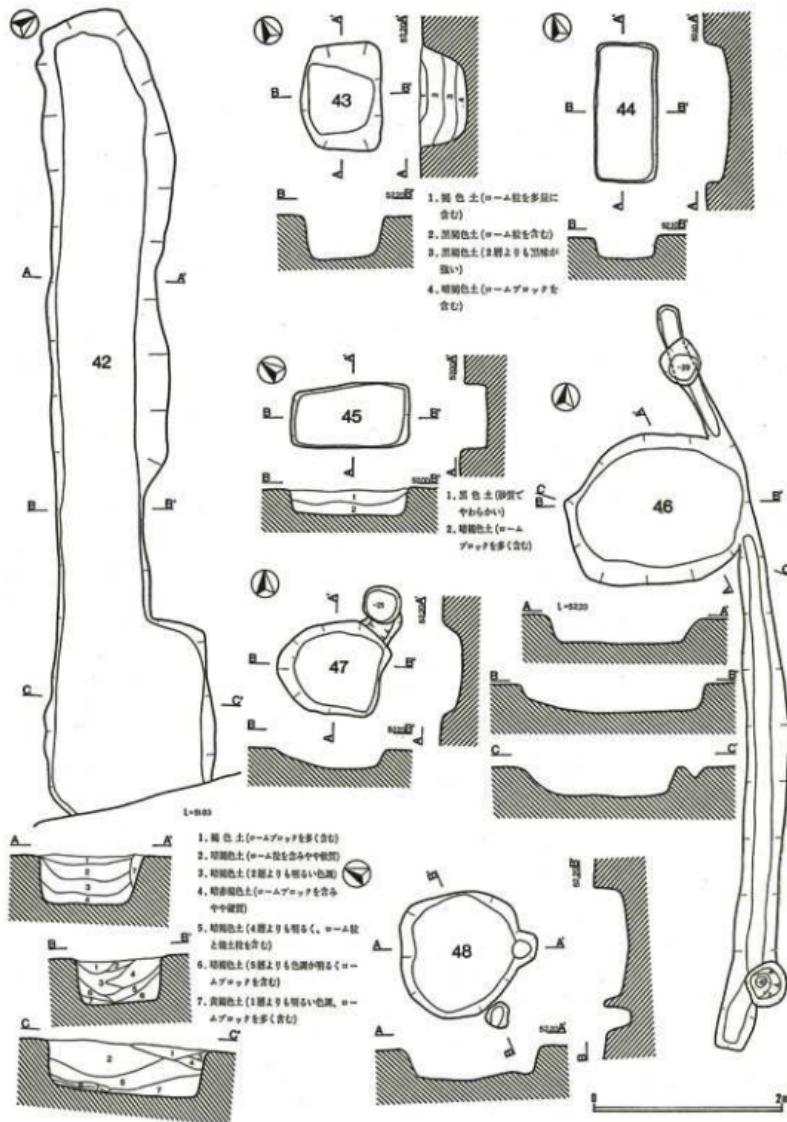
第31図 三ヶ尻天王遺跡土壤全体図および断面図 (2)



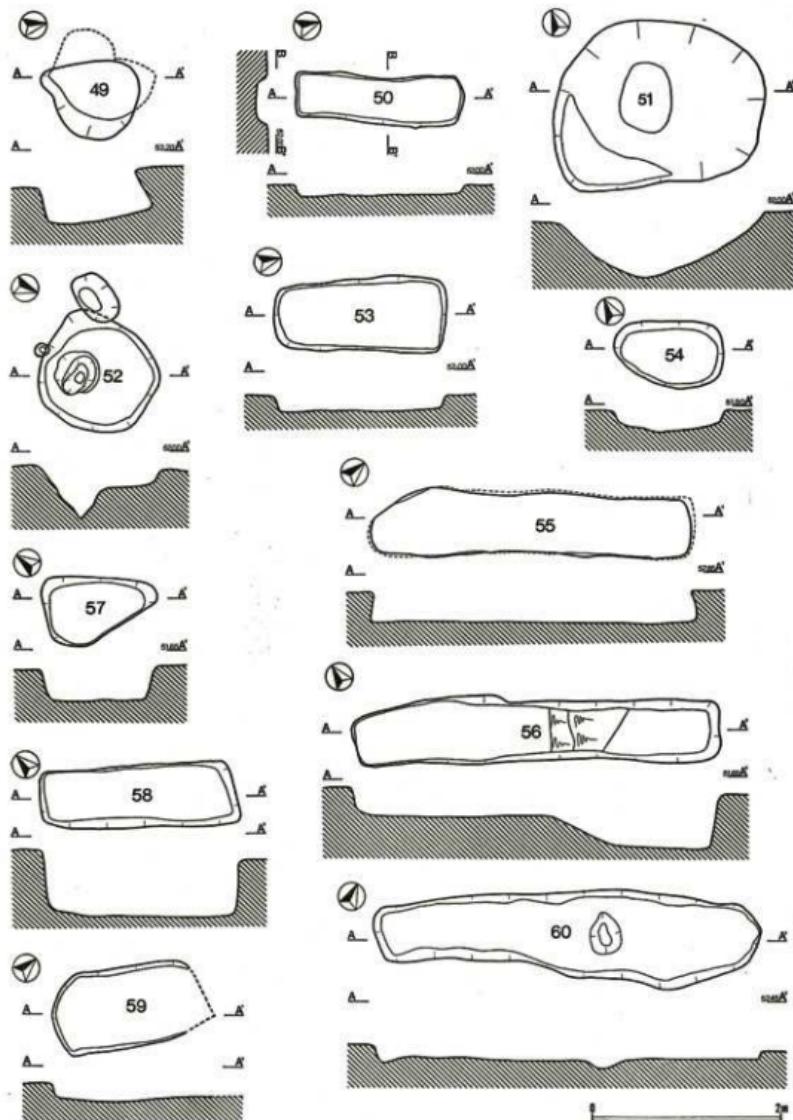
第32図 三ヶ尻天王遺跡土壤全体図および断面図 (3)



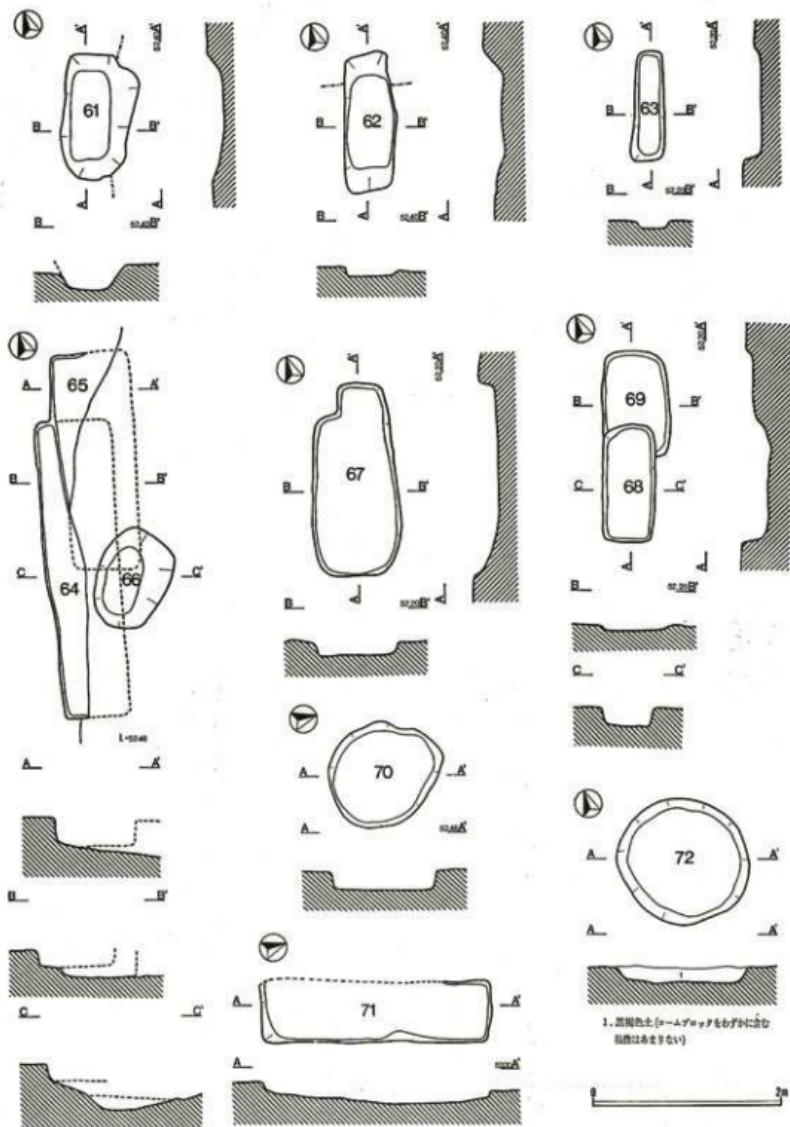
第33図 三ヶ尻天王遺跡土壙全体図および断面図(4)



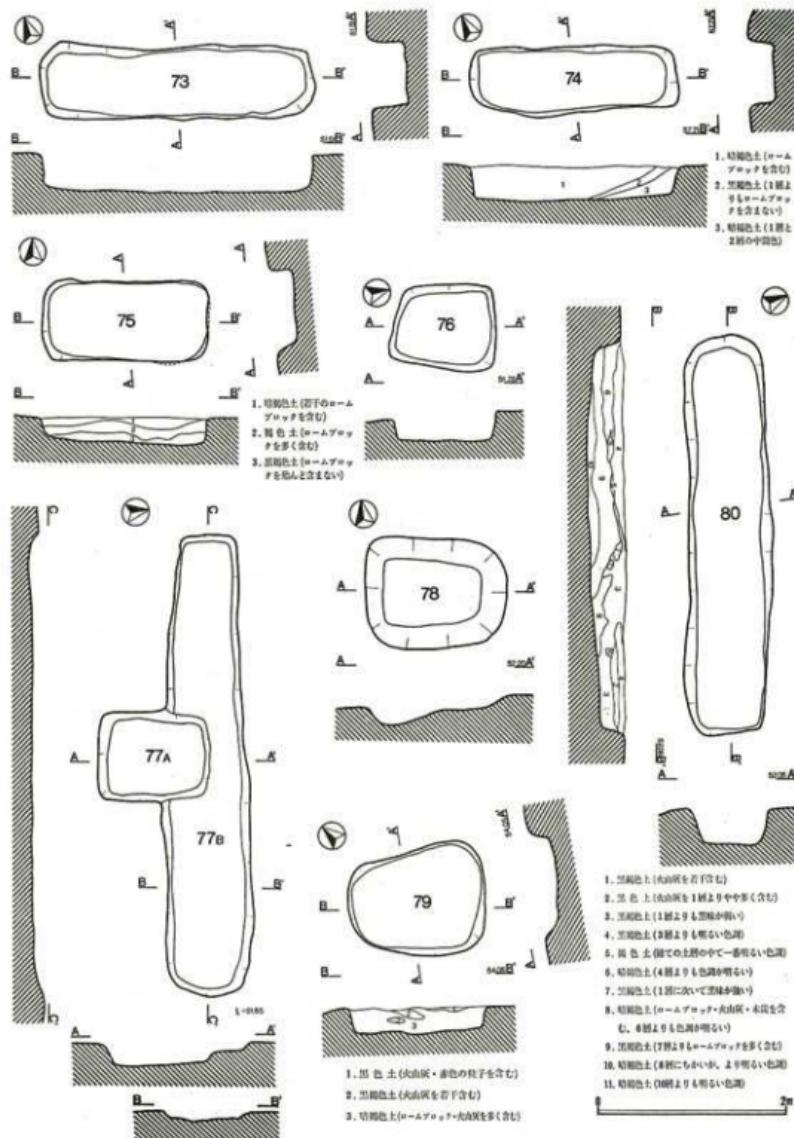
第34図 三ヶ尻天王造跡土壇全体図および断面図 (5)



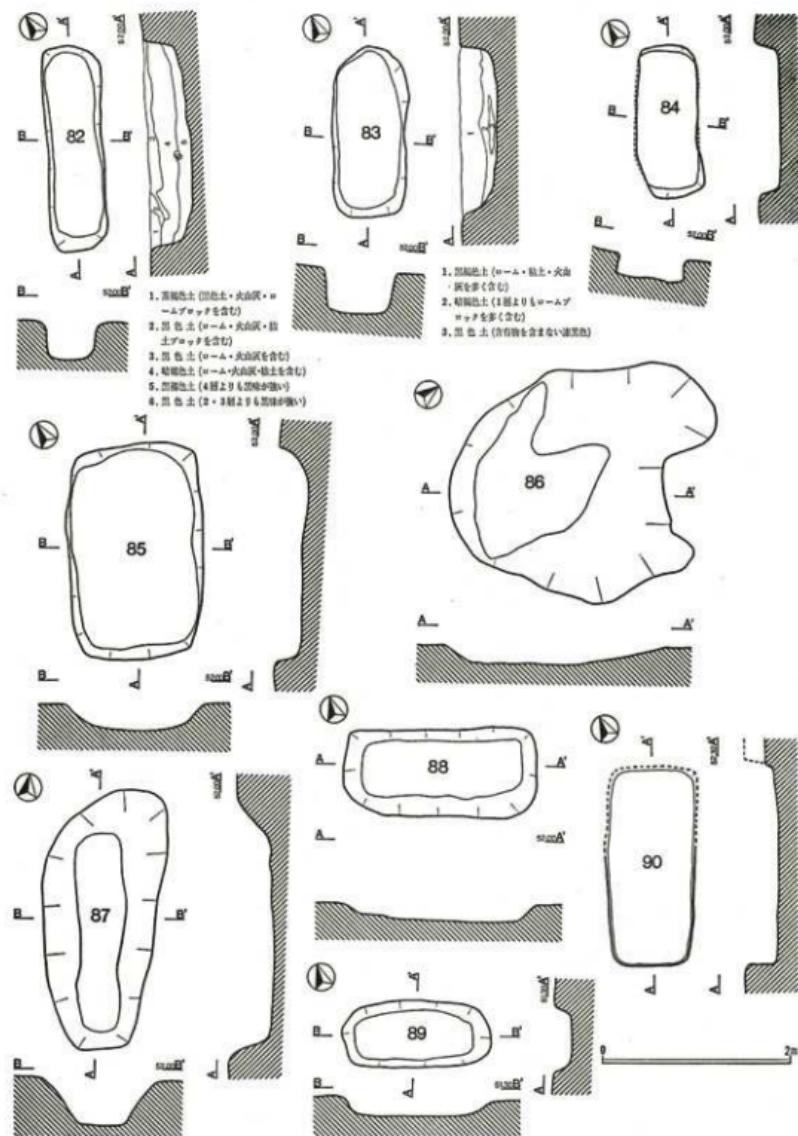
第35図 三ヶ尻天王遺跡土壇全体図および断面図 (6)



第36図 三ヶ尻天王遺跡土塁全体図および断面図 (?)



第37図 三ヶ尻天王遺跡土壤全体図および断面図(8)



第38図 三ヶ尻天王遺跡土壤全体図および断面図 (9)

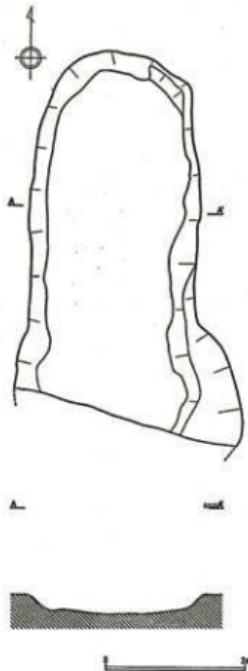
5. その他の遺構と出土遺物

三ヶ尻天王遺跡1号溝（第39図）

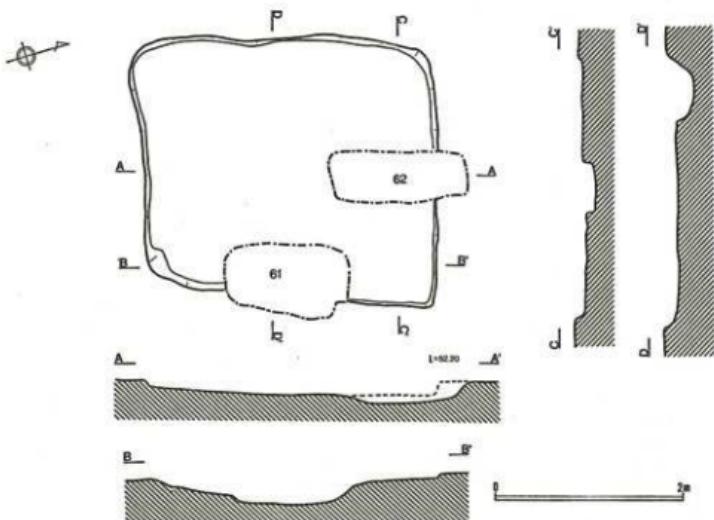
27-C・Dグリットで検出された溝で幅2.5~2.0m、長さは5mまで確認できたが更に南へ延びるものと思われる。底面は舟底状であるが、おうとつがあり、西側がやや浅くなっている。底面標高は51・46mである。南へやや深くなる。遺物は検出されなかった。

三ヶ尻天王遺跡2号溝（第4図）

発掘区の北端で検出された。幅は東→西へ広くなり、0.7~2.2mになっている。底面はわずかに舟底状で、壁面は緩やかに落ちる。やや湾曲している。底は東→西へ低くなり両端で10cmの差がある。溝内からは縄文土器片（後期）、土師器坏、甕、中世土器が出土した。



第39図 三ヶ尻天王遺跡1号溝全体図および断面図



第40図 三ヶ尻天王遺跡 1号竪穴遺構

三ヶ尻天王遺跡 1号竪穴遺構（第40図）

3.1m × 2.8m のやや歪んだ竪穴遺構である。プランが方形なので当初は住居跡としていたが、覆土が褐色土で、ロームブロックを若干含むこと、壁面状況が通常の住居跡のように整っていないことなどの判断で竪穴遺構としたものである。底面はほぼ平坦である。2ヶ所に長方形の土壤があるがこれは覆土中に切り込まれたもので、そのプランが既に確認されていたものである。1号竪穴からは遺物は全くなかった。

第15表 三ヶ尻天王遺跡の土壤計測表

(註: 深さは確認面下, 分類は本文参照)

番号	平面形	長軸×短軸	深さ	長軸方位	備考	分類
1	不整橢円形	3.1 × 1.55m	50cm	N-55°-E	舟底	A 4
2	不整不定円形	1.55 × 1.5	45		舟底	B 3
3	不整円形	1.25 × 1.2	35		一部舟底	B 1-2
4	*	0.85 × 0.75	25			B 2
5	不整不定長方形	2.2 × 0.95	60	N-64°-W	舟底	B 3
6	*	2.35 × 0.95	30	N-3°-W	舟底	B 3
7	長方形	(2.35) × 0.9	12	N-16°-E		A 1-1
8	橢円形	0.8 × 0.55	15	N-54°-W		B 2
9	不整不定長方形	1.25 × 0.65	15	N-25°-W	舟底, 土縫2	B 3
10	長方形	1.1 × 0.7	20	N-20°-E		A 3
11	*	5.25 × 0.6	25	N-30°-E		A 1-1
12	*	1.2 × 0.6	13	N-15°-E		A 3
13	*	4.35 × 0.65	40	N-30°-E	内傾壁, 土師器(長甕)片	A 1-1
14	*	2.75 × 0.9	55	N-13°-E	内傾壁	A 1-1
15	*	1.9 × 0.9	55	N-28°-E	内傾壁, 繩文土器片, 土師器片	A 1-1
16	*	3.85 × 0.7	45	N-30°-E	内傾壁	A 1-1
17	*	3.25 × 0.7	40	N-55°-W	内傾壁, 土師器(長甕)片	A 1-1
18	*	(2.0) × 0.85	45	N-54°-W	土師器(長甕)片	A 1-1
19	*	(3.4) × 0.9	85	N-35°-E		A 1-1
20	不整不定長方形	2.9 × 1.45	15	N-51°-W		A 1-2
21	長方形	3.0 × 0.95	50	N-49°-W		A 1-1
22	不整長方形	2.6 × 1.15	70		倒木痕?	A 4
23	不整不定円形	1.7 × (1.4)	40	N-16°-E	舟底	B 3
24	長方形	1.0 × 0.75	20	N-16°-E	近世土器片	
25	*	5.1 × 0.85	40	N-52°-W		A 3
26	不整長方形	1.3 × 0.75	45	N-40°-E		A 1-1
27	*	2.2 × 1.0	45	N-46°-W		A 3
28	長方形	3.15 × 0.7	55	N-27°-E	内傾壁、近世土器片	A 1-2
29	不整長方形	3.45 × 0.6	50	N-17°-E	内傾壁	A 1-1
30	長方形	3.55 × 0.7	40	N-20°-E	内傾壁、土師器(長甕)片	A 1-1
31	*	2.9 × 0.6	30	N-29°-E		A 1-1
32	不整長方形	1.95 × 0.9	35	N-35°-E		A 1-1
33	*	(1.7) × 0.8	10	N-54°-W		A 1-1
34	*	1.5 × 0.8	60	N-45°-W		A 1-2
35	長方形	1.75 × 0.65	35	N-38°-E	内傾壁	A 1-2
36	円形	0.8 × 0.7	80			A 1-2
37	長方形	2.0 × 0.45	20	N-33°-E		B 2
38	不整長方形	0.7 × 0.45	35		ピット	A 1-2
39	長方形	(3.1) × 0.95	20	N-50°-W	土師器(長甕)片	A 1-1
	円形	1.2 × 1.2	35			
40	円形	1.25 × 1.2	50		土師器(長甕)片	B 1-1
41	長方形	(1.0) × 0.9	110	N-43°-W		B 1-1
42	不整長方形	(8.5) × 0.9	50	N-57°-W	土師器片、複合?	A 1-1
43	長方形	1.15 × 0.85	45	N-20°-E	土師器(長甕)片、須恵器片、木炭片	A 2
44	*	1.5 × 0.65	25	N-19°-E		A 3
45	*	1.25 × 0.7	30	N-31°-W	(小ピット) 土師器(長甕、坏)片、繩文土器片、土鍋片	A 1-1
46	円形	2.0 × 1.6	28			B 1-2

番号	平面形	長軸×短軸	深さ	長軸方位	備考	分類
47	不整円形	1.15×1.0	20		土師器(長甕、坏)片	B 1-2
48	円形	1.45×1.3	35		土師器(甕、坏)片、土錐1	B 1-1
49	不整円形	1.05×0.85	45		土師器(長甕、甕、坏)片、須恵器片	B 3
50	長方形	1.8×0.5	10	N-17°-E	土錐1、埴輪片、縄文土器片	A 1-2
51	不定円形	2.3×1.75	60		倒木底?	B 3
52	円形	1.3×1.3	20		一部舟底	B 1-1
53	長方形	1.8×0.5	10	N-17°-E		A 1-1
54	不整橢円形	1.2×0.7	25			B 3
55	長方形	3.4×0.65	30	N-43°-E	内傾壁	A 1-1
56	"	3.9×0.6	30~50	N-53°-W	一部舟底	A 1-2
57	不整不定長方形	1.2×0.7	35			A 4
58	長方形	2.1×0.65	60	N-45°-W		A 1-1
59	"	(1.75)×0.85	20	N-44°-E	土師器(坏)片	A 1-2
60	不整長方形	4.1×0.7	15	N-69°-E		A 1-2
61	長方形	1.35×0.7	20	N-16°-E		A 3
62	"	1.45×0.55	20	N-16°-E		A 3
63	"	1.2×0.3	10	N-18°-E		A 3
64	"	3.15×?	20	N-8°-E		A 1-1
65	"	?×?	30	N-16°-E		A 1-1
66	不整橢円形	1.05×0.75	20		舟底	B 3
67	不整長方形	2.05×0.9	10	N-18°-E		A 1-2
68	長方形	1.25×0.55	20	N-22°-E		A 3
69	"	1.25×0.55	20	N-22°-E		A 3
70	不整円形	1.2×1.1	20			B 1-1
71	長方形	2.45×0.65	15	N-18°-E		A 1-1
72	円形	1.45×1.35	15			B 1-1
73	長方形	2.95×0.75	40	N-70°-W	縄文土器片	A 1-1
74	"	2.2×0.7	35	N-66°-W		A 1-1
75	"	1.75×0.85	20	N-88°-W		A 1-1
76	不整長方形	1.1×0.9	30	N-15°-E		A 2
77A	長方形	1.2×0.95	20	N-16°-E		A 2
77B	"	4.9×1.0	10	N-74°-W		A 1-1
78	不整長方形	1.5×1.15	25	N-84°-W		A 2
79	"	1.45×1.15	25	N-35°-W		A 2
80	長方形	4.2×0.9	35	N-66°-W		A 1-1
81	(欠)					
82	長方形	2.2×0.6	40	N-32°-E		A 1-1
83	"	1.8×0.8	45	N-30°-E	土師器片	A 1-2
84	"	1.6×0.65	25	N-30°-E	内傾壁	A 1-1
85	"	2.3×1.45	25	N-31°-E		A 2
86	不整円形				倒木底	B 3
87	不整不定長方形	2.7×1.25	45		"?	A 4
88	長方形	2.05×(0.95)	20	N-73°-W		A 1-2
89	"	1.6×0.7	0.2	N-65°-W		A 1-2
90	"	2.1×0.95	35	N-23°-E		A 1-1
91	(欠)					
92	不整長方形	1.75×0.35	10	N-16°-E		A 1-2

V 結 語

古墳について

古墳は6基検出されたが、2号墳で若干の墳丘が残っていた他は、いずれも掘跡のみであった。4号墳では石室がわずかに残り、2号墳はその痕跡らしき石組があった。石室は河原石使用の胴張りプランの横穴式石室（4号墳）で、三ヶ尻林遺跡のものと同類である。出土遺物については、直接件出が確実なものはない。しかしいずれも埴輪を伴なわず、また他の遺構や古墳相互の位置関係および形態からいくつかの特徴を示すことができる。墳形は6号墳が前方後円（帆立貝式？）墳の可能性がある他は円墳である。6号墳は前方部周囲の一部と思われるが発掘範囲が狭いので詳細は不明である、1～5号墳は狭い範囲に異常に密集する。この過密性については、地形的な制約を超えて占地領域の制限がある（註1）という考えは妥当であろう。1と2、3と4号墳は周囲の位置関係から2→1、4→3へ移行する。1号墳の北東側が断続するのは2号墳の存在による。3・4号と1・2号群は前者が整った円形プラン周囲を志向する特徴があり、この意味で隣接する5号墳は3・4号墳と同系列になる。2→1号、4→3号の方向性が時期差を示すとすれば、5号は4→3号以前になろう。2・1号は周囲がかなり不定形であり、1号は「二」の字状になる。周囲の不定形は必ずしも墳丘の不整とは結びつかない。三ヶ尻林4号墳では不定形周囲をもちながら、非常に整った墳丘を構築していた。また同古墳では墳籠と周囲間にかなり広い平坦面が確認され、周囲範囲と墳丘規模に大きな差があることがわかっている。したがって2・1号の周囲から3・4号より大規模、不整の古墳を想定することはできない。周囲よりも墳丘形態重視の傾向である。埴輪をもつ古墳の周囲は概して整ったものが多い（註2）ので、5・4・3号群に後続して2・1号群を位置づけたい。「二の字」形周囲は「=」の字形と関連し、これらの直線的プランについて要検討を提起したことがある（註3）。また方墳との関連を挙げたが（註4）、後者については墳丘と周囲形態を同一視したため方墳としたが、これは若干訂正を要する。方形周囲円形墳の可能性もある。いずれも終末期の古墳に相当するので、対外区画としての円形周囲の意義が変化していることが知られる。ただし一律的に不定形になると限らないようであり（註5）、その時期についても更に地域的特色についても検討を要する。

検出された6古墳の年代については、住居跡との関係が注目される。7号住居跡が2号墳周囲に削られ、2～6号住居跡もその位置からも、2号墳と共に存したことは考えにくい。これらの住居は後述のように鬼高窓後半のもので、また古墳は埴輪が存在しないことも考え（註6）、1・2号は7世紀半ば以降の年代を与えたい。3～5号についてはそれ以前であろうが、7世紀初頭をさか上らない前半代からと考えられよう。

（小久保徹）

註

註1 金子章「遺構と遺物のまとめ—墳丘と周囲—」長沖古墳群 児玉町教育委員会 1980

註2 市川修也「広木大町古墳群」埼玉県遺跡調査会 1980

松村一昭「赤堀村峯岸山の古墳1(1975)・2(1976)、「赤堀村地蔵山の古墳1(1977)・2(1978)」赤

堺村教育委員会 など

- 註3 小久保徹著「古墳について一墳丘と周溝」塙本山古墳群 埼玉県教委員会1977
註4 小久保徹著「鶴ヶ丘遺跡の古墳について」鶴ヶ丘 埼玉県教育委員会
註5 東松山市寺山古墳群などは埴輪をもたないものであるが比較的整った円形周溝が多い。
今泉泰之「寺山」埼玉県教育委員会1976
註6 北武藏の埴輪の消滅については6世紀末～7世紀初頭とする考え方（金井塚良一「吉見百穴横穴墓群の研究」1975、や7世紀中頃には円形墳については無くなるとする考え方（増田逸朗「塙本山古墳群の変遷と意義」塙本山古墳群1977）などがある。

土師器の年代について

三ヶ尻天王跡からは完形土器こそ少ないものの100個体以上の土師器と数個体の須恵器が出土している。本報告においては古墳3基・住居跡6軒・堅穴造構2基およびグリッドから出土した70個体の実測図・観察表と12点の須恵器・瓦拓影図を提示した。

ここでは、これらの土器の編年上の位置を中心に、隣接する三ヶ尻林遺跡の土器も加味して述べたい。

本遺跡出土の土師器はほとんどすべてが鬼高II～III期の範疇でとらえられるものである。器種としては、壺・鉢・高壺・瓶・長胴壺・丸胴壺がある。壺は須恵器にとって替られるためか、2号墳出土の小破片のみである。瓶は完形が1点、破片が3点で、小型のものは1点である。把手付瓶は図示したもの以外にも破片があり、当地の該期の集落ではかなり普遍的に出土するようである。壺と壺の出土量は他の器種を大きく上回り、編年の基準となるので、詳細に述べておこう。

壺には口縁部が外傾するものと内傾するものがある。外傾する一群には、口径12cmを境に9～11cmの小振りのもの（A類）と13.5～15cmの大振りのもの（B類）がある。内傾するものは口径13cm弱、器高3.5cm～4cmほどのものが目立つ（C類）。B類は、口縁部に明瞭な段が二段ある鬼高II期前半の壺と比較すると、体部・底部の扁平化傾向があり、口縁部の段もまた、段の部分が沈線に置換されているものもある。A類は、口唇部をつまみ上げられ、内面に沈線をもつものが多い。底部も丸い作りで、前代の大振りの壺がそのまま小型化したような器形である。C類は、個体数が少なく、バリエーションのすべてを拾うことができないが、前代に比べて、口縁部は短小化し、一まわり小さな器形に変わっているようである。

口径の小さな壺形土器のまとまって出土した造構として近傍のものは、新ヶ谷戸遺跡3号住居跡（註1）例がある。口径の推定できる壺は6点あり、12cm以下になるものがそのうち4点で、口径10.9cmのものを最小とする。本遺跡例より口縁部の段の作りがあまく、口唇部内面に沈線をもつものも少ない。『新ヶ谷戸』においてはこの住居跡を7世紀後半～8世紀初頭の年代に位置づけておいた。このような小口径の壺の出現は須恵器蓋壺の口径の縮小（註2）と関連性をもつと思われる所以、須恵器の編年観の現況（註3）を考慮すれば、7世紀第2四半期に実年代の一点を求めるであろう。本遺跡においては口径の小さな壺A類は1～3号墳、2号住居跡、4号堅穴から出土し、直立する口縁部と体部との境にゆるい稜をもつ小振りの壺が三ヶ尻林遺跡1号堅穴から、平瓶と共に出土している。この平瓶は、口縁部を欠失するが、肩部の張る胸部形態から見て、7世紀前半に出現するものである。それ故に壺A類と三ヶ尻林遺跡1号堅穴の小振りの壺はそれぞれ

7世紀初頭から7世紀中葉前後に位置づけられ、前者から後者に器形の主体が移り変わると考えられる。坏B類は鬼高II期後半にあたり、坏A類に先行する器形を示すので、6世紀第4四半期を中心とする年代を与えることができよう。

璇形土器は長胴甕と丸甕があるが、真間期特有の、肩が張り、胴部下半に屈曲部をもつものは少ない。長胴甕は胴部中位の最大径と口径のはば等しいもの（A類）、口縁部が寝て、口径部最大径になるもの（B類）、口縁部が短かく、すぐ胴部につながるもの（C類）がある。A類は口縁部がやや長く、外反度の弱いもので、器高が40cm弱程になる三ヶ尻天王2号墳の出土品のような例もある。B類は本遺跡の主体を占めるが、口唇部外側に面をもったり、沈線を一周させたりして、入念に作られるものもある。C類は胴部に最大径のある小型品（6号住居跡例）と口径の大きなもの（1号住居跡例）とがある。A類とB類の間には時間差を見い出せそうであるが、セット関係の比較的良好な1・6号住居跡では共伴している。ただし、B類はどちらの住居跡においても少数なので、B類の型式化の進行が顯著な時期を7世紀初頭以降と考えてよければ、1・6号住居跡とともに6世紀末葉の年代を与えられる。丸甕は、倒卵形あるいは扁球形の胴部を呈し、肩部の張る形態のものはない。口縁部の作りは例外なく厚手で長いのが特徴である。口縁部が直立し、口唇部は外反してとがり氣味に作られるもの（A類）、口縁部は外傾して立ち、口唇部は外反して寝るもの（B類）、口縁部は頸部からゆるく外反するもの（C類）がある。胴部上端にヨコヘラケズリ、中位以下はナメあるいはタテのヘラケズリが重複を伴って施されるのはB・C類に共通する。三ヶ尻林3号墳出土のA類の甕にはタテヘラケズリの後ナデが施される。胴部の張り方や口縁部形態から見て、本遺跡の丸甕の中では最も古い。三ヶ尻天王6号住居跡出土のB類の甕は口縁部が極端に長く、胴部上端のヨコヘラケズリも顯著でない。これらは鬼高I式特有の長胴化の未熟な甕の伝統を直に受け継いでいるように思われる。C類は本遺跡の主体で、口縁部・口唇部の調整手法にはバリエーションが多い。A類の上限は6世紀第3四半期まで上がりそうなので、B・C類は6世紀末～7世紀初頭に繼起的に出現する可能性がある。

高坏は少数ながら散見される。口縁部形態のわかるものは一点だけだが、坏形土器の形態に近い作りで、脚部も太い。共伴する坏・甕の形態から考える限り、6世紀末葉まで残るを見たい。

鉢が数点出土しているが、頸部で「く」の字に屈曲し、丸胴を呈するもので、小型甕と呼んでもよいものである。厚手で、タテ・ナメヘラケズリのみによって調整される三ヶ尻林7号墳例が古く、やや薄手で、口唇部がとがり氣味に作られる三ヶ尻林1号墳・1号堅穴の例が新しい。前者が6世紀末葉、後者が7世紀初頭と考えられる。

以上、坏と甕を中心に考えたが、三ヶ尻天王1・6号住居跡を中心とした6世紀第4四半期、三ヶ尻天王4号住居跡・4号堅穴を中心とする7世紀第1四半期、林1号堅穴を中心とした7世紀第2四半期の3期を考えることができ、三ヶ尻林3号墳の甕A類など数点は6世紀第3四半期に上がる可能性を持っていることを明らかにすることことができた。

最後に、年代論や型式論のパックボーンとして、いかなる視野に繋いでいくべきか述べておきたい。

『新ヶ谷戸』においては、児玉地方と熊谷周辺地域の鬼高式土器の変遷がやや異なり、児玉が革

新性をもつことを主張しておいた。鬼高式土器の様相が小地域で異なることは、既に諸先史学の指摘するところでもあった。四半世紀あるいはそれ以下を争う編年觀を組み立てる現状では、地域を広くとって見ていくと、同じ器種でも異系統と考えられるものまで含んでしまう可能性が強い。土師器の定型化が顕著で、用途も明確になりつつある鬼高峰期以降は、同一の器種の中で、成形技法・調整手法の明確に異なるもの、微妙に違うものが幾種も指摘できる。すなわち、系統発生を繰り返しつつ、淘汰された新たな器形を産み出すのである。

したがって、土器の変遷がほぼ共通する領域（註4）を正しく設定し、そこに集落遺跡間の関係性を新たに論及する必要があることは言うまでもない。ここから、土器の変化の背景にある技術革新の本質、すなわち、生産関係の一部としての社会的分業およびそれを支える経済的社会構成体（喚言すれば、その現象形態である集落遺跡や墳墓まで含む遺跡群総体の把握から析出される人間社会の集団関係）の様相を探ることが考古学者に課せられた命題の一つだといえるであろう。

（利根川章彦）

註

- 註1 利根川章彦 1982『新ヶ谷戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第9集
- 註2 陶邑古墳群では、第II型式第6段階に蓋坏の縮少現象が顕著である。
- 註3 中村浩 1981『和泉陶邑窯の研究』等を参照。
- 註4 西弘海 1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』奈良国立文化財研究所
白石太一郎 1982『畿内における古墳の終末』（『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集）
註4 土器群の共通性を律令体制下の「国」や「郡」の単位をもって議論する傾向が強いが、国郡制はあくまでも日本律令国家の領域支配のための地域的再編成の所産であって、そっくりそのまま弥生時代や古墳時代の土器の分布層にあてはまるではない。むしろ、そうした事象にかかる「国境（クニザカイ）」と実際の土器分布層の矛盾（たとえば、各小地域ごとの土器の変化の連続や交替の様相における急進性など）を分析する方がよほど有益だと思う。

鉄製品・ガラス玉について

三ヶ尻天王遺跡からは3点の鉄器と1点のガラス玉が出土した。鉄鎌は5号墳、刀子は1号住居跡床面、鋤先是5号住居跡床面からの出土である。鉄鎌はかえしの一端を欠くが重量40gを超える大形品である。先端部は凸レンズ状を呈しやや扁平となる。茎は細く断面が円形を呈している。茎の末端には縦維痕のようなものが残っている。矢柄の痕跡なのだろうか。大形品であるために対象物に対する衝撃力も大きかったであろうが、飛び道具としては大きすぎる感がある。あるいは柄先のような用途に用いられたのかもしれない。大きなかえしの存在はそれを裏付ける可能性がある。外形は後に述べる三ヶ尻林遺跡の古墳出土のものとは全く異なる。削半されていた5号墳覆土中のものである点や、他の遺物の存在から推してより新しい時期、例えば中世前後のものと考えられなくもない。1号住居跡出土の刀子は柄部の末端を欠いている。片闇式と思われるが闇は弱い。刀子のみの型式で年代を決定することはなかなか困難であるが、住居跡出土土器から鬼高峰期の後半と思われる。5号住居跡出土の鋤（鎌）先是比較的小形である。外形はU字形を呈しているが、刃先に向って両側縁の肩がやや張り出している。素材の鉄は厚く頑丈な観がある。着装部は反対に造り出されている。住居跡床面から鋤（鎌）先が出土した例としては毛呂山町伴六遺跡19号住居跡例などがある

が、同遺跡は9～10世紀前半と言われており、当遺跡よりも新期となる。農耕具としての鉄器がいつの頃から各住居単位に所有されていたのか興味深いが、さらに類例の追加を待って再検討することにしたい。5号住居跡の年代は前述した土器から鬼高峰期の後半と考えられており、鋤(鉢)先もやはり同時期の所有と考えられる。39Cグリッド出土のガラス玉は単独出土例である。その出土位置からすると4号墳中のものであった可能性が高い。同古墳は石室のみがわずかに残って他は削平されている。副葬品もまたその時に周囲に四散したものなのであろう。

(田中英司)

VI 三ヶ尻林(1) 遺跡の概観

調査対象地は長さが800m、幅20~30mで長大な地域である。西から便宜的にA~D区とし、新幹線建設関連の送電鉄塔敷地内をE区とした(第41図)。A・B区間の工場内はほとんどが砂利層に達するまで削平されており、わずかに残る西側部分については、地下が掘削される橋脚部内の試掘で遺構の有無を確認した。

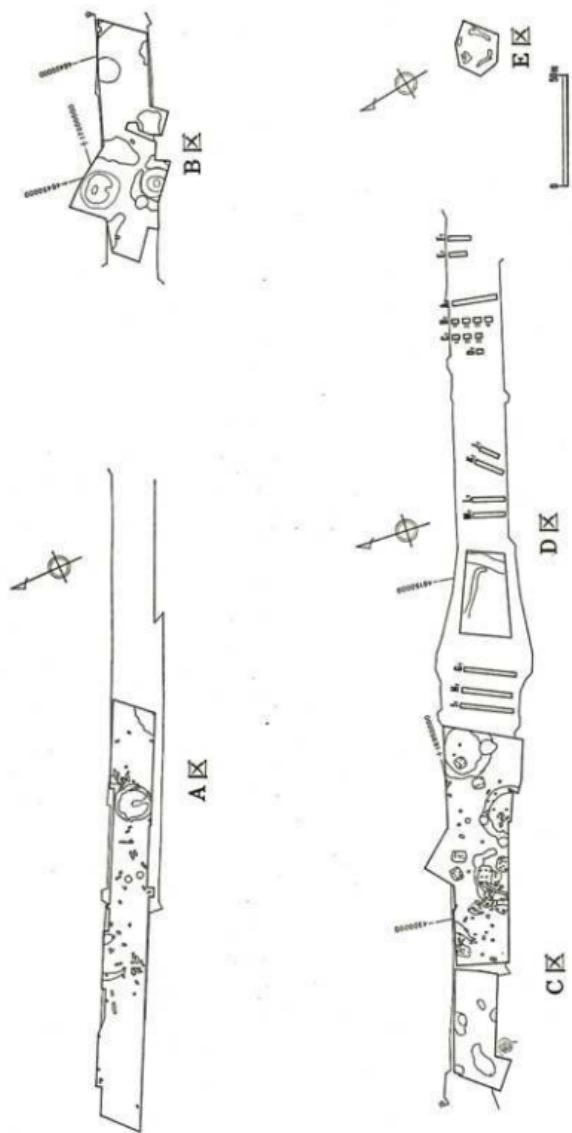
A区は3400m²を調査し、古墳跡3、土壙62、堅穴状造構1を検出した。全体的にはほぼ平坦な地形で地表下50~70cmで黄褐色ローム土になるが、東側では小砂利を含む層になっている。造構検出は容易であった。古墳は1号墳のみ石室が残っていた。河原石使用の胴張り玄室をもつ横穴式石室で、葬道および前部に達するまでの全体プランが確かめられた。周堀も円形全体がわかり、ほぼ整ったプランである。石室内から耳環、石室入口付近の堀内で土師器甕形土器(鬼高期後半)が出土した。2号墳は南側が開く周堀をもつ。石室は全く残っておらずその痕跡もなかった。遺物は非常に少ないが埴輪片、須恵器片、土師器片があった。3号墳は大形古墳のものと思われる堀の一部が検出された。幅・深さとともに調査例中最大で、覆土中から埴輪片、底面に土師器完形甕形土器が出土している。土壙は長方形プランで平底、内傾壁をもつ整ったものが典型であるがその規模、特に長さの差が大きい。直接伴う状況の遺物は検出されず、遺物がないのが特色の一つである。堅穴造構は須恵器、土師器(鬼高後半)が出土しているが、新しい茶碗片や覆土や平面プラン状況で定型化した造構とは考えられないものである。

B区は約3000m²調査した。古墳6(古墳跡4)土壙2が検出された。古墳は墳丘、石室が調査されたのは4・5号墳で、特に4号墳は、段築成で葺石帶が2重に巡り、中段平坦部に埴輪列を一周させるほぼ当時の現況に近い姿を検出することができた。石室も上半部が破壊されていたが、河原石使用の横穴式石室がよく残っていた。石室内から直刀、鐵鎌、刀子、耳環、玉類(ガラス玉、土玉、水晶切子玉等)、銅鏡、人骨、齒等が検出された。外部遺物は埴輪(円筒・人物・獸・家・馬等)、須恵器(甕・高杯・短頭壺)が発見された。5号墳も河原石使用の横穴式石室と碧玉管玉等が検出された。他の4古墳はいずれも堀跡のみでかなり変則的な形態である。いくつかは同一古墳になる可能性もある。7号墳からは埴輪が出土している。

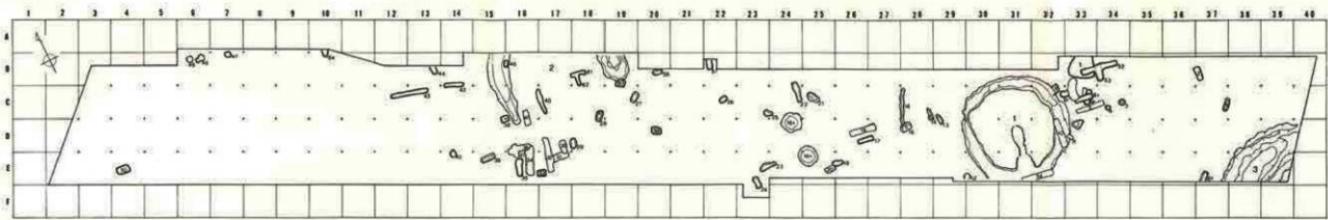
C区は3840m²調査し、古墳6(古墳跡5)、箱式石棺1、縄文前期(黒浜・諸磯期)住居跡に土壙59(縄文期23)、溝2(近世以降)が検出された。古墳は河原石使用の横穴式石室1が確認されたのみで他は堀跡のみである。3ヶ所で埴輪片が出土した他、堀の一部に極端に深い部分をもつものがあった。箱式石棺は河原石を並べた狭長なもので墳丘が不明のものである。土壙は縄文時代のもの以外は時期不明である。長方形プランと円形プランのものがあった。なお全体の出土遺物の一部にフイゴ羽口や鉄カスがあった(縄文時代關係は本報告から除外してある)。

D区は主としてトレンチ方式の調査であった。実際の調査は1000m²で、溝2本を検出した。溝中遺物に土師器があり、平安時代には既に機能していたと思われる。

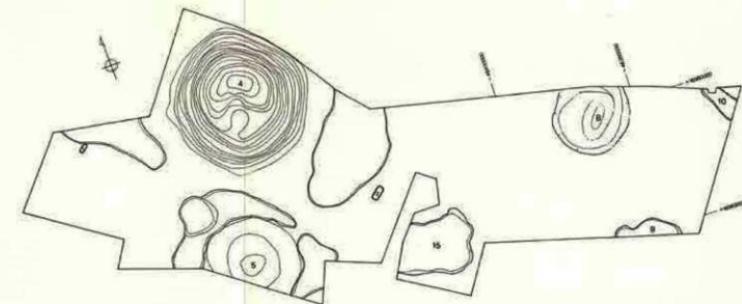
E区は送電鉄塔敷地の確認調査でみつかったもので280m²調査し、古墳跡を検出した。



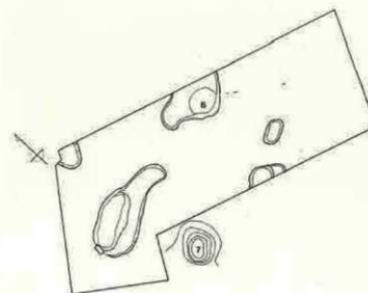
第41図 三ヶ尻林遺跡発掘区全体図



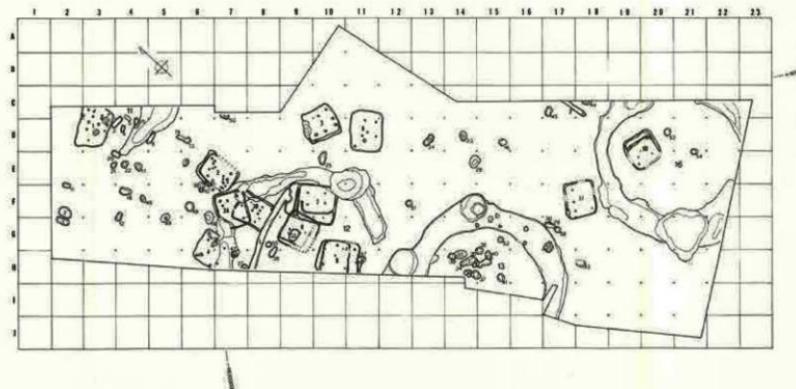
A 区



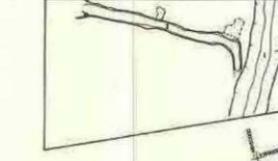
B 区



C 区



D 区



E 区

1m

VII 三ヶ尻林(1) 遺跡の遺構と出土遺物

1. 古墳と出土遺物

三ヶ尻林遺跡1号墳（第43・44図）

墳丘は全く削平され、堀跡と石室下部が検出された。周堀は径16.2m（外径）、幅1.4~2.6mの整ったプランに属する。平底ないし舟底で特に北側がやや深く、整った掘り方をしている。外側の切り込みは明瞭であるが、内側プランがやや不明確な部分もあった。長方形土壙に切られている。

石室は河原石使用の胴張プランをもつ横穴式石室で全長4.14m、玄室長2.53m、同奥壁幅0.5m同最大幅1.45m、同前幅（入口部寄）0.79m、後道長1.61m、同幅0.7mである。主軸方向はN-7°-Eである。奥壁は大形礫が置かれていたものと思われる。側壁は扁平気味の縦長礫を小口積みにしたもので床面レベル面では特に面をそろえて並べている。床面下は10~15cmまで側壁が認められたが、この石積は側壁の基礎積みでやや小形の礫を雜に2~3段積んでいた。玄室入口の両側は同形同大の断面三角形の大形自然礫を逆に埋め込んでいた。礫のくぼみをうまくそろえており、板状の片岩系礫を玄門柱状に置いたものと思われる。

後道入口は大きな枕状の礫を据えている。右側は同形・同大の礫が2次移動した位置でみつかった。床面は玄室・後道とも同じであるが玄室より後道側が大形礫を敷きつめている。両者ともに上面をそろえていた。玄門・後門ともに大形礫を並べて区画している。床面下は10~20cmの厚さで礫がつまり、最下底には側壁基礎積と同大の礫が粗雑に敷かれていたが床面の重複を示す状況はなかった。なお敷設礫は床面上礫より大形である。

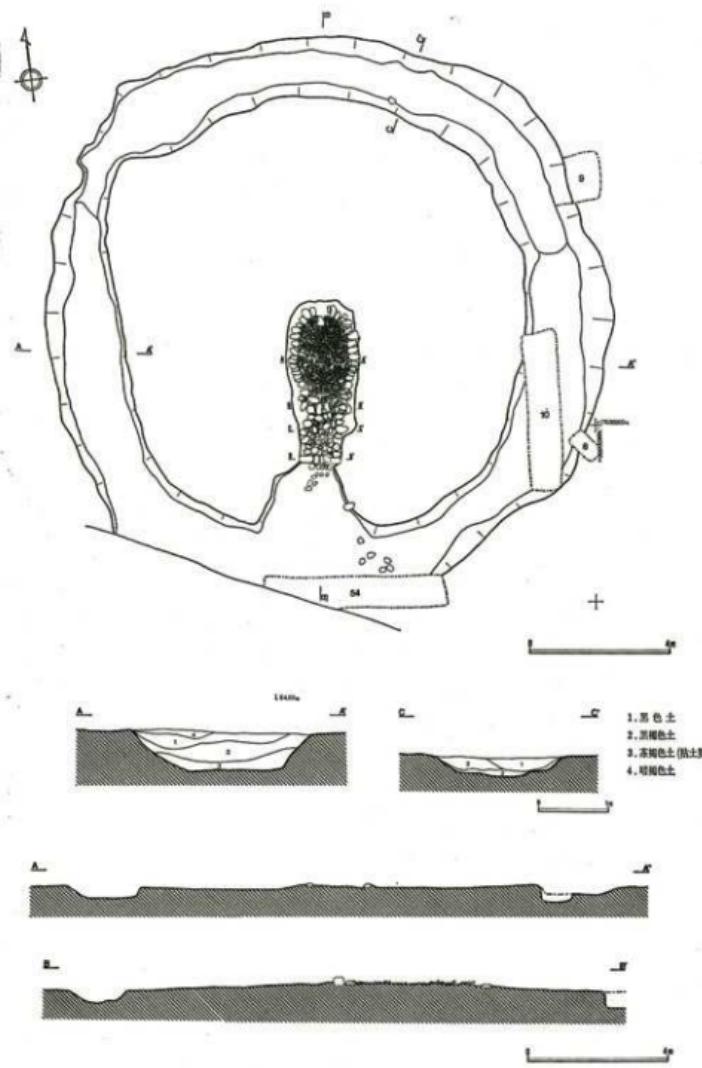
石室は旧地表面を軽くならし、更に石室部分をやや掘り下げて石を積んでいる。石室後ごめ状況は不明であり、確認面では後ごめを特に施設した様子はなかった。

遺物は石室内で耳環2・前庭部及びその付近で底より10~20cm浮いて甕形土器が出土している。覆土中からは埴輪細片、須恵器窓片が検出された。

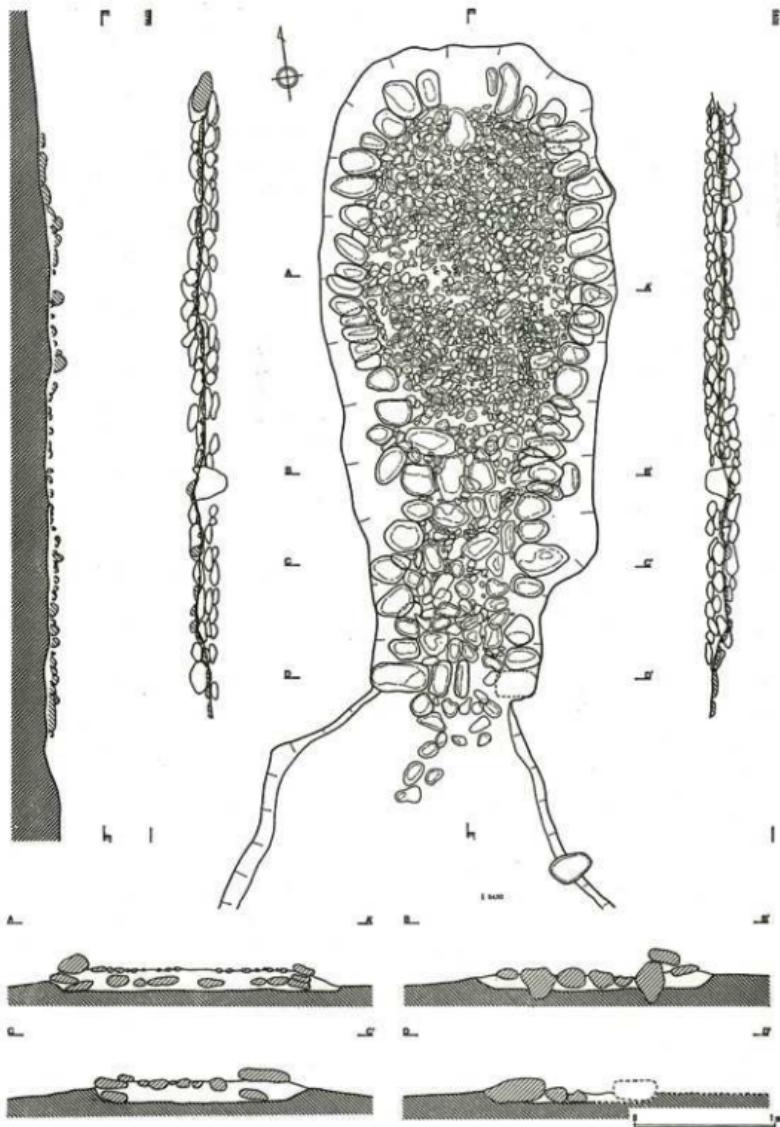
三ヶ尻林遺跡2号墳（第45図）

墳丘、石室ともに削平され推定径20mに達する周堀のみが検出された。南側に開口部をもつ馬蹄形プランになると思われる。西側堀はカーブがよく残っており、整ったプランを示す丁寧な掘り方をしている。幅は3.1mで南側に向かって細く、浅くなっている。底面は舟底形で、内外の壁ともに同じように傾斜をもっている。南端がやや外側に開いたようなプランになっていた。未調査区との境界に倒木痕擾乱がある。また長方形土壙に一部切断されていた。内壁側でかなり浮いた位置で礫が検出された。東堀はかなり深く、砂利層まで達しており、壁面もおうとつがある粗雑な掘り方をしている。

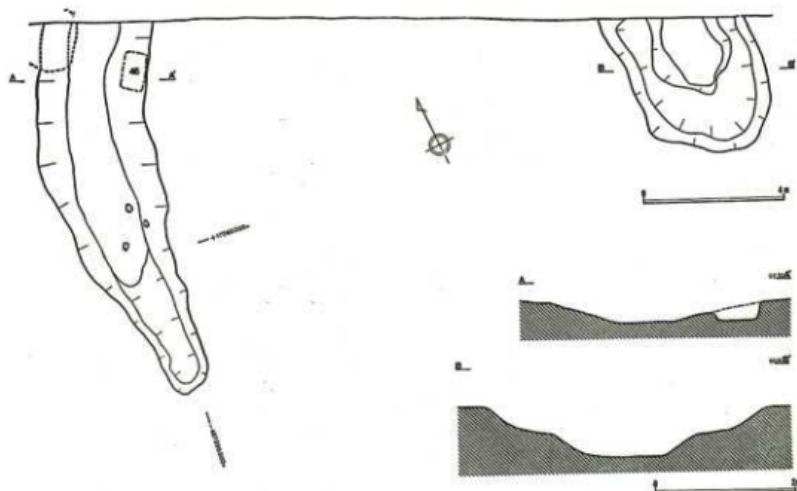
遺物は覆土中から埴輪片、須恵器片（甕）土師器片のいずれも細片が検出された。



第43図 三ヶ尻林遺跡 1号墳全体図および断面図



第44図 三ヶ尻林造跡 1号填石室および断面図

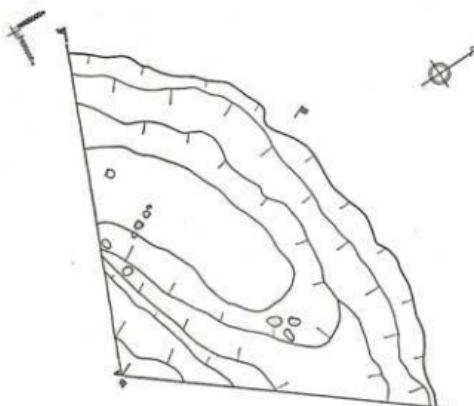


第45図 三ヶ尻林遺跡2号墳全体図および断面図

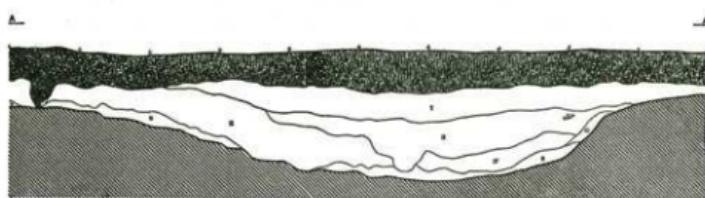
三ヶ尻林遺跡3号墳（第46図）

調査可能な部分は非常に限られていたが、大規模な堀跡を検出した。幅7.8m、深さは現地表下1.85mである。円墳か否かは現状では断定できないが円形プランになるのは確実である。底面は小砂利層まで達して平底になる。外側壁はかなり急傾斜できれいに整った掘り方をしているが、内側壁は緩やかで、やや粗雑である。また地山層のカット面が不明瞭で、覆土もロームブロックを多く含んでいたり、褐色土系統の土が多い。なお底面は北東側がやや浅くなっていた。

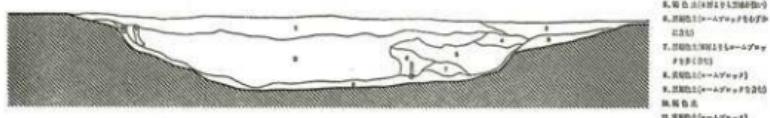
遺物は埴輪片（円筒・形象埴輪の細片）がほぼ一定のレベル（黒色土中で底面上1.2m程度）内ではとんどの量が検出されたが少量である。その他では土師器甕の完形品が底面に横転していた。また外側壁の覆土中でも土師器甕が出土している。



— 10 —



— 11 —



- 1. 茶色土層(樹木生長)
- 2. 茶色土層(樹木生長)
- 3. 黄褐色土
- 4. 黄褐色土層(樹木生長)
- 5. 黄褐色土
- 6. 黄褐色土層(樹木生長)
- 7. 黄褐色土層(樹木生長)
- 8. 黄褐色土層(樹木生長)
- 9. 黄褐色土層(樹木生長)
- 10. 黄褐色土
- 11. 黄褐色土層(樹木生長)

— 12 —

第46図 三ヶ房遺跡 3号墳全体図および断面図

埴輪凡例（第47図）

1. 本遺跡出土の埴輪は、円筒埴輪と形象埴輪に大別される。更に円筒埴輪は普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪に区分され、形象埴輪は人物埴輪・動物埴輪・家形埴輪・器財埴輪に区分される。
2. 円筒埴輪の観察記録は、数値として示されるものは表化し、他の観察項目、及び形象埴輪については別記とした。
3. 胎土観察は胎土自体のきめ・含有される砂粒の大きさ・その量に着目した。石質等の理化学的分析は行っていない。
4. 焼成観察は焼きしまり具合（硬軟）、及び器表や割れ口の磨耗程度に着目し、その良否を比較的に判断した。但し、出土に至るまでの各埴輪が置かれた状況は異なり、本来的には、そこからくる変質も考慮しなければならないだろう。
5. 色調観察には「新版標準土色帖」を用い、器表外面の平均的部位で照らし合わせた。
6. 4号墳出土の埴輪実測図の番号中、1～は円筒埴輪、101～は形象埴輪である。尚、番号下にある（ ）内数字は出土位置図中のそれに一致する。また、出土位置番号の重複するものがあるが、これは発掘調査の際に同位置に出土したものを一括収納したため、同一個体であるとは限らない。

円筒埴輪

1. 円筒埴輪各部位の呼称は凡例図（47図）に示した。
2. 器体観察は①外形寸法（器高・器径・器厚）②円孔規模③刷毛目本数④突帯規模を各個体別に表中に記し、胎土・焼成・色調・器面調整・円孔の位置と形状・突帯の位置と形状については概括する形で記述した。
3. 数値の単位はすべてcmである。
4. 器高は最大値を示し、残存高の場合は（ ）を付した。
5. 器径は口径の場合は口、底径の場合は底として数値の前に記し、復元径の場合は（ ）を付した。
6. 器厚は各突帯間の平均的部位を計測し、表中には上位置から順に記した。
7. 円孔はタテ×ヨコの大きさを示し、復元径の場合は（ ）を付した。
8. 刷毛目は器表外面の平均的調整部位において2cm幅に施された本数を記した。
9. 突帯の計測は最大突出部断面高／平均突帯貼付幅とし、2本以上の場合は両者とも記した。
10. 底部拓影図の番号は遺物図版のものと一致するが、その前に古墳番号を付した。



第47図 円筒埴輪凡例 (呼称)

例 4-1 (4号墳の1に該当)

16-1 (16号墳の1に該当)

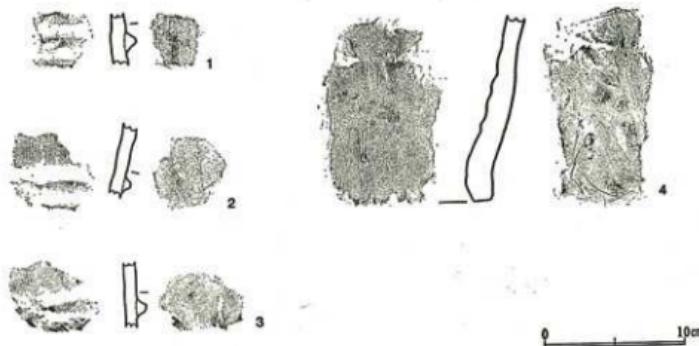
形象埴輪

1. 各部位呼称については『日本陶磁全集』3「土偶・埴輪」を参考にした。

2. 形象埴輪はできるだけ復元、実測図示したがその困難なものについては、写真図版とした。

註

(1) 農林省農林水産技術会議事務所監修 再版例言1970



第48図 三ヶ尻林遺跡3号墳出土埴輪

三ヶ尻林遺跡3号墳出土埴輪（第48図）

胎土

1・3は細かい砂粒を多量に含む他、やや目の粗い（3～5mm）小石がよく見られる。2もよく似るが、小石はほとんど含まれない。4はややきめが粗く、砂粒も大きくて器表はザラつく。また黒色の雲母粒を多く含む。

焼成

1～3はその磨耗度も高く軟質的な印象である。これに反し4はかなりよく焼きしまっており、器表には細かいひびが散る。

色調

1～3は明赤褐色を呈し、4はより明橙色。

器面調整

1～4ともに外面は縦方向の刷毛、内面は1～3が斜方向の布（磨耗のため不明瞭）撫でとなっている。4の内面は斜方向の刷毛であるが、上位には布撫でが見られる。

突帯の位置と形状

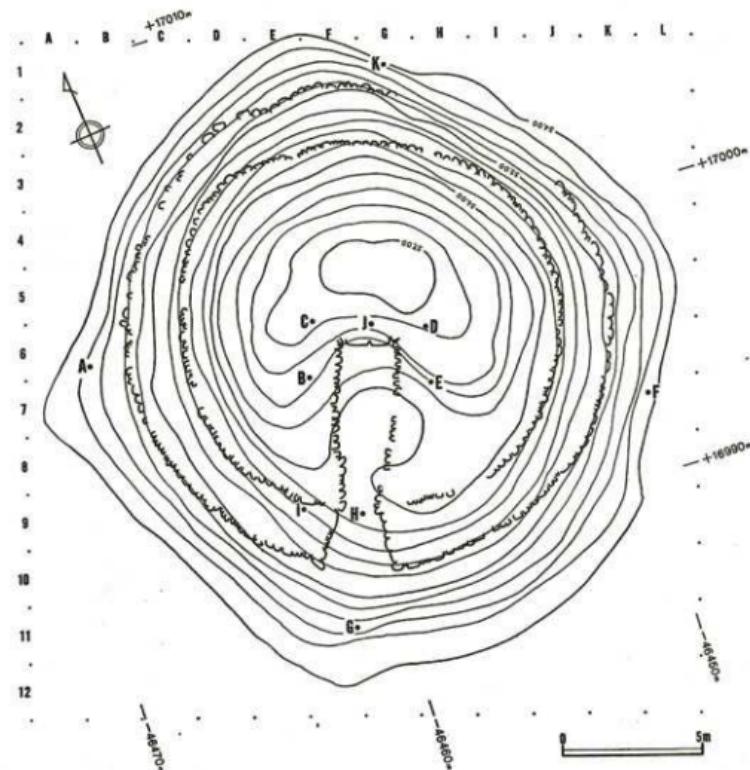
1～3ともにその位置は不明であるが、時計回りの撫でが施され断面三角形。1はかなり鋭角。

第16表 三ヶ尻林遺跡3号墳出土埴輪観察表（第48図）

図版番号	器種	出土位置	器高	器厚	器径	円孔	刷毛	突帯	備考
第48図 1	円筒	周堀	(3.7)	1.0			12本／2cm	1.0／1.5	
2	円筒	周堀	(5.3)	0.9			12本／2cm	0.5／1.1	
3	円筒	周堀	(4.5)	0.8			12本／2cm	0.7／1.3	
4	円筒	周堀	(13.0)	1.8			12本／2cm		

三ヶ尻林遺跡4号墳（第49～54図）

墳丘の現状は直径23m、高さ3mで、南側が大きくくぼみ盗掘跡が明瞭であった。任意に2m方格のグリッドを設定し西→東へアルファベット、北→南へ算用数字を付し、1A、1Bグリッドの如く名称をつけ発掘区とした。



第49図 三ヶ尻林遺跡4号墳グリッド図

表土を除去すると当初の形に近い古墳が明らかになった。下部葺石帶は外側直径17.2mで整った円形プランを示すが、西側はやや外側にはみ出す格好になる。これは2次移動と考えられるが、その差は極くわずかであった。下部葺石帶の高さは現状では75~80cmである。この差については上面の葺石が一部崩落していること、葺石帶根石そのものがレベルを異にしていることによる。葺石疊はすべて河原石であるが、その根石はやや大形疊を長辺を外側に向けるようにしてきれいに並べてある。根石列の上をやや小形の河原石で葺いているが、これは盛土斜面に対して直角方向に疊を埋め込んでおり、石室石積みとは全く異った方法である。

上部葺石帶は直径13.1~13.5mでやや歪んだ円形プランをもつ。特に北側に著しく張り出した部分があるが、2次移動である。高さは現状で75~90cmになり、下部葺石帶より残存状況は良い。その作りは下部葺石帶と全く同じである。

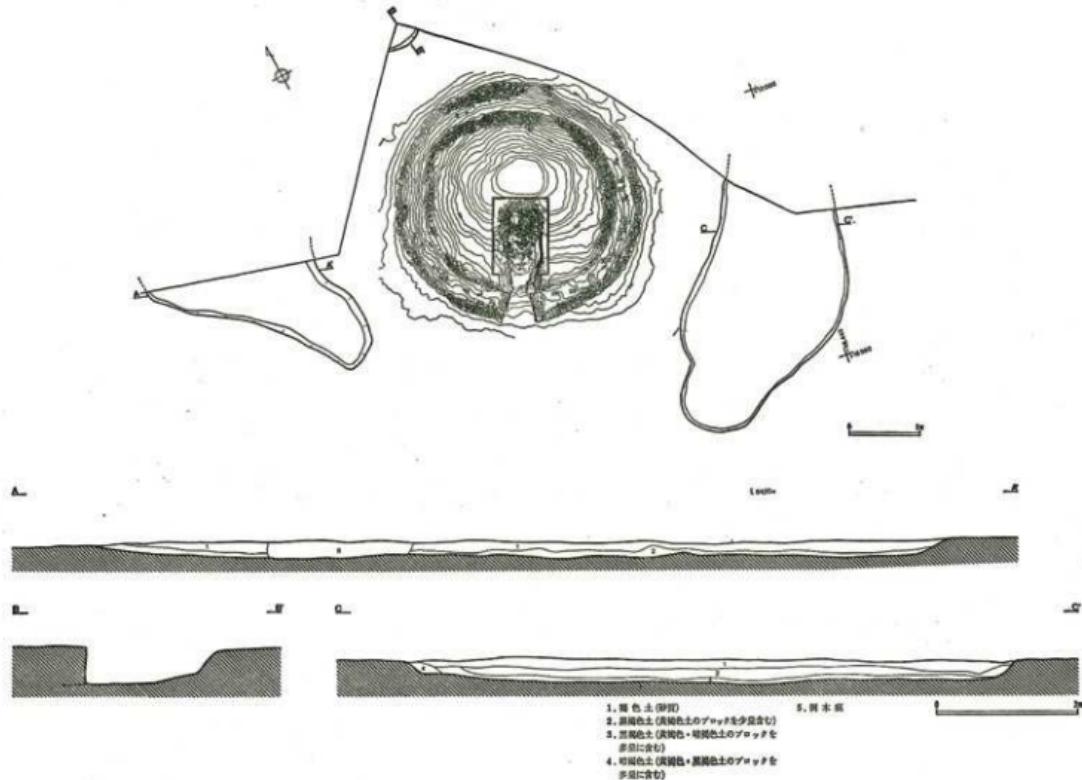
中段は下部葺石帶と上部葺石帶の中間にある平坦面で埴輪列をもつ、幅は現状で1~1.5mあるが実際は下部葺石帶上面の崩落があるので、最狭の1m前後が原形に近い幅であろう。外側に向かって傾斜しているがこれは崩落流出が十分考えられる。

中段に埴輪列が巡る。全部で29ヶ所の地点を確認した。№2・5~№16は原位置をやや移動している可能性があるが、その他のものは出土状況からほぼ原位置と認められる。すべて外側に倒れているが、かなり正立状況を保っているものもあった(№1、3、22、24、25、28、29等)。上部葺石帶基から50cm離れた位置に多いので、中段のほぼ中央に立てられたものと思われる。正立状況の埴輪は№27・28のように確認面下12cmまで埋め込まれている。埴輪は形象埴輪の基部(№7、8、15、20、24)、馬形埴輪(№10、11、14、27)、人物埴輪基部(№4、21)、大刀形埴輪(№3)、その他はすべて円筒埴輪であった。ただし、№21、27は人物埴輪が混入していた。形象埴輪の基部は人物・駆等の基部と考えられる。埴輪間の距離は必ずしも一定していないが、全体総数は60~70本と考えられる。その分布は残っているものから判断すると、いくつかのブロックに形象埴輪が立てられている。なお孔の方向は観察できたものによると、外側に向いているものが多い。又№11と23は内部に長さ20cm、幅10cm程の疊が入っていた。№1付近に須恵器提瓶(完形)が出土しているが、人為的に破壊されて置かれたものであり。破片が上下逆転して出土した。

上部葺石帶の上段は更に1m盛土されているが当時の墳丘は更に高くなるものと考えられる。東・西の等高線観察によると、やや直線的な部分があるので、墳頂平坦面が考えられる。石室内覆土中からの遺物(須恵器大甕片、埴輪片)のいくつかは上段にあった可能性が強い。須恵器大甕片については石室入口部の覆土中や、石室に近いグリッド中で検出されているので、これらも墳丘上段の主体部寄りに置かれていたものと思われる。

石室は天井及び側壁部上面を破壊され、右側壁はほとんど無い、ただし床面は疊分布状況から2次擾乱を受けていないことがわかった。石室中軸方位はN-25°30'-E(磁北)である。なお上・下葺石帶の描く円形の中心は石室中軸線上の奥壁より約65cm中央に寄った位置にある。石室規模は全長5.85m、玄室長4.05m、玄室奥壁幅1.75m、中央最大幅1.95m、玄室前幅(玄門部側)1.58m、玄室門幅1.11m、羨道長1.80m、羨道幅1.10m、羨道入口幅1.00mの規模をもつ。なお羨道入口の前面に台形プランの前庭部が続いている。なお石室規模は側壁根石の平面プランである。

第50図 三ヶ尻林道跡4号墳全体図および断面図



玄室は中央がわずかに膨らむ胴張り長方形プランである。奥壁は根石に特に大形の礫を使用し、床面下にその $\frac{1}{2}$ が埋まっている。左方の石は絹雲母片岩でかなり脆くなってしまっており、しかも2次移動している。奥壁使用の礫は根石以上のものについては平坦面を広くもつ礫を選び、それらの面をそろえて、非常に丁寧に作り上げている。

側壁は上面が破壊されているが、大形の根石を丁寧に並べ、その上に礫を積み上げている。この根石は側壁基底部に相当し、ほとんど床面下に隠れてしまうが、石室の基本プランを示すものである。（石室平面プランはこの根石プランを示す）側壁はやや内傾している。玄室入口は石積みがやや異なっており。側壁の一部をややせり出して積み上げ玄門としている。典型的なものでは無いが、特に大形礫を並べており、構築工程の区切りとなっているので玄門施設の一部としてよい。玄門部下は礫を縦に並べて（2段）しっかりと固定しており框石としている。

床面は長さ10~15cm、厚さ3cm程度の扁平礫を選んで敷き並べ、更に小礫を敷いていた。小礫は扁平礫が覆われる程度である。図示したものはやや小礫が除去されている。

義務道は玄室より積み方が粗雑である。床面も砂利敷であった。崩落の後ごめ砂利と類似していたためやや削平したが、玄門の框石や側壁根石レベルから、玄室床より20cm高い砂利敷床であることがわかった。義務道入口部はやや高くなっている傾斜床と考えられる。義務門部は非常に堅牢で整美された施設にしている。長さ80cm、幅30~40cm、厚さ30~40cmの大形礫を積み上げている。

義務門部下底に封鎖石を置いている。大形礫を縦にそろえて積み上げていた。玄室の框石とは異なり、床面に据えつけられた状況では無い。

前庭部は石室入口（義務門）に取付く施設である。前面幅2.5m、正面幅1.5m、奥行2.0mの台形プランである。床面は褐色土ブロックが混り石室に近い部分は通例の住居跡の床状であった。義務門に向かって上り斜面になる。両側は墳丘の葺石帯と全く同じ状況である。両側壁断面は逆台形で上方に広がり、その上面は墳丘中段の平坦面に一致する。側壁前端は下部葺石帯に連なるが、ここでは特に大形礫を積み上げるが2次移動を受け両側とも歪んだ状況になっていた。側壁根石は床の傾斜に沿ってレベルダウンしている。左壁には特大の緑泥片岩石を設置する。なお上面はやや崩落、2次移動がある。右側壁端部の床面に須恵器高杯（無蓋）1個と短頸壺1個及び提瓶破片が出土した。提瓶は中段出土のものと同一個体である。高杯と短頸壺は故意に割って置かれたもので、高杯の杯部を短頸壺破片で包み込むようにして置いたものである。いずれも破片は大きいので1~2回程度の衝撃を加えたものと考えられる。提瓶破片は高杯・短頸壺と隣接し、レベルも同じなので、一括して置かれたものと思われる。したがって提瓶、高杯・短頸壺を同時に割り、提瓶は中段に、高杯と短頸壺及び混入した提瓶片を前庭右側壁下端部に置いたと考えられる。

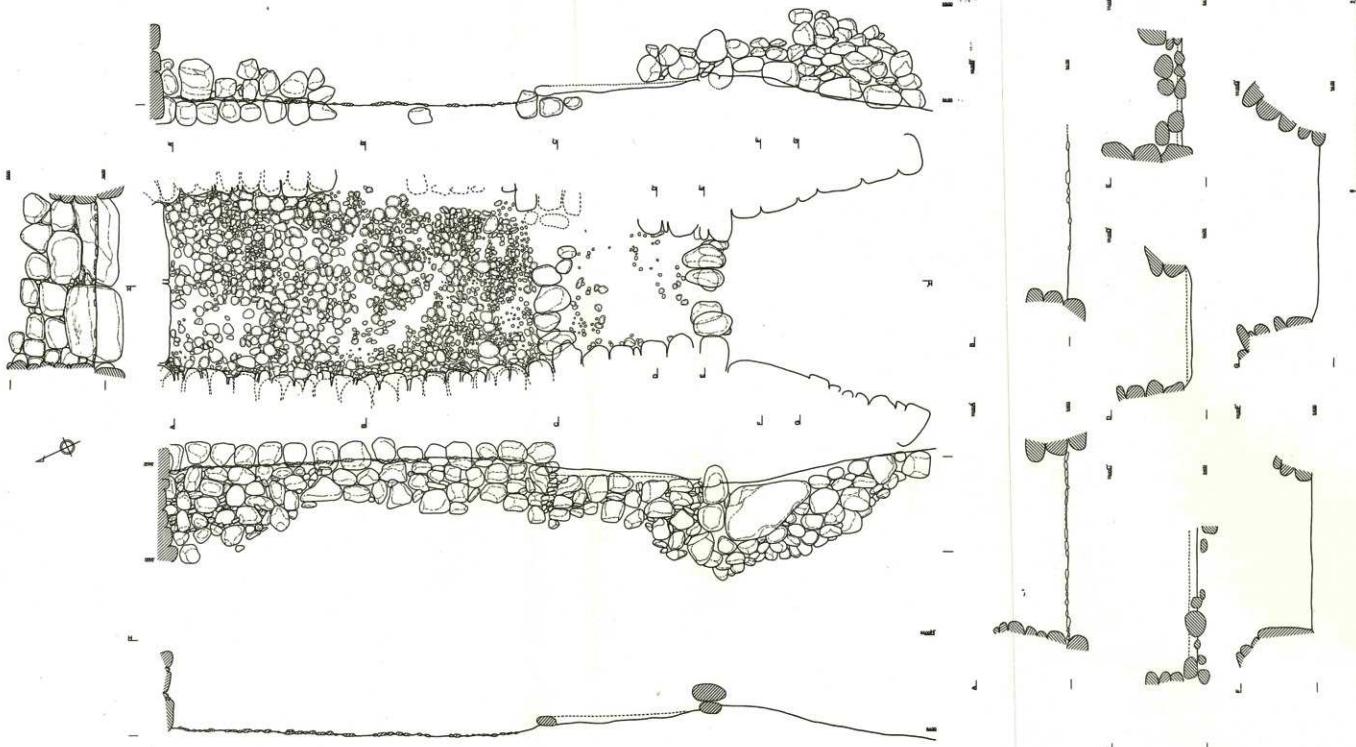
周堀については全体は調査できなかったが幅は10.2~10.5mでかなり広く、底面は礫層露出面に相当し、平坦面になっている。下部葺石帯据レペルから1.0~1.1m低くなる。外周は整った円形プランでは無いことがわかる。ただし内周については、墳丘本体の中心から半径13.7mのライン上に接しているので、内側ラインは整ったプランが推測される。実際のラインはやや内側になるので内径は26.5m前後になる。外径は現状で推定すれば、直径50mに近い大規模な周堀になる。堀内から埴輪片が数片出土している。

下部葺石帯と周堀内端まで約5mの内庭帯（仮称）が巡る。下部礫石帯根石レベルと同位で周堀に続くと思われるが、埴丘盛土下の旧地表面である黒色土上面より30~40cm高くなっている。埴丘下の黒色土層は周堀まで連続しないで、途中で不明瞭になる例が多いが、これは内庭帯の存在とともに、ここに何らかの地業が施されていることが考えられる。埴丘の下部葺石の根石はローム土を黒色土上に積み上げた上に据えられているところがあり、したがって旧地表面とのレベル差は若干の盛土の存在を意味すると考えられる。その際、表土（黒色土）も動かされ、それが黒色土層の連続を不明瞭にしていると思われる。土層では明確にできなかったが、埴丘裾と同レベルの整った内庭帯が巡るものと思われる。

石室と埴丘の構築については外部調査後に各部分を切断し、構築状況を観察することができる。石室は旧地表面の黒色土上にまず作られる。特に掘形（ホリカタ）施設はない。黒色土上に砂利混入の粘土質ローム土でたたきしめを行い（約5cm）、この上に石室および後ごめの根石を置く。石室根石は特に大形の礫を使用するが、据えつけのため溝状にくぼみをつけ、固定している。相互に接しており、上面レベルもきれいにそろえ、コーナー部も2次移動をさせない配慮を施す。側壁根石下の黒色土は重量を受けて固くなっていた。後ごめは幅4~4.5m、奥行5.4mの「逆U字形」プランで外側に大形礫を並べて区画する。その中間には礫をつめる。ここでは砂利は全く使用していない。なお玄門部まで後ごめ外側石が続くが、これは後道構築工程との時間差を示す。後ごめ基礎面築造後、石積みを順次行い、その背後は砂利が主体となってつめられる。後ごめ外側は礫を集中的に置く。後ごめ外側は各工程毎に礫や蔽きしめた土層が水平になって連続している。なお、軟質の黒色土の薄い層が連続する部分がかなりあった。義道部は後ごめ外側に礫を置かないが、玄室と同じ後ごめを施していた。床は玄室と同様に砂利を混入した粘土質土を基盤層としている。義道入口面は左右に石積み面が広がっていた（52図）。これは高さ1m、全長5.4mの石積み面があり、葺石帯の如くであるが、より丁寧に積み上げ、平面プランは上部葺石帯の円形プランと一致する。その上端と下端は上部葺石と下部葺石のそれぞれの根石に一致する。この部分は中段構造があるため埴丘完成後は全く盛土中に隠れてしまうところである。義道後ごめの外側石の位置であり、後ごめ部より長く張り出し、より丁寧に作られる。

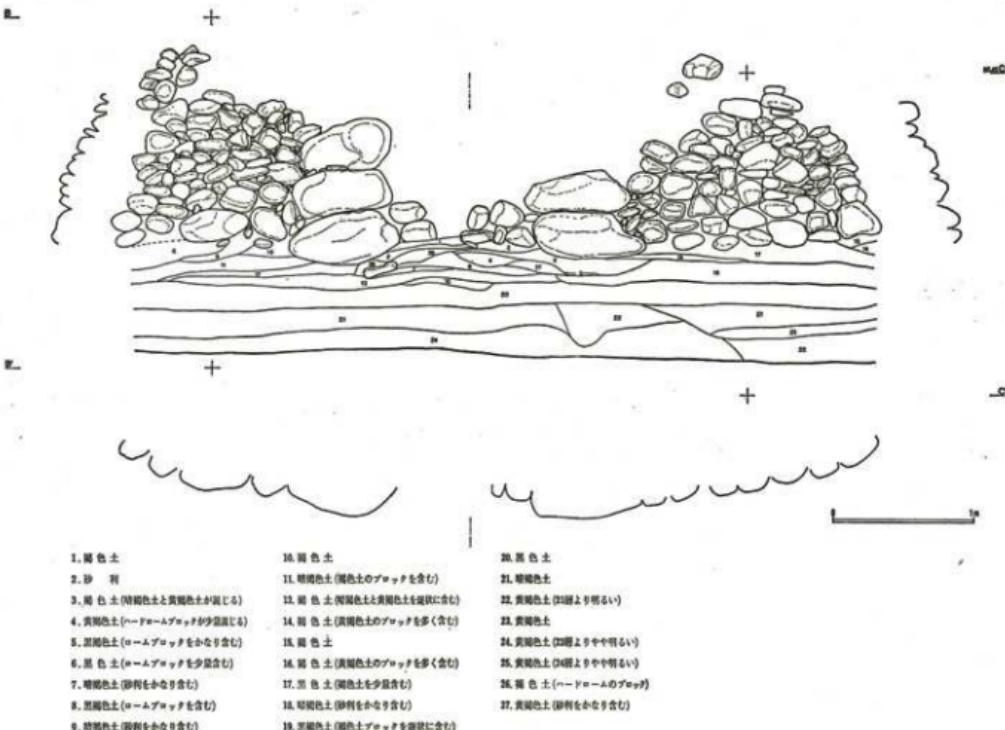
埴丘切断面の土層堆積を概観すると石室被覆が優先し、かん丁寧に土を積み上げていることが知られる。特に上部にゆくにしたがい細かく丁寧に積み上げる。上部に粘土層があるが、天井部被覆粘土である。天井直上部分はもっと厚いものと思われる。中軸から2m離れた粘土層レベルが床面上1.8mであるので少くとも天井部はこれよりも高いことが推定できる。石室被覆工程も數次あることが土層の厚さや傾斜に示されているが、両側壁側の土層傾斜は奥壁側よりもかなり急傾斜である。奥壁側は水平堆積部分が多いのであるいは構築の作業場のような役割を果した部分と思われる。石室被覆後は周縁部に盛土をしてゆくがかなり粗雑な積み方で、しかも一時に大量の土を投入していることがわかる。堆積が水平に近くなるのが特徴である。葺石帯はある程度盛土が仕上がった後に、該当部分を深く抉り取り、その内部に他の土を入れながら礫をさし込んで積み上げている。

石室内遺物出土の状況については石内室から多くの遺物が検出された。石室破壊は床面までは進



第51図 三ヶ尻林遺跡 4号墳石室および断面図

第52図 三ヶ尻林道跡4号墳石室廻り正面図



まず、又床面状況も特に後世の擾乱を受けた痕跡は無い。出土遺物は直刀4本、刀装具2（鞘尻金具1、鍔貴金具1）鐵鎌20本以上、刀子6本分、弓金具（棒状金具）4個、銅鈎4個（2対）、耳環4個、ガラス玉類（丸玉・小玉）257個、水晶切子玉12個、土小玉（練玉）95個、埋木玉1個、人骨、歯である。直刀は両側壁際で各2本出土している。3・4は壁際に接し、奥壁に柄頭部を接して置いたものである。2は右壁に棟部を接するように置く。これに接して鐵鎌束が全く同一方向に置かれ同時副葬を示す。また人骨群6・7（頭骨及び歯）が直下で検出され、これらより新しく置かれたことを示す。直刀1は2と刃の向きは同じだが、方向が異なるのでこの鐵鎌束の矢柄を避けて置かれたことも考えられる。その他のものはやや散在するが、刃先方向は一致するので当初はこの付近で東ねられていたものであろう。刀子は銅鈎周辺の3本（分）は注意される。銅鈎が着裝されていた場合、人体の腰部付近になる。鐵鎌束・直刀2グループの下にある刀子も散乱グループに入るとすれば、2次の副葬時が示される。弓金具としたものは從来用途不明の棒状鉄製品とされていた遺物で両端に小突起と花弁状に開く部位をもつてある。近年これを弓（箭り弓）金具の一部とする説が出されているのでこれに従うものである。（田中新史「古墳出土の箭り弓」伊知波良1 1979）直刀2および鐵鎌一括と同一地点で出土したがレベルは直刀より下になる。（他の3本は床砂利のフルイ分けで見つかったもので位置不明である。）

銅鈎は2対あるが通常の伸展葬の場合、同一人の両腕にあったとは考えにくい位置である。しかし3(48)・4(49)と1(46)・2(47)の銅鈎はそれぞれ対になり、後者は腕の骨（左）の一部が入っており確実な着裝例である。耳環は1(50)・2(51)が隣接しており対になる位置である。他の2個もこの付近で出土しているので対になってあったものと思われる。玉類は多数出土している。便宜的にガラス玉群7ヶ所、切子玉群1ヶ所、土小玉（練玉）群4ヶ所とした。各群は他種の玉類を含む場合もある。ガラス玉1群は43個のガラス玉のみで耳環に接して出土している。ガラス玉2群は17個でこれもその位置から耳環飾り玉群と思われる。ガラス玉3群は6個である。ガラス玉4群は切子玉群中にあり、これらと組み合う玉飾りで4個あった。ガラス玉6群は23個のガラス玉と3個の土小玉を含む。ガラス玉は20cm四方に集中していた。ガラス玉7群は6群と隣接する、5個のガラス玉、土小玉1個、埋木玉1個を含んでいる。埋木玉は群の南端で検出された。ガラス玉8群は極少のガラス玉49個と土小玉1個が10cm四方に集中していた。その他床面砂利を洗い出しガラス玉110個（破片を含む）を検出している。水晶切子玉群は1ヶ所で6個の切子玉が15cm四方に環状分布で検出された。（切子玉№1と2付近に切子玉№6があった。）その他この付近で1個出土しているので少なくとも7個の切子玉が連なっていたものと思われる。残りの4個体は床砂利水洗中に検出した。土小玉群に出土位置が玄門寄りに片寄る。これらは土製の玉で練玉と称されるもので、表面に漆様の黒色被膜をもつ。土小玉1群は3個である。土小玉2群は2個、土小玉3群は26個が連珠状になっていた。土小玉4群は40個がやや散乱状態で検出されている。その他の土小玉は床砂利水洗中に発見された。人骨および歯はかなり散乱している。各内容は附篇で述べられているが、性別不明の少年期1体、青年または壮年期女性2体、壮年（～熟年初期）の男性1体の合計4体の人骨の存在が推定されている。

